



文化財愛護
シンボルマーク

大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書

～一般県道本庄福富松江線(大海崎工区)新世紀道路ネットワーク整備事業(改良)に伴う発掘調査～

第1分冊



2006年

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団



大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書

～一般県道本庄福富松江線（大海崎工区）新世紀道路ネットワーク整備事業（改良）に伴う発掘調査～

第1分冊

2006年

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

序

わたくしたちの郷土、松江市は歴史の豊かな土地柄で、古くから幾多の文化を華開かせてきました。市内の各所には、その名残を伝える文化財が残され、文化の豊かさを今も物語っております。本市はまた、国際文化観光都市として、豊かな文化の発信拠点として日々活動しております。

財団法人松江市教育文化振興事業団では、この郷土の文化遺産を守り、現在に活かし、次の世代に伝えるため、ささやかではありますが幾つかの事業を行っています。埋蔵文化財の調査・研究もそうした活動の一環にあります。現在の松江市には1800箇所を超える遺跡が知られていますが、これらの遺跡には旧石器時代から江戸時代までの非常に長い年月を通じて、私たちの先人による努力が刻まれているといってもよいでしょう。

本書に掲載いたしました山津窯跡・山津遺跡は、松江市大井町に所在する古墳時代～平安時代の須恵器の窯跡を中心とする遺跡群です。大井地域の須恵器の窯跡については『出雲国風上記』に「陶器を造れり」と記載があることなど、全国的にも著名な窯跡のひとつであります。しかしながら、これまで発掘調査の機会が少なく、詳細な内容は不明な点が多くありました。今回の調査では膨大な遺物を検出しておらず、謎の多かった大井窯跡群の歴史的な解明に一步、近づくことができました。

本書は山津窯跡・山津遺跡の発掘調査報告書でございます。本報告書が地域の歴史解明の一助ともなりましたら望外の喜びと致すところでございます。

最後になりましたが、調査から本書作成にいたるまで、ご助力を賜りました関係各位に深謝の気持ちを表すとともに、今後とも文化財の保護に対するご理解とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成18年3月

松江市教育委員会
教育長 福島律子

例　　言

1. 本書は平成13（2001）年度～平成17（2005）年度に実施した島根県松江市大井町に所在する山津窯跡・山津遺跡の発掘調査報告書である。
2. 試掘調査は松江市教育委員会が担当し、現地調査は財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した。
3. 調査組織は以下の通りである。

依頼者 島根県松江土木建築事務所

主体者 松江市教育委員会

事務局 松江市教育委員会 教育長 山本弘正（～平成17年5月20日）

福地律子（平成17年5月21日～）

副教育長 友森勉（～平成14年3月31日）

中島秀夫（平成14年4月1日～平成16年3月31日）

清水伸夫（平成16年4月1日～平成17年5月31日）

川原良一（平成17年6月1日～）

文化財課課長 岡崎雄二郎（平成17年6月1日から参事）

調査係係長 飯塚康行

実施者 財団法人松江市教育文化振興事業団

理事長 松浦正敬

専務理事 米田吉雄（～平成14年3月31日）

田中寿美夫（平成15年4月1日～平成17年3月31日）

長野正大（平成17年4月1日～）

事務局長 吉岡正夫（～平成15年3月31日）

長野正大（平成15年4月1日～平成17年3月31日）

松浦克司（平成17年4月1日～）

調査係長 渕古謙子

調査員 江川幸子・藤原哲・廣瀬貴子（平成13年度・A～D区）

石川崇・藤原哲・廣瀬貴子（平成14年度・E・F・H～N区）

藤原哲（平成15年度・J～2区）

藤原哲（平成16年度・H～2区）

江川幸子・藤原哲（平成17年度・G区）

藤原哲（平成17年度・報告書作成）

調査補助員 稲部文生（平成13年度）

高橋真紀子・金坂有史・陶山隆・秦愛子（平成14年度）

秦愛子（平成15～16年度）

野津里佳・野津哲志（平成17年度）

4. 発掘調査および遺物整理、本書作成に係わる費用の全額を島根県松江土木建築事務所が負担した。
5. 本書の執筆は各現地調査の項については、江川幸子、石川崇、藤原哲、廣瀬貴子のそれぞれの担当者が行い、遺物の項目に関しては藤原が行った。調査の経緯については松江市教育委員会が担当した。中村唯史、渡辺正巳、中村亮仁、関和彦、平石光、小林謙一、春成秀爾、新免歳靖、時枝克安、一瀬久嘉、竹内博史（順不同敬称略）の各先生には貴重な玉稿を頂いた。記して謝するものである。なお、日次と文頭にはそれぞれの文責を記している。
6. 報告書の編集は藤原がこれを行い、秦愛子・野津里佳がこれを助けた。
7. 発掘調査及び遺物整理、報告書作成には、下記の諸氏の参加・協力を得た（五十音順・敬称略）
東裕美、飯野正子、石橋強、いなか舎、福田陽介、井上喜代女、井上博之、岩橋康子、上野景子、内田鶏子、大森一貴、大森裕子、小川春江、景山光子、金乗允津子、北島和子、高麗優子、小山泰生、坂本玲子、佐藤祐介、善家幸子、鹿野純子、菅井志奈子、菅井ハルコ、菅井光栄、高尾万里子、田中和美、角田ミヤ子、時安順子、中村律子、永瀬久裕、野津庫喜、野津郁子、野津市夫、野津清子、野津潔、野津林子、野津末子、野津寿美子、野津尚美、野津登、野津皓枝、野津益人、野津美恵子、野津美智子、野津桃、野津安江、野津豊、藤原舞、堀江五十鈴、松尾澄美、松本初枝、水野保夫、村田理恵、守屋かおる、安田典史、吉岡正樹、吉岡梨智子、米原園子、若村朗利。
8. 下記の諸氏・諸機関には現地調査・報告書作成にあたりご助力・ご協力を賜った。（五十音順・敬称略）出雲古代史研究会、大井町自治会、川谷工房、国立歴史民族博物館、島根県教育委員会、島根考古学会、島根県立古代文化センター、島根県立博物館、島根県埋蔵文化財センター、島根県八云立つ風土記の丘、松江市教育委員会、栗山窯、池淵俊一、一瀬久嘉、伊藤徳広、乾哲也、岩橋孝典、内田伸雄、大谷晃二、角田徳幸、川谷房光、久保田一郎、足田敦、小林謙一、佐伯純也、新免歳靖、白石耕治、白石純、関和彦、竹内博史、武田健次郎、田中義昭、玉木秀幸、露榮靖子、時枝克安、中原斉、中村唯史、中村亮仁、長岡住右衛門、西尾克己、丹羽野裕、野々村安浩、濱田竜彦、濱隆三、春成秀爾、林健亮、林潤也、原田敏照、平石光、平野芳英、平野卓治、東森一良、東森晋、松尾充晶、松本岩雄、三辻利一、村上勇、望月精司、森田喜久男、柳浦俊一、山田康弘、渡邊貞幸、渡辺正巳。

凡　　例

1. 本書に掲載した地形図の北方位は座標北を、遺構実測図等の北方位は磁北を示す。また、標高はTPを基準としている。
2. 調査にあたっては現地地形や遺構の主軸にあわせた任意の地区割りを行った。
3. 十色は各現場担当者の肉眼観察によるものと、「新版標準上色帳」1990年度版がある。
4. 遺構名は遺構・自然地形を問わず、調査を実施したものについては、各調査区において任意で通し番号を付けた。各通し番号は最初にS、次いで調査区のアルファベットを付した、例えばA区の一番日の遺構はS A01、D区の2面目30番日の遺構はS F230となる。但し、窓跡、Ⅱ河道など、現地調査において性格が明瞭なものについては1号窓跡、旧河道3などの名称を付している。また、混乱を避けるため、可能な限り現地調査での遺構番号を踏襲した、そのため欠番が生じているものもある。
5. 遺物実測図の縮尺は上器1/4、石器1/2・1/3を基準としているが、遺物の状況により一部、変更している。
6. 須恵器の断面は墨塗り、土師器・石は白抜き、木器・瓦・窯壁は斜線、陶磁器はスクリーン・トーンを基本としているが、土製品や、溶着した須恵器などに関しては一部、白抜きで表現している。須恵器の白抜きに関しては注記してある。また、須恵器の焼成具合に関して、被釉、被灰の範囲を淡いスクリーントーンで、変色の範囲に関しては濃いスクリーントーンで示している。
7. 出土遺物の器種名については、第四章・第一節に整理したものに従っている。
8. 遺物番号は調査区毎に通し番号で示してあり、遺物番号と写真番号の図版番号は一致する。
9. 写真は紙面の都合上、報告書に掲載した写真は必要最低限のものと、製作を示す詳細部分のものに限定したが、全ての遺物写真は付録のCDに掲載しているので併せて参照されたい。

目 次

山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書 第一分冊『本文』

序 文

例言・凡例

目 次

第一章 発 掘

第一節 発掘地点と面積（藤原 哲）	1
第二節 調査に至る経緯（飯塚康行）	1
第三節 各地区の造構と遺物（江川幸子・石川崇・藤原哲・廣瀬貴子）	3
A区	3
B区	3
C区	9
D区	20
E区	27
F区	46
G区	71
II区	96
H-2区	269
I区	280
J区	317
J-2区	341
K区	344
L区	344
M区	351
N区	351

第二章 地形と環境

第一節 地質・気候と歴史的環境（藤原 哲）	354
第二節 山津窯跡の自然史的景観（中村唯史）	363
第三節 山津遺跡における花粉分析（渡辺正巳）	366
第四節 山津遺跡出土の種実遺体（中村亮仁）	373
第五節 山津窯跡・山津遺跡をめぐる古環境（中村亮仁）	375

第三章 生 業

第一節 「大井浜」世界の復元（関 和彦）	377
第二節 『出雲國風土記』の須恵器生産記載について（平石 光）	387
第三節 窯業と窯業関連以外の考古遺物（藤原 哲）	390
第四節 山陰地域における須恵器窯と大井窯跡群（藤原 哲）	402
第五節 大井地域の歴史的生産力（藤原 哲）	413
第六節 生業まとめ（藤原 哲）	415

第四章 十 器

第一節 器 種（藤原 哲）	417
第二節 製作技術（藤原 哲）	425
第三節 工具による（ハケメ状の）条痕について（藤原 哲）	435
第四節 ヘラ記号（藤原 哲）	437
第五節 窯道具（藤原 哲）	445
第六節 窯詰め技法（藤原 哲）	450

第五章 年 代

第一節 出土須恵器の編年（藤原 哲）	458
第二節 山津1号窯の地磁気年代（時枝克安・一瀬久嘉・竹内博史）	464
第三節 島根県松江市山津窯跡出土炭化材の ¹⁴ C年代測定 (小林謙・春成秀爾・新免裁靖)	469
第四節 松江市山津窯跡における灰原内の炭のAMS年代測定と樹種（渡辺正巳）	472
第五節 山津1号窯の窯業年数と灰原の分層資料（藤原 哲）	478

挿図目次

第1図	発掘調査区位置図	2
第2図	A区全景	4
第3図	A区出土遺物	5
第4図	A区 S A145出土状況・出土遺物	6
第5図	B区全景	7
第6図	B区土層断面図	8
第7図	B区出土遺物	8
第8図	C区全景	10
第9図	C区土層断面図	11
第10図	S C119遺物出土状況・出土遺物	12
第11図	S C153遺物出土状況・出土遺物	13
第12図	S C201遺物出土状況	14
第13図	S C201溝状遺構出土遺物	15
第14図	C区旧河道3半・断面図	16
第15図	C区旧河道3出土遺物	17
第16図	C区包含層下層出土遺物	19
第17図	C区包含層中・下層出土遺物	21
第18図	D区全景	22
第19図	D区土層断面図	23
第20図	D区II河道7出土遺物①	25
第21図	D区II河道7出土遺物②	26
第22図	D区出土遺物	27
第23図	E区全景	28
第24図	E区全景	29
第25図	E区土層断面図	30
第26図	E区西側包含層下層(旧耕土・褐色土)出土遺物	33
第27図	E区西側包含層下層出土遺物①	34
第28図	E区西側包含層中層出土遺物②	36
第29図	E区西側包含層下層出土遺物③	39
第30図	E区西側包含層下層出土遺物④	40
第31図	E区西側包含層下層出土遺物⑤	41
第32図	E区西側・その他包含層出土遺物	43
第33図	E区東側出土遺物①	44
第34図	E区東側出土遺物②	45
第35図	F区2面全剖面	47
第36図	F区土層断面図	48
第37図	F区2面(内半)造構平面図	50
第38図	S F233・236・断面図	51
第39図	F区 S F233・236出土遺物	52
第40図	S F230(小道状遺構)断面図	53
第41図	S F230(小道状遺構)遺物検査状況	54
第42図	F区 S F230出土遺物①	55
第43図	F区 S F230出土遺物②	56
第44図	F区 S F234出土遺物	57
第45図	S F215(上器割り)出土遺物	58
第46図	F区 S F219出土遺物	59
第47図	F区2面造構出土遺物	60
第48図	F区2面包含層(断面図①・②・③層)出土遺物	61
第49図	F区包含層出土遺物	63
第50図	F区3面平面図	64
第51図	F区3面出土遺物	65
第52図	F区4面平面図	66
第53図	F区 S F403出土遺物	67
第54図	F区4面出土遺物	68
第55図	F区その他の包含層出土遺物	69
第56図	G区調査終了後の等高線図	72
第57図	G区黒色粘質土層出土遺物	73
第58図	G区淡褐色砂質土～灰色砂質土(沙)層出土遺物	74
第59図	G区灰色粘質土～褐色砂質土層出土遺物	75
第60図	G区砂混灰色粘質土～紫灰色粘質土層出土遺物状況①	78
第61図	G区砂混灰色粘質土～紫灰色粘質土層出土遺物状況②	79
第62図	G区砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土層出土遺物①	80
第63図	G区砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土層出土遺物②	81
第64図	G区砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土層出土遺物③	82
第65図	G区砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土層出土遺物④	83
第66図	G区砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土層出土遺物⑤	84
第67図	G区砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土層出土遺物⑥	85
第68図	G区砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土層出土遺物⑦	87
第69図	G区砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土層出土遺物⑧	89
第70図	G区砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土層出土遺物⑨	90
第71図	G区砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土層出土遺物⑩	92
第72図	G区トレンチ出土遺物①	93
第73図	G区その他出土遺物	94
第74図	II区構造検出状況(表除去後)	97
第75図	II区構配図	98
第76図	II区・完掘後等高線	99
第77図	II区 a ラインアゼ出土遺物	101
第78図	II区 b ラインアゼ出土遺物①	102
第79図	II区 b ラインアゼ出土遺物②	103
第80図	II区 c ラインアゼ出土遺物①	105
第81図	II区 c ラインアゼ出土遺物②	106
第82図	II区 d ライン断面図	107
第83図	II区 d ラインアゼ出土遺物①	108
第84図	II区 d ラインアゼ出土遺物②	110
第85図	II区 d ラインアゼ出土遺物③	111
第86図	II区 e・f ラインアゼ上層断面図	112
第87図	II区 e ラインアゼ出土遺物①	115
第88図	II区 e ラインアゼ出土遺物②	116
第89図	II区 f ラインアゼ出土遺物①	117
第90図	II区 f ラインアゼ出土遺物②	118
第91図	II区 f ラインアゼ出土遺物③	119
第92図	II区 g ラインアゼ土層断面図	120
第93図	II区 g ラインアゼ出土遺物①	121
第94図	II区 g ラインアゼ出土遺物②	122
第95図	II区 g ラインアゼ出土遺物③	123
第96図	II区 h ラインアゼ出土遺物①	125
第97図	II区 h ラインアゼ出土遺物②	126
第98図	II区 i ラインアゼ出土遺物①	128
第99図	II区 i ラインアゼ出土遺物②	129
第100図	II区 i ラインアゼ出土遺物③	131
第101図	II区 i ラインアゼ出土遺物④	132
第102図	II区 i ラインアゼ出土遺物⑤	133
第103図	II区 i ラインアゼ出土遺物⑥	134
第104図	II区 i ラインアゼ出土遺物⑦	135
第105図	II区 i ラインアゼ出土遺物⑧	137
第106図	II区 i ラインアゼ出土遺物⑨	138
第107図	II区 j ラインアゼ出土遺物	139
第108図	II区津1号窯平面図(最終床面)	142
第109図	II区津1号窯(最終床面)遺物検出状況	143

第110回	H区山津1号窓平面図(青色砂層・角鉢状土坑)	144	第167回	S H113出土遺物①	221
第111回	H区山津1号窓・床面遺物取上後の遺物検出状況	145	第168回	S H113出土遺物②	223
第112回	H区山津1号窓断面図	147	第169回	S H113出土遺物③	224
第113回	H区山津1号窓立体断面図(轉味は見通し) ······	148	第170回	S H113出土遺物④	225
第114回	H区Aラインアゼ上層断面図	149	第171回	S H113出土遺物⑤	226
第115回	山津1号窓灰原(日区灰原下層)上層断面図 (Aラインアゼ) ······	150	第172回	H区灰原上層出土遺物①	227
第116回	山津1号窓灰原(H区灰原下層)土層断面図 (Aラインアゼ) ······	151	第173回	H区灰原上層出土遺物②	229
第117回	1号窓灰原上層堆積状況図	152	第174回	H区灰原上層出土遺物③	231
第118回	H区Aラインアゼ上層概要図	153	第175回	H区灰原上層出土遺物④	233
第119回	H区山津1号窓出土遺物①	156	第176回	H区灰原上層出土遺物⑤	234
第120回	H区山津1号窓出土遺物②	158	第177回	H区灰原上層出土遺物⑥	235
第121回	H区山津1号窓出土遺物③	159	第178回	H区灰原上層出土遺物⑦	236
第122回	H区山津1号窓出土遺物④	160	第179回	H区灰原上層出土遺物⑧	237
第123回	H区山津1号窓出土遺物⑤	161	第180回	H区灰原上層出土遺物⑨	239
第124回	H区山津1号窓出土遺物⑥	162	第181回	H区灰原上層出土遺物⑩	240
第125回	H区山津1号窓出土遺物⑦	164	第182回	H区灰原上層出土遺物⑪	241
第126回	H区山津1号窓出土遺物⑫	165	第183回	H区灰原上層出土遺物⑫	243
第127回	H区Aラインアゼ出土遺物①	166	第184回	H区灰原上層出土遺物⑬	244
第128回	H区Aラインアゼ出土遺物②	168	第185回	H区灰原上層出土遺物⑭	245
第129回	H区Aラインアゼ出土遺物③	169	第186回	H区灰原上層出土遺物⑮	246
第130回	H区Aラインアゼ出土遺物⑯	172	第187回	H区灰原上層出土遺物⑯	247
第131回	H区Aラインアゼ出土遺物⑰	173	第188回	H区灰原上層出土遺物⑰	248
第132回	H区Aラインアゼ出土遺物⑱	174	第189回	H区灰原上層出土遺物⑲	249
第133回	H区Aラインアゼ出土遺物⑲	176	第190回	H区灰原上層出土遺物⑳	250
第134回	H区Aラインアゼ出土遺物⑳	177	第191回	H区灰原中層出土遺物①	251
第135回	H区Aラインアゼ出土遺物㉑	178	第192回	H区灰原中層出土遺物②	253
第136回	H区Aラインアゼ出土遺物㉒	179	第193回	H区灰原中層出土遺物③	255
第137回	H区Aラインアゼ出土遺物㉓	180	第194回	H区灰原中層出土遺物④	256
第138回	H区Aラインアゼ出土遺物㉔	182	第195回	H区灰原中層出土遺物⑤	257
第139回	H区Aラインアゼ出土遺物㉕	183	第196回	H区灰原中層出土遺物⑥	259
第140回	H区Aラインアゼ出土遺物㉖	184	第197回	H区灰原中層出土遺物⑦	260
第141回	H区Aラインアゼ出土遺物㉗	186	第198回	H区灰原中層出土遺物⑧	261
第142回	H区Aラインアゼ出土遺物㉘	187	第199回	H区灰原中層出土遺物⑨	262
第143回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物①	188	第200回	H区南壁出土遺物①	263
第144回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物②	190	第201回	H区南壁出土遺物②	265
第145回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物③	191	第202回	H区南壁出土遺物③	266
第146回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物④	193	第203回	H区包含層出土遺物	267
第147回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物⑤	194	第204回	H-2×バックス 断面図	270
第148回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物⑥	195	第205回	H-2×バックス 断面図	271
第149回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物⑦	197	第206回	H-2×バックス 斷面図	272
第150回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物⑧	198	第207回	H-2×バックス 斷面図	273
第151回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物⑨	200	第208回	H-2×バックス 斷面図	274
第152回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物⑩	201	第209回	H-2×バックス 斷面図	276
第153回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物⑪	202	第210回	H-2×バックス 斷面図	277
第154回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物⑫	203	第211回	H-2区黒色(灰原)層出土遺物	279
第155回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物⑬	204	第212回	I区灰原区・トレント位置図	282
第156回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物⑭	207	第213回	I区構造配置図	283
第157回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物⑮	208	第214回	I区土層断面図	284
第158回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物⑯	209	第215回	I-3区・トレント土層断面図	285
第159回	H区灰原下層(山津1号窓灰原)出土遺物⑰	210	第216回	I-2区 S 1105平・断面図	286
第160回	S H101出土遺物①	211	第217回	I-1区包含層出土遺物①	288
第161回	S H101出土遺物②	213	第218回	I-1区包含層出土遺物②	289
第162回	S H102出土遺物①	215	第219回	I-1区包含層出土遺物③	290
第163回	S H102出土遺物②	216	第220回	I-1区包含層出土遺物④	291
第164回	S H102(西) ······	217	第221回	I区遺構出土遺物①	292
第165回	S H102(西) ······	218	第222回	I区遺構出土遺物②	294
第166回	(S H101-102 F) 黄色砂礫層出土遺物	219	第223回	I-2区包含層出土遺物①	296
			第224回	I-2区包含層出土遺物②	298
			第225回	I-2区包含層出土遺物③	300
			第226回	I-2区包含層出土遺物④	301
			第227回	I-2区包含層出土遺物⑤	302

第228図	I-2区包含層出土遺物⑤	303	第286図	大井空跡群の各支群出土須恵器の蛍光X線分析②	401
第229図	I-2区包含層出土遺物⑦	304			
第230図	I-2区包含層出土遺物⑧	306	第287図	5世紀末～6世紀初頭の須恵器室	403
第231図	I-3区トレンチ山上遺物①	307	第288図	1期（6世紀後半～7世紀初頭）の須恵器室	404
第232図	I-3区トレンチ山上遺物②	308	第289図	II期～III期（7世紀後半～8世紀）の須恵器室	407
第233図	I-3区トレンチ山上遺物③	310			
第234図	I区包含層山上遺物①	312	第290図	ⅢⅠ期～Ⅳ期（8～9世紀）の須恵器室	408
第235図	I区包含層山上遺物②	313	第291図	V期（9～10世紀）の須恵器室	409
第236図	I区包含層出土遺物③	314	第292図	人形移動モデル	410
第237図	I区包含層出土遺物④	315	第293図	山津1号窯と2・3号窯との位置関係	413
第238図	I-3区耕作者・その他出土遺物	316	第294図	山津2・3号窯出土遺物	414
第239図	J区調査範囲図（トレンチ配置図）	318	第295図	山津遺跡・山津遺跡須恵器種組成①	420
第240図	J区（上段）溝査前地形測量図	320	第296図	山津空跡・山津遺跡須恵器種組成②	421
第241図	J区（上段）追査配置図	321	第297図	山津空跡・山津遺跡須恵器種組成③	422
第242図	J区山津4号窯断面図	322	第298図	山津空跡・山津遺跡須恵器種組成④	423
第243図	J区（下段）T-3・T-6土層断面図	323	第299図	山津空跡・山津遺跡須恵器種組成⑤	424
第244図	J区山津4号窯出土遺物①	325	第300図	坪H（後）の成形院式図	425
第245図	J区山津4号窯出土遺物②	326	第301図	坪Hの製作痕跡	426
第246図	J区山津4号窯出土遺物③	328	第302図	坪Hの切り離し・調整痕	427
第247図	J区山津4号窯出土遺物④	329	第303図	坪F・塊の製作痕跡	428
第248図	J区山津4号窯出土遺物⑤	330	第304図	坪・塊・壺の切り離し・調整痕	429
第249図	J区山津4号窯出土遺物⑥	332	第305図	高杯・巟の製作痕跡	430
第250図	J区山津4号窯出土遺物⑦	334	第306図	壺の製作痕跡	431
第251図	J区山津4号窯出土遺物⑧	335	第307図	壺の製作痕跡	432
第252図	J区（上段）出土遺物①	336	第308図	壺のタキ・内面当て具類	433
第253図	J区（上段）出土遺物②	336	第309図	塊・皿・壺の工具による条痕ほか	435
第254図	J区（上段）出土遺物③	337	第310図	坪Hの工具による条痕	436
第255図	J区（下段）トレンチ出土遺物	338	第311図	壺のヘラ記号	437
第256図	J区表土・トレンチその他出土遺物	339	第312図	坪H壺のヘラ記号	438
第257図	J-2区平・断面図	340	第313図	坪H身・坪F壺のヘラ記号ほか	439
第258図	J-2区包含層出土遺物	342	第314図	坪F・塊ほかのヘラ記号	440
第259図	J-2区S103測量図・出土遺物	343	第315図	高杯・巟のヘラ記号	441
第260図	II-N区トレンチ配置図	345	第316図	鉢・鉢・楕板のヘラ記号	442
第261図	K区トレンチ土層断面図	346	第317図	窓道員	445
第262図	L区トレンチ土層断面図	347	第318図	（甕片軋印）窓台①	446
第263図	L区透構半面図	348	第319図	二次焼成・焼白（転用）の須恵器	447
第264図	L区出土遺物①	349	第320図	（甕片軋印）窓台②	448
第265図	L区出土遺物②	350	第321図	円錐状の須恵器	449
第266図	M区・N区トレンチ土層断面図	352	第322図	窓詰め復元モデル①	450
第267図	M区トレンチ出土遺物	353	第323図	窓詰め復元モデル②	451
第268図	道路位置図	355	第324図	窓詰め復元モデル③	452
第269図	松江及び周辺地域の地質図	357	第325図	（窓詰めを示す）坪Hの溶着・被灰・変色資料	454
第270図	周辺の道路分布図	360	第326図	（窓詰めを示す）坪F・塊・皿に溶着・被灰・変色資料	455
第271図	試料採取地点の位置（山津遺跡E区）	366	第327図	（窓詰めを示す）窓F・窓・皿に溶着・被灰・変色資料	456
第272図	N-1地点の花粉ダイヤグラム	371	第328図	山津空跡・山津遺跡須恵器編年表①	460
第273図	N-2地点の花粉ダイヤグラム	372	第329図	山津空跡・山津遺跡須恵器編年表②	461
第274図	人井沢周辺の字名	385	第330図	山津空跡・山津遺跡須恵器編年表③	462
第275図	人井沢周辺の遺跡分布図	386	第331図	山津空跡・山津遺跡須恵器編年表④	463
第276図	山津空跡と山津遺跡出土の鰐尾	391	第332図	山津1号窯の自然発生磁気強度の分布	467
第277図	人井沢跡群分布図	392	第333図	山津1号窯の交流消磁（10mT）後の 残留磁気の方向の結果	468
第278図	人井沢跡群山上出土物①	393	第334図	山津1号窯の残留磁気の平均方向と誤差の範囲	468
第279図	大井空跡群山上出土物②	394			
第280図	大井空跡群山上出土物③	395			
第281図	大井空跡群山上出土物④	396			
第282図	大井空跡群山上出土物⑤	397			
第283図	山津1号窯灰原出土須恵器の蛍光X線分析	398			
第284図	山津1号窯灰原・山津2・3号窯出土須恵器の 蛍光X線分析	399			
第285図	大井空跡群の各支群出土須恵器の蛍光X線分析①	400			

表 目 次

第1表 H-2区発壁片重量表	290	第9表 ヘラ記号統計表②	444
第2表 松江市の気象①	358	第10表 ヘラ記号統計表③	444
第3表 松江市の気象②	359	第11表 山津1号窓の規模、主軸方位、床面の勾配、	
第4表 周辺の遺跡地名表①	361	地磁気年代推定用の試料数、焼土の状態	465
第5表 周辺の遺跡地名表②	362	第12表 山津1号窓の残留磁気の平均方向	466
第6表 AMS年代測定結果	367	第13表 分析試料一覧	472
第7表 山津遺跡出土種実遺体一覧表	374	第14表 AMS年代測定結果・樹種同定結果一覧	474
第8表 ヘラ記号統計表①	443		

挿図写真目次

挿図写真1 山津遺跡下区の堆積層	365
挿図写真2 A T火山灰層の産状	365
挿図写真3 山津遺跡出土種実	374
挿図写真4 分析試料一覧	475
挿図写真5 樹種電子顕微鏡写真①	476
挿図写真6 樹種電子顕微鏡写真②	477

第一章 発掘

第一節 発掘地点と面積

(藤原 啓)

発掘調査地点は島根県松江市大井町に位置する。この地域を走る県道本庄福富松江線は大正年間に工事されており、この時、窯跡が見つかっていた。1925年刊行の『島根縣史』五巻には「近年、此丘陵端を横断掘削して新道を作りし為、図らずも窯址を横断せしを以て、今は土層面に現はれたり」と記している(旧仮名を改め句読点を付す)。

今次調査はこの本庄福富松江線の道路拡幅工事に伴って実施された発掘調査である。そのため、当初より須恵器の窯が検出される可能性は高かった。道路幅の拡張は約7mであり、部分的に歩道などの部分が付随した。調査の対象となった区間は直線距離にすると約580mの範囲である。

発掘調査は平成13(2001)年度より平成17(2005)年度まで断続的に続けられ、南西の隅からA区、B区、C区、D区……と東に向かって随時行った。個々の具体的な発掘調査面積はA区(171m²)、B区(181m²)、C区(606m²)、D区(753m²)、E区(723m²)、F区(157m²)、G区(158m²)、H区(135m²)、H-2区(66m²)、I区(757m²)、J区(667m²)、J-2区(181m²)、K区(574m²)、L区(1,293m²)、M区(701m²)、N区(139m²) (1区以下の面積はトレンチ以外の未調査分を含む)である。遺物の整理作業は現場作業と平行して行い、平成18(2006)年3月31日をもって終了した。

第二節 調査に至る経緯

(松江市教育委員会 飯塚康行)

島根県松江市土木建築事務所では、県道本庄福富松江線のうち大井町から大海崎町にかけての約13,000m²を対象として県道の拡幅を計画し、平成11年11月24日付け松土発第1782号で松江市教育委員会あてに埋蔵文化財分布調査依頼書が提出された。

これを受け現地踏査を実施したところ、周知の遺跡である山津窯跡が事業計画地内に含まれるほか、遺跡推定地が存在することが確認され、山津窯跡およびその周辺部分は本発掘調査、遺跡推定地部分は試掘調査が必要である旨を回答した。

遺跡推定地部分の試掘調査は平成12年度にトレンチを8箇所設定して実施した。その結果トレンチ6箇所から古墳時代の遺物包含層が確認され、山津窯跡の関連遺跡が存在することが明らかとなった。

この遺跡の取扱いについては、工事計画の変更が困難であることから、事業区域内の本発掘調査を実施することとなり、平成13年4月2日付け松土第348号で島根県松江土木建築事務所から発掘調査依頼書が提出された。

現地調査の実施期間は以下の通りである。

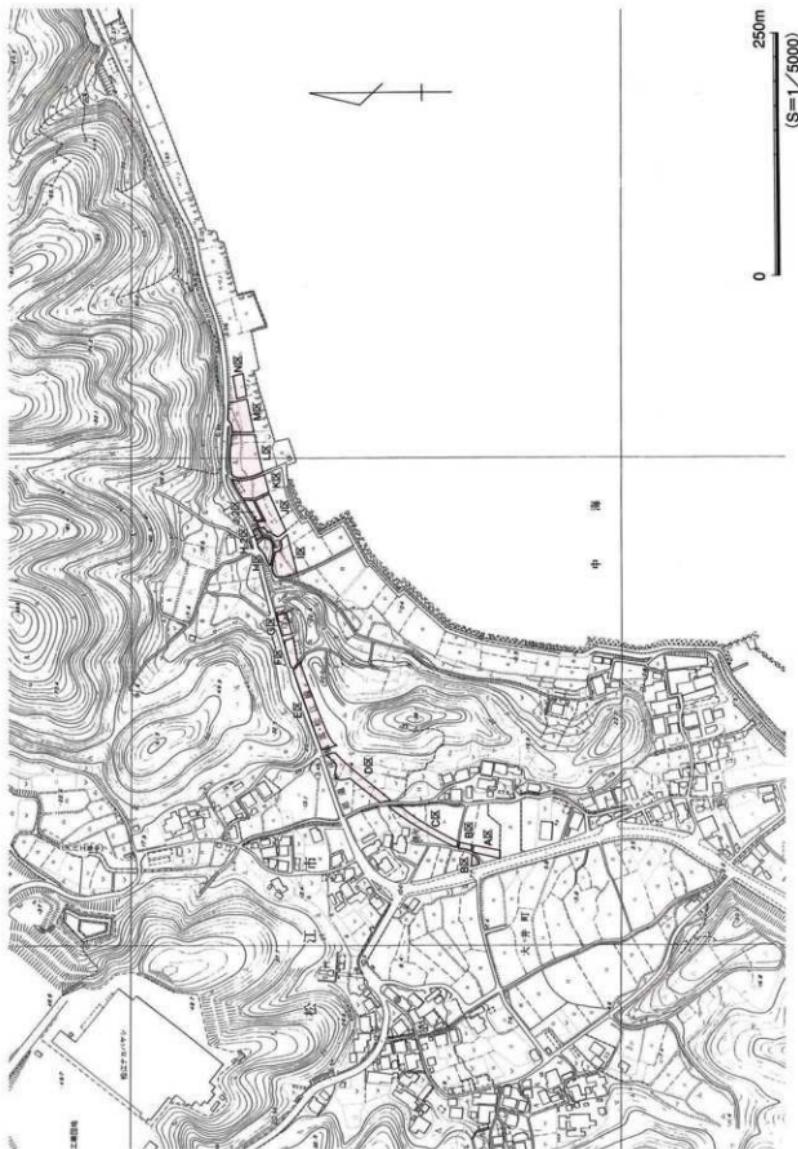
(平成13年度) 平成13年6月18日～平成14年2月28日

(平成14年度) 平成14年4月22日～平成15年2月28日

(平成15年度) 平成15年4月21日～平成15年7月11日

(平成16年度) 平成16年4月12日～平成16年5月22日

(平成17年度) 平成17年5月20日～平成17年6月10日



第1図 発掘調査区位置図

第三節 各地区の遺構と遺物

(編者注釈)

本節の遺構の項目は、各調査担当者が調査直後にまとめた概報を基礎とし、報告書用の補足・編集を行ったものである。編坐者はこれに最低限の文章の統一を図ったに留まる。そのため、若干の不統一感があるが、調査終了直後の、記憶を鮮明な段階における担当者の遺構説・年代観などの意向を尊重して、あえて無理な統一をしなかったためである。

また、遺物の項目は全て藤原が記述したが、記述の器種名については第四章第一節において代表的な器種名を整理しており、概ね、上記の器種名に従い、それ以外は慣習的に用いられている考古学的用語を使用した。また、編年・年代表は第五章第一節に記してあるので、左を参照して頂きたい。なお、遺構・遺物共、文責はそれぞれの欄に記した。

A区 遺構

(廣瀬貴子)

A区は南北27m～東西8～10mの調査区である。図2における、耕作土下の第⑤・⑥層から遺物が出土した。第②・④層のクサリ縫は風化の度合いも進んでおり、第②・④層は氷河時代まで遡る可能性もある（中村唯史氏のご教示による）。第⑦層以下で遺物は確認されなかったが、土層の堆積状況、遺構の有無の確認の為、約2m深掘りした。その結果、遺構は確認されなかったが、自然流路の底の一部を確認した。遺構は耕作土直下の第②～④層の上面で上坑2基、多数のピットを検出した。これらの遺構内からは土師器の甕、土製支脚、鐵の把手、土錐、須恵器の环蓋片、鏡片、高台付环、碧玉の勾玉？の未成品、砥石など、古墳時代中期から奈良時代にかけての遺物が出土している。

A区 遺物

(藤原 哲)

A区から出土した遺物はコンテナ5箱程度で細片が多い。遺物の種類としては須恵器、土師器、石器、土製品などがある。実測可能であった遺物は27点で、A-1・2がSA110出土遺物、A-21～27がSA145出土遺物、A-3～15がII河道1出土遺物で、その他は包含層出土遺物である。

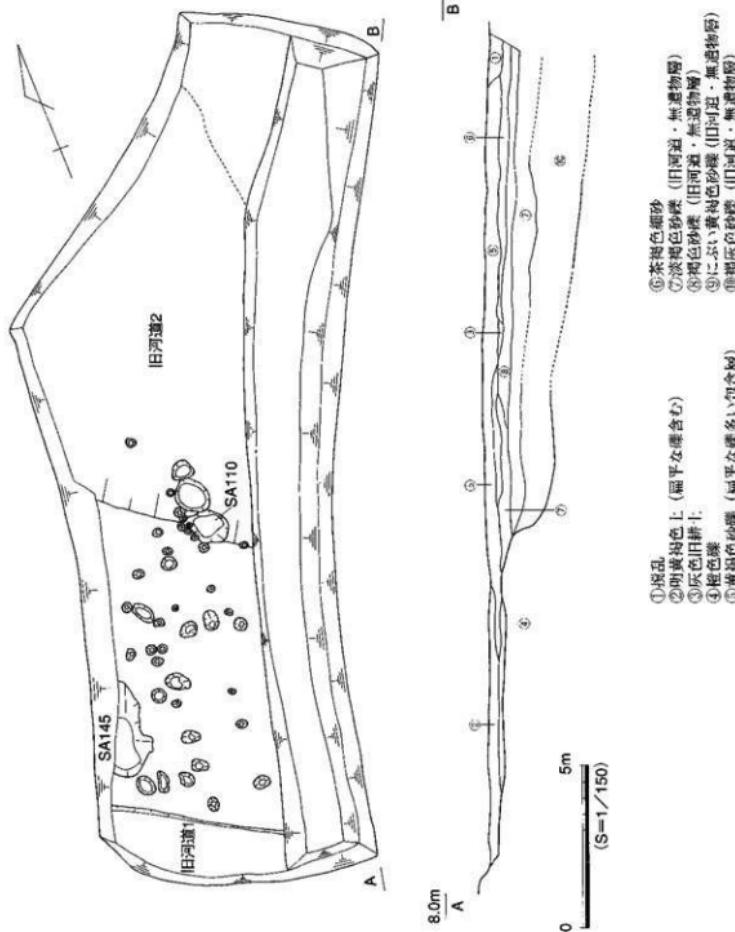
A区は北半分、及び南半分に旧河道が走り、その間に幾つかの土坑・ピット類が検出されている。北側のII河道1から出土した遺物（A-3～15）は須恵器の环H（A-3～5）、高环（A-6、7）、环B（A-8）、壺（A-9）、甕（A-10）、土師質の土錐（A-11、12）、黒曜石の剥片（A-13、14）、砥石（A-15）など、出土遺物には時期幅がある。

遺構出土の遺物は僅かであるが、このうちSA145から若干まとめて出土している。SA145はA区の南西端で検出された長軸2.8m、短軸1.1m（～調査区外へ延びる）を測る不定形の土坑である。出土遺物としては土師質の甕（A-21）、把手（A-22）、土製支脚（A-23）、須恵器の壺（A-24～26）、鉢（A-27）が出土している。山津地域の調査区の中では、甕や土製支脚など、日常的な土師器が目立つのが特徴である。

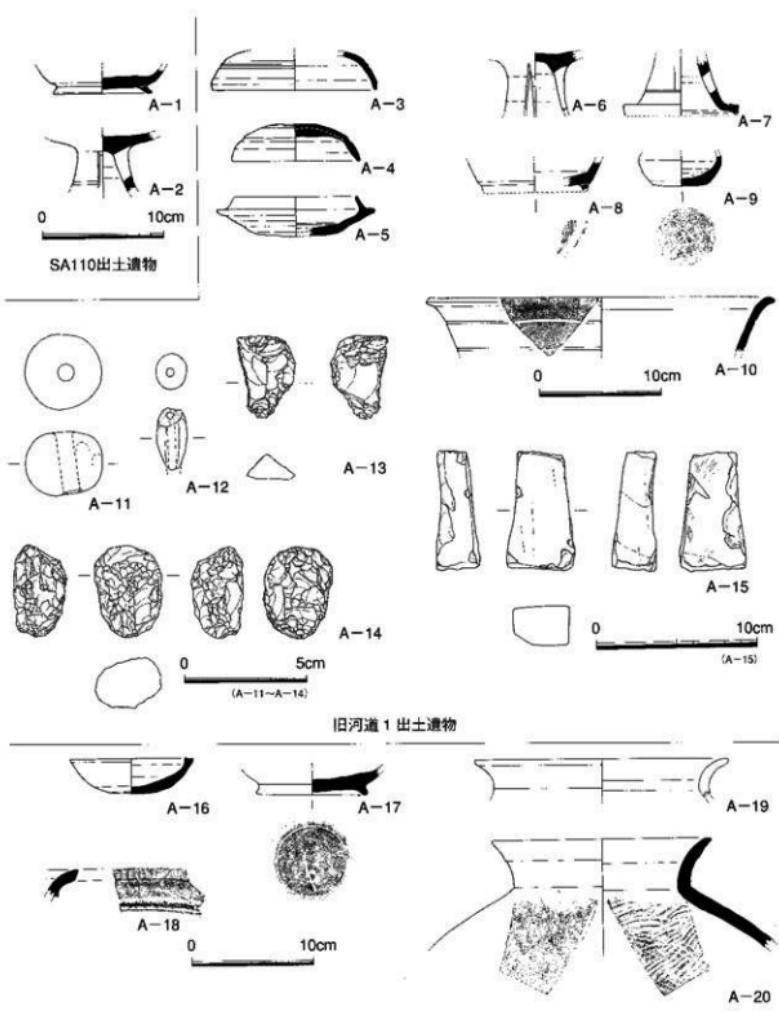
B区 遺構

(廣瀬貴子)

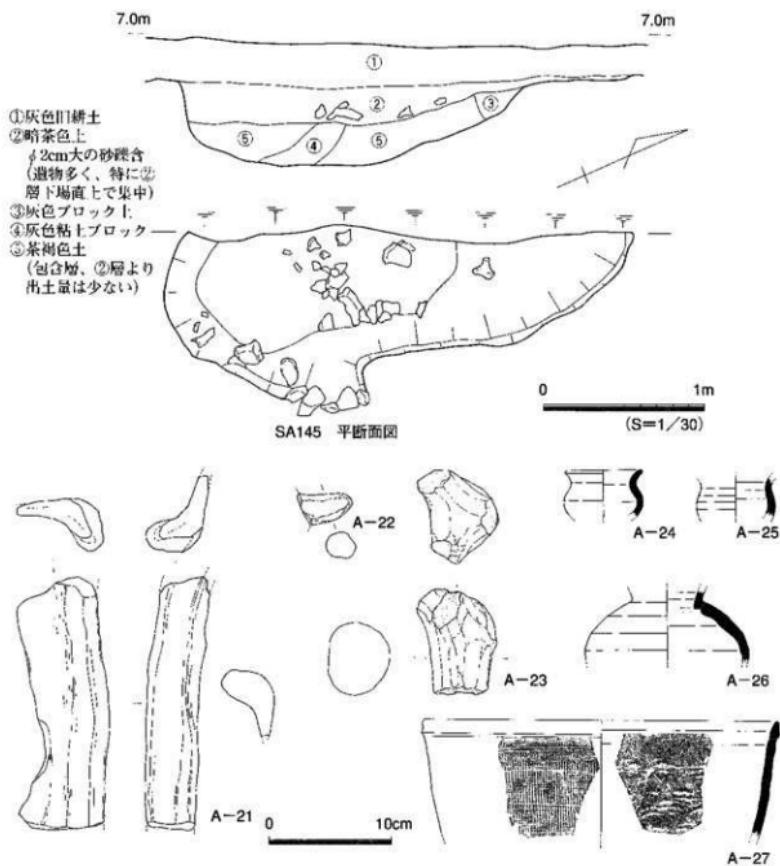
B区は東側と西側に分かれる、B区東側はA区の北、南北11m×東西7mの調査区である。耕地整



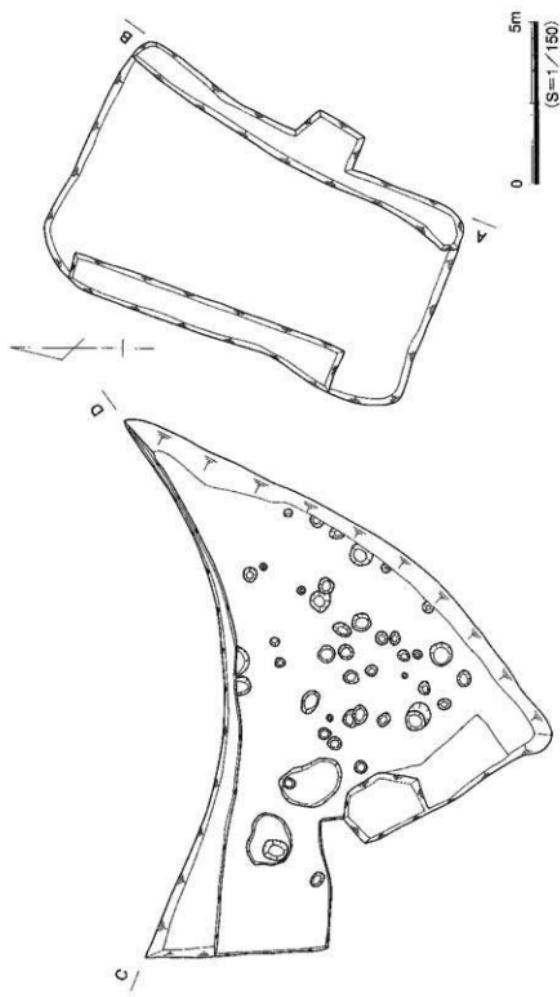
第2図 A区 全景



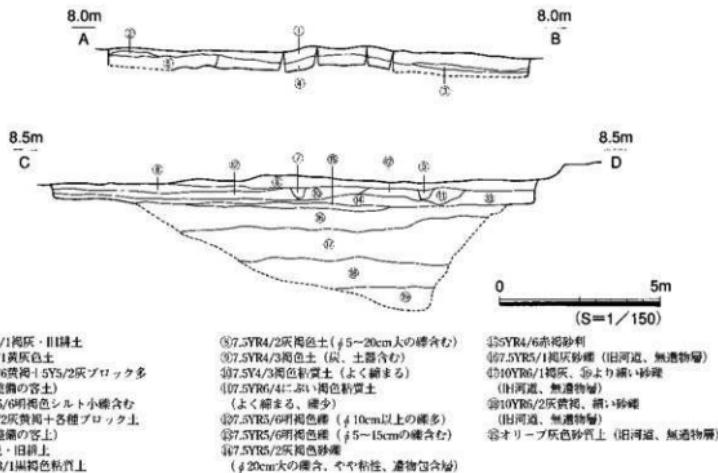
第3図 A区 出土遺物



第4図 A区 SA145遺物出土状況・出土遺物



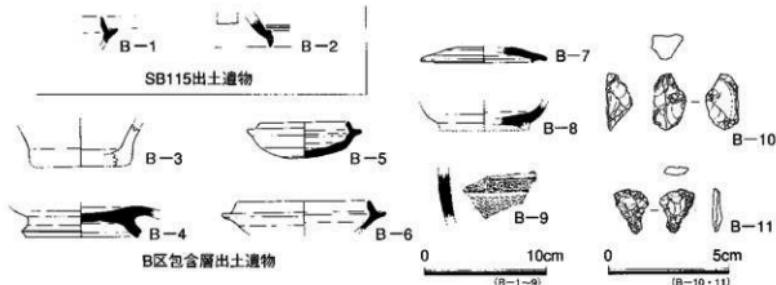
第5図 B区 全景



第6図 B区 土層断面図

理により削平を受けており遺構は検出されなかった。耕作土から土師器片、須恵器片が出土し、それ以下の層から遺物は出土はしていない。

B区西側は南北10m×東西約14mの調査区である。遺物包含層は第⑥～⑯層で、耕作土下の第⑦～⑯層の上面で多数のピットを検出した。ピットの基盤層は第⑥～⑯層から、占堀から奈良時代の遺物が出土しており、奈良時代以降の遺構であると考えられる。第⑯層以下は無遺物層で、第⑯層上面から遺構は検出されなかった。



第7図 B区 出土遺物

B区 遺物

(藤原 哲)

B区は出土遺物の量が少なく僅かにコンテ1箱程度である。細片ばかりで実測可能な遺物は10点ばかりに過ぎない。ほとんどが須恵器片で時期幅が広いが、このうちB-9は甕片で外面に竹管文を施す。B-3は弥生土器で壺の底部片、B-10・11は黒曜石でB-10は剥片、B-11は石錐、又は石錐の欠損品である。

C区 遺構

(廣瀬貢子)

C区はA・B区の北側の、南北70m×東西10mの細長い調査区である。調査区南側と北側で遺構を検出した。

C区の南端では図9の第③層（明褐色礫層）の上面で多数のピット、2基の上坑を検出した。遺物は上師器の甕片、甕片、高环の脚部、須恵器の环蓋、甕片、甕の口縁などである。また、周辺から陶磁器片も出土している。

ピット、土坑の基礎層である第③層（明褐色礫層）から、陶棺片が出土した。大きさ9.8m×5.8m、厚さ1.5mでやや内傾する。縦、横に厚さ0.5mの突帯を付け、一方の突帯は直線、もう一方の突帯は直線ではなく、突帯部分に接する所で屈曲している。外面にカキ目調整を施し、成形時の格子叩きを残す。内面には円弧叩きが施されている。この陶棺片は昭和62年度に行われた池ノ奥C遺跡の特殊上器（報文ではA-1類）の円筒棺の蓋に接合した。池ノ奥C遺跡から直線距離で250m、土砂によって運ばれてきた可能性はあるが、何故この場所にあったかは定かではない。

第④層（褐灰色砂礫層）の上面からも浅いピット状の落ち込みを検出した。この面から土師器片、須恵器片が出土しているが、細片で時期は特定できない。

C区北側からは溝状遺構、旧河道を検出した。溝状遺構SC201は長さ4m、幅70~80m、深さ20cmで北東から南東へ流れている。溝の埋上中からは、高环の脚部、甕片など古墳時代中期の土師器片、須恵器片が出土している。

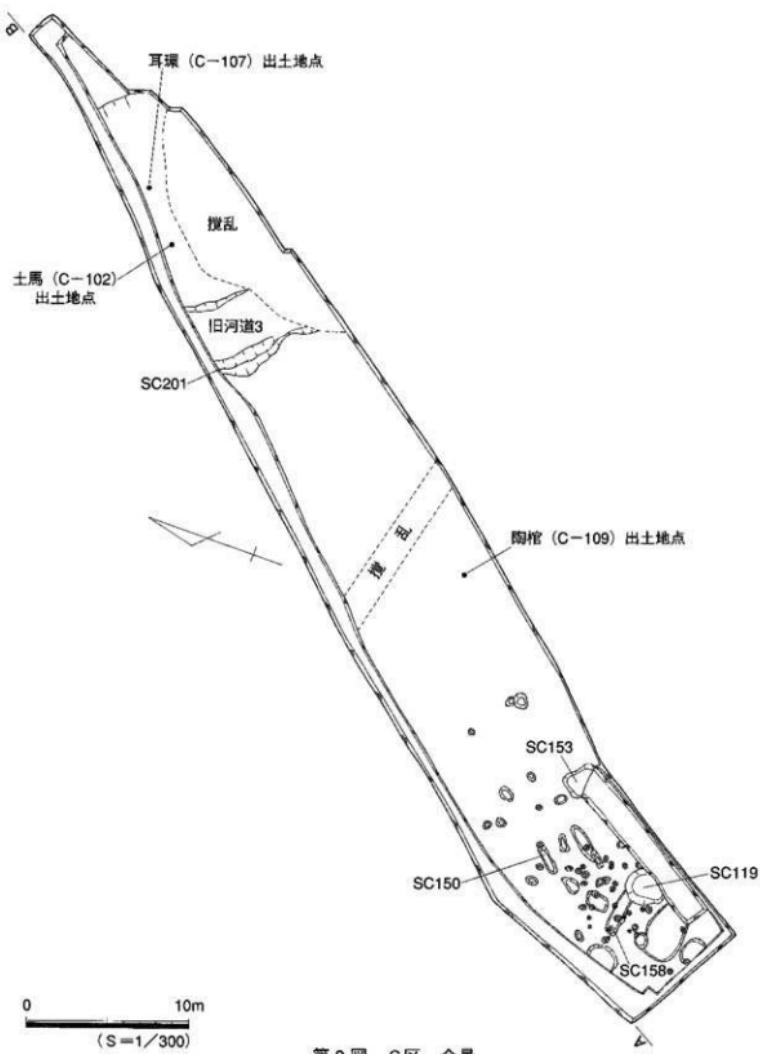
旧河道3は長さ8.50m、幅4.0~5.0m、深さ40~60cm、北西から南東へ流れた水の跡（流痕）である。第⑮層から⑭層はII河道の堆積土層で、第⑯層からは山陰下期の甕が、その他の堆積土層からは、古墳時代中期の高环、甕片などが多く出土した。出土遺物が古墳時代中期に限られておりその頃に埋まったと考えられる。

C区土層断面の第9図・第⑧層から中世の須恵器（亀山焼系統の土器）が、第⑨層からは上馬が出土している。

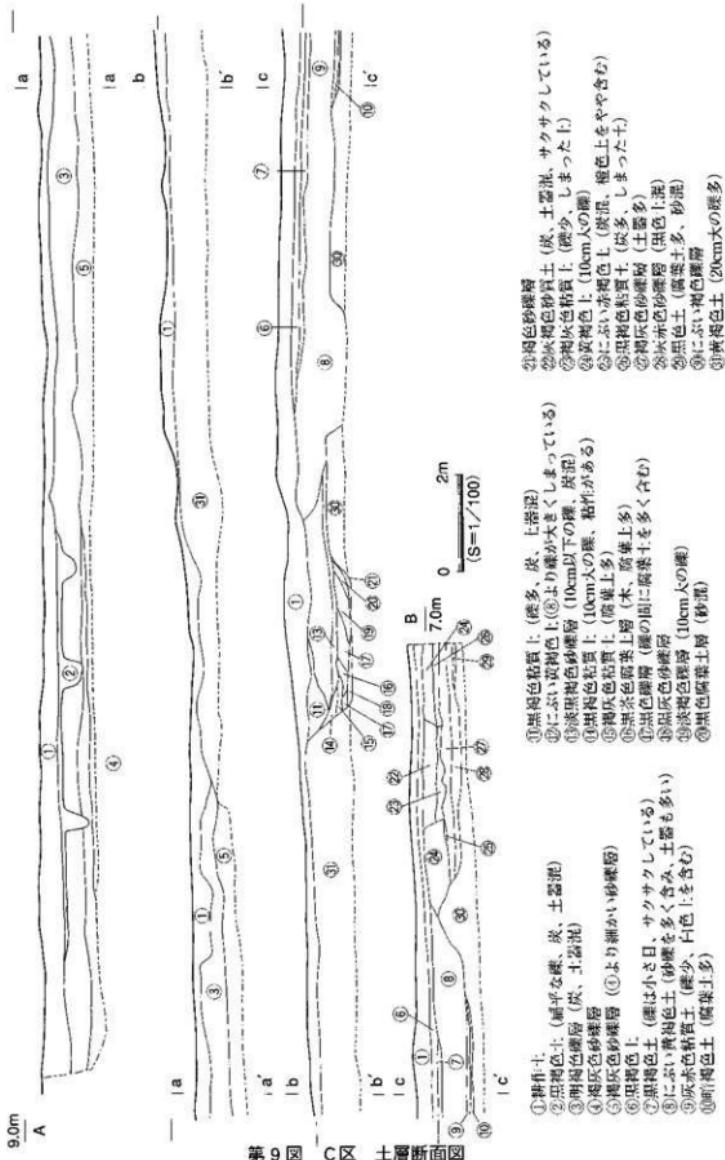
C区 遺物

(藤原 哲)

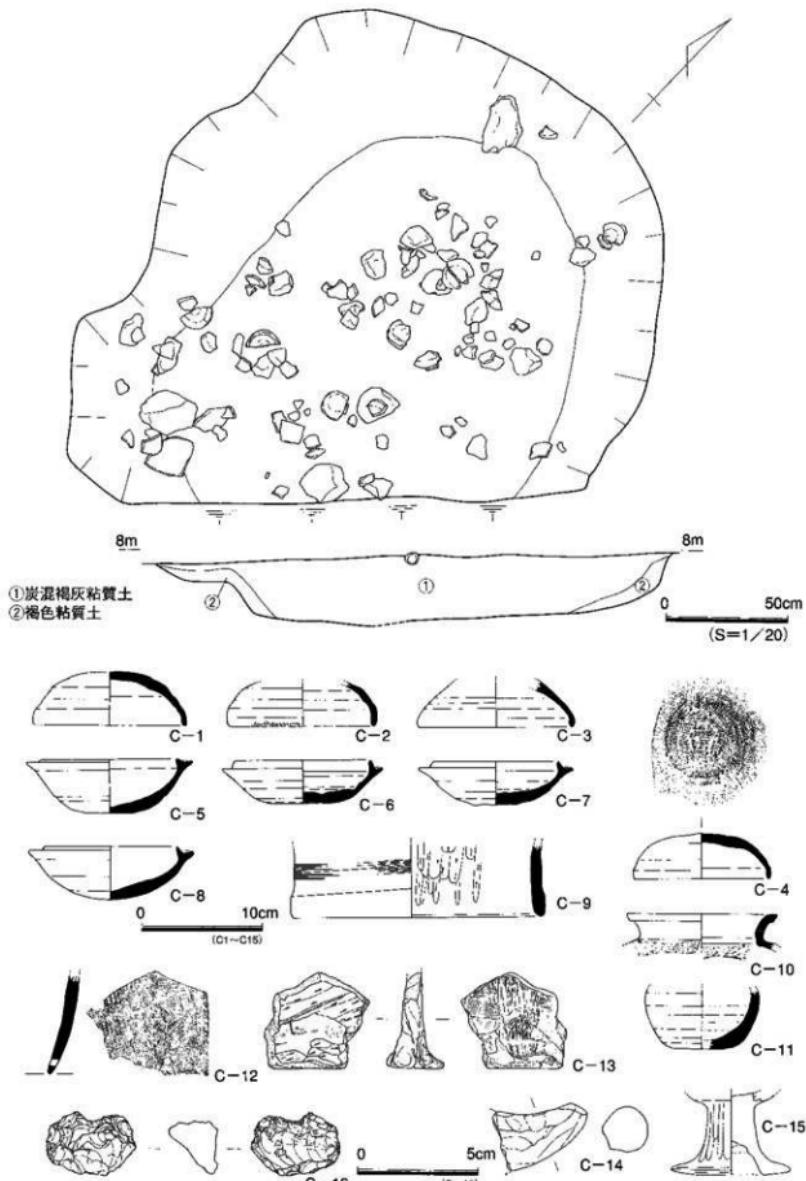
C-1~16はSC119川上遺物である。SC119はC区南西端で検出された上坑で長軸2.65m、短軸1.94m（～調査区外へ延びる）を測る。埋土はほぼ單一の褐色粘質上で須恵器・土師器・石器など人丁遺物のほか、自然礫なども多数検出した。C-1~4は須恵器の環Hの蓋である。いずれも稜線がなく、天井部分も切離後はナデ調整を行う。C-2の口縁端部には刻目状の痕跡があり、C-4の天

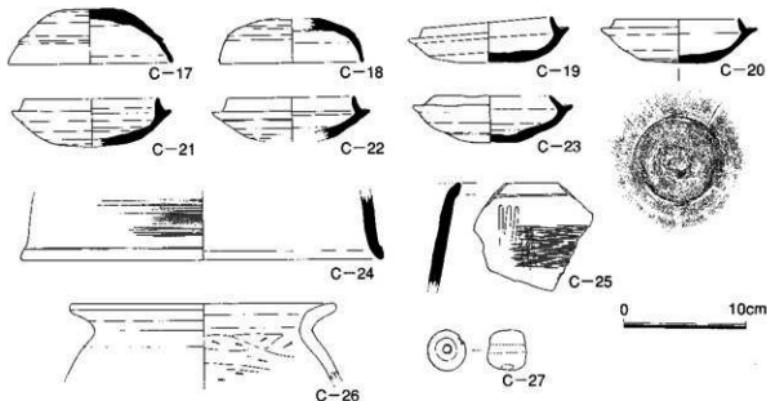
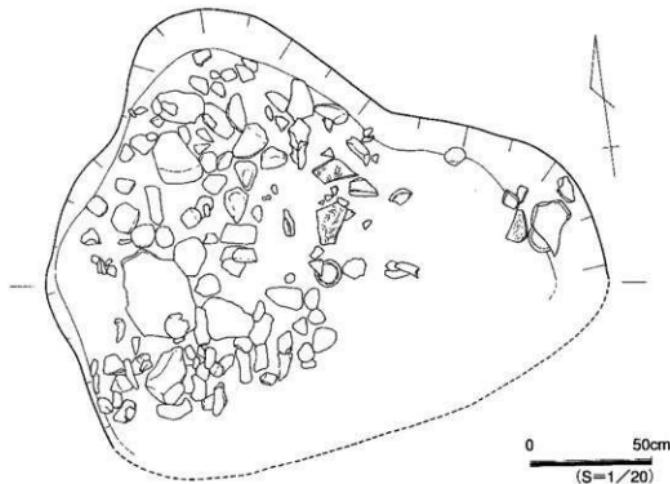


第8図 C区 全景

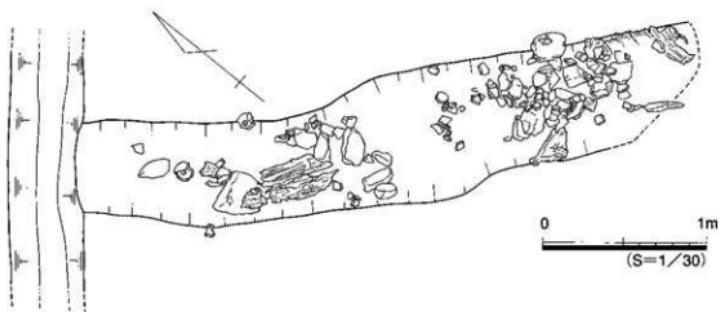


第9図 C区 土層断面図





第11図 S C 153遺物出土状況・出土遺物



第12図 SC 201遺物出土状況

井部には工具によると思われる条痕が見られる。

C-5~8は壺Hの身であり、何れも受部の立上がりが1cm未満と低く、底部は切離後ナデ調整である。C-9は脚部か。C-10は甌、C-11は壺、C-12は瓶片（脚部）で円形の焼成前穿孔が穿かれている。

C-13~15は土師器、C-13は甌の底部細片で内面ケズリ、外面ハケメ調整。C-14は上師質の把手。C-15は土師器の高壺で外面をミガキ、一部に赤彩が残っている。C-16は石器で瑪瑙の剥片である。

C-17~27はSC 153出土遺物である。SC 153は調査区南部で検出された土坑で長軸2.2m、短軸（推定）1.9mを測る。SC 119と同じく、土師器・須恵器の他に多数の自然礫を検出した。C-17~23は須恵器の壺Hで、蓋の稜線は僅かに境が意識されており、身の立上りは1cm程かややそれを切るくらいである。蓋・身共に天井と底部の切離後の調整はヘラケズリを施しているが、C-20の底部のケズリは外周を僅かにケズったのみで底部中央はナデしている（周辺ヘラケズリ）。C-24・25は須恵質の口縁、若しくは脚の破片で同一個体であるかもしれない。

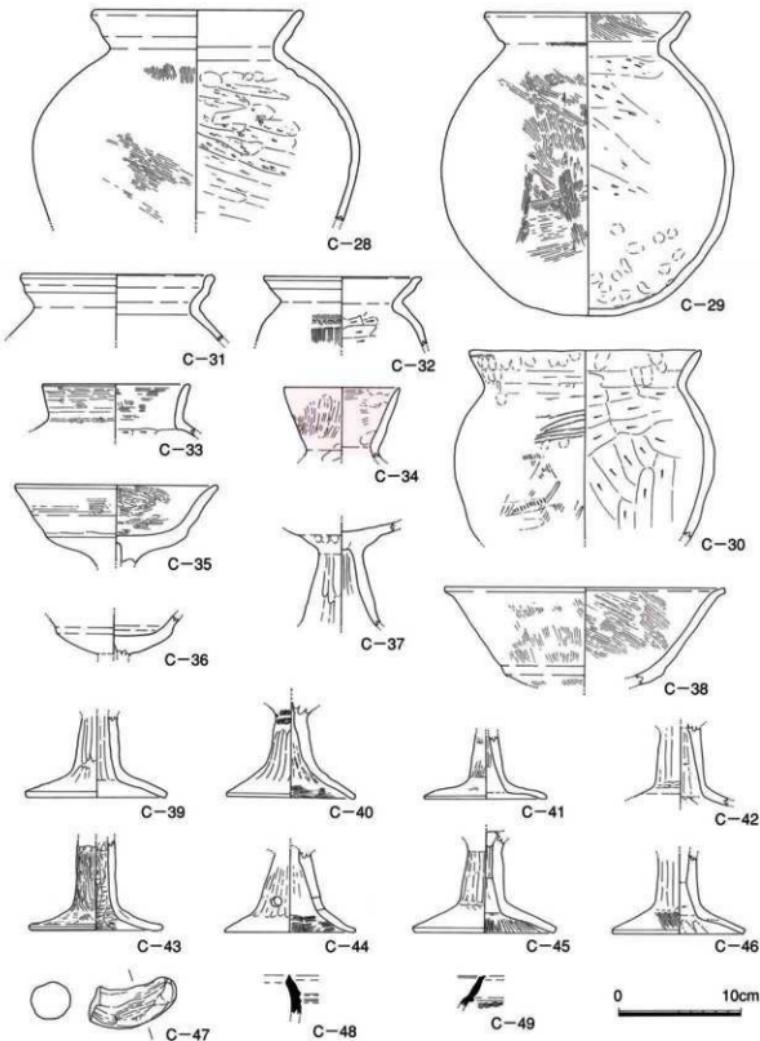
C-26は土師質の甌、口縁～肩部の破片で外面はナデ、内面はケズリ調整。C-27は土師質の土錐で色調はにぶい褐色を呈している。

C-28~71はSC 201（溝状遺構）と旧河道3から出土した遺物である。SC 201と旧河道3は調査区中央よりやや北に位置する地点で検出された遺構で、河道跡（旧河道3）と、その中にもう一段凹んだ溝状遺構（SC 201）からなる。

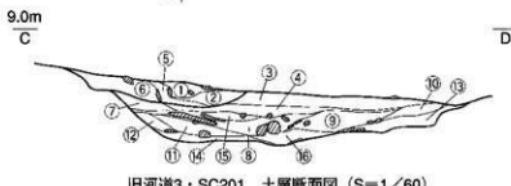
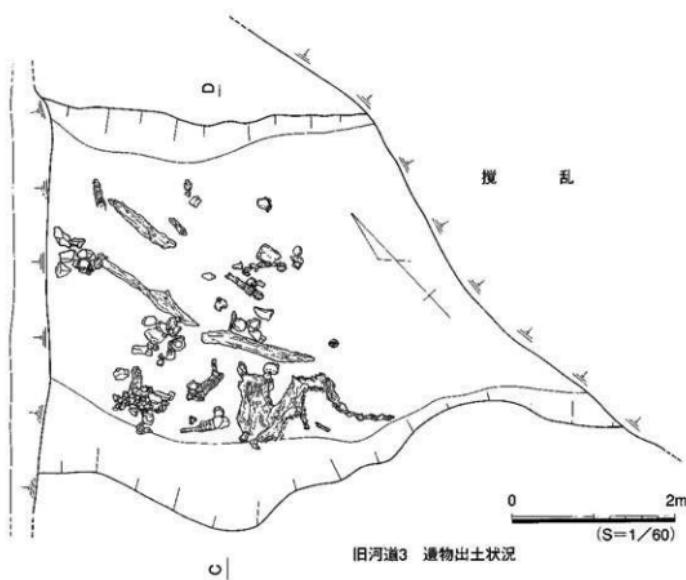
C-28~49がSC 201出土遺物でC-28~33が土師器の甌である。楕円短小な単純口縁で「く」の字形を呈しており器壁は厚い。このうち、C-28・31の口縁には僅かな稜が付き、C-33はほぼ垂直に口縁が立ち上がる。C-34は口縁が直線状に外反する土師器の直口甌で、部分的に赤彩が残っている。

C-35~46は土師器の高壺で、壺片のC-35・38では壺の底部付近に稜が認められる。また、C-35は円盤充填法により脚部と接合している。脚部のC-39~46はいずれもその底部が大きくラッパ状に開く。C-47は土師器の把手である。

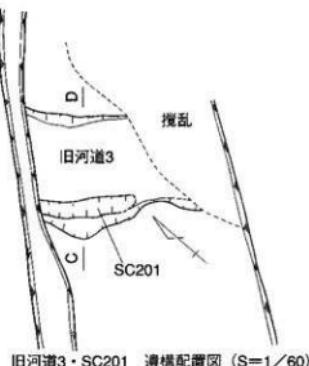
C-48・49は須恵器の小片で、C-48は壺、もしくは高壺の口縁、C-49は甌の細片である。



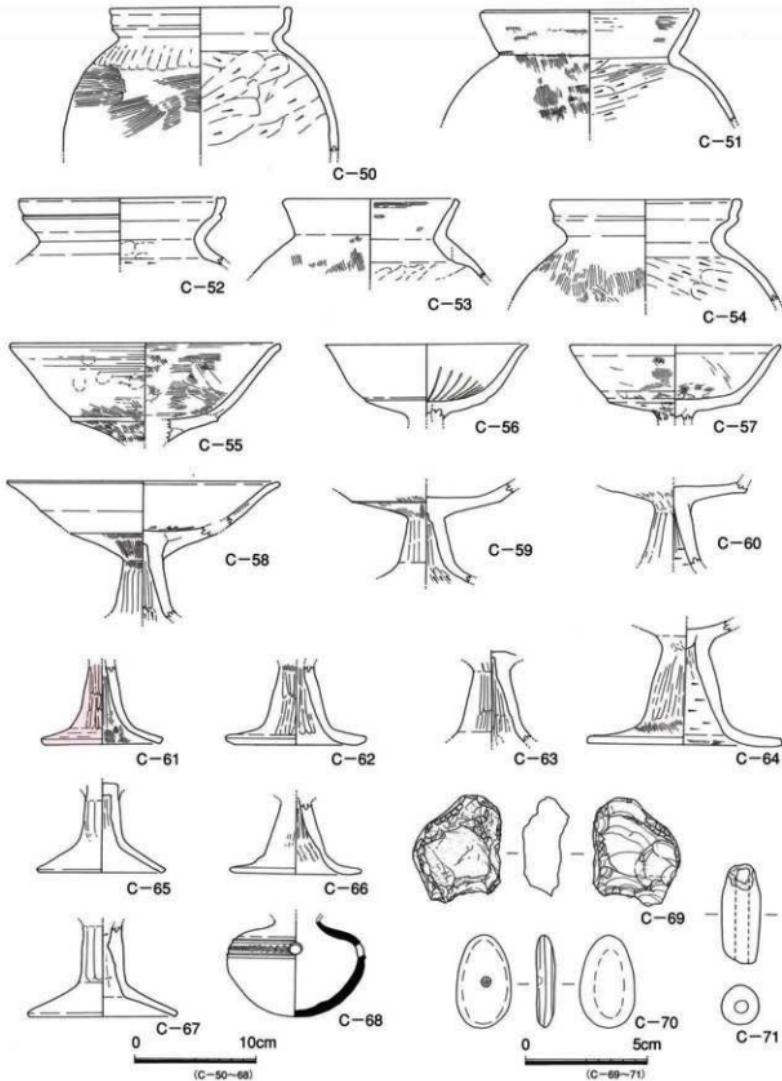
第13図 S C 201溝状遺構出土遺物



- ①淡黒褐色砂質土(炭・上器混)
- ②1cm以下の白色砂を多く含む淡褐色砂
- ③茶褐色砂質土(炭・上器混、小礫・砂粒を多く含む)
- ④淡黒褐色砂礫層(φ2~10cmの大の礫が多くその間に砂が混じる)
- ⑤黒褐色粘質土(炭・礫・砂を含む)
- ⑥黒黄色土(礫・砂を含み、所々に黑色粘質土層)
- ⑦淡黒褐色粘性土(炭を多く含み、φ10cm以下の礫を含む)
- ⑧暗茶色腐葉土(木片多)
- ⑨淡褐色泥(φ2~13cm人の頭幅)
- ⑩黒色腐葉土(細砂含)
- ⑪黒色礫(φ7cm以下の礫、その間に腐葉土が入り込み粘性がある)
- ⑫褐色粘質土(疊合)
- ⑬褐色砂礫(疊合)
- ⑭黒褐色泥(岩葉土混)
- ⑮褐色粘質土(岩葉土多含)
- ⑯黒茶色腐葉色土



第14図 C区 旧河道3 平・断面図



第15図 C区 旧河道3出土遺物

C-50～71は旧河道3の出土遺物でC-50～54は上師器の甕である。C-50・52・54は退化した複合口縁で、縦堀が厚い。C-51・53は単純口縁である、甕は何れも外面がハケメ、内面はケズリを主な調整方法としている。

C-55～67は上師器の高坏でC-55、58にはスヌが付着する、C-56は丸みを帯びた坏部で、内面に暗文状のミガキが見られる。C-58、59は坏と脚部の接合が明瞭で筒状の脚部に坏部を接合していることが観察できる。C-61～67は脚部でいずれもその底部が大きくラッパ状に開く。C-61は外面部と内面の一部に赤彩が施されている。C-64は坏部と脚部が円盤充填法で接合されている。

C-68は須恵器の甕、口縁部分は欠損しているが、頸部は非常に薄く、緩やかに肩部に続く、胴部が強く張り出し底部は丸底で重心が高い、肩部は二段の稜を持ち、その間に五条の波状文を施す。

C-69は長4.1cm、幅3.6cm、厚1.9cmの瑪瑙製の剝片である。C-70は石材不明の未成品、明黒色を呈して極めて滑らか、通常の河原石のようであるが中央に穿孔がある、この穿孔は0.2cmほどで貫通していない。

C-71は土師質の土壺で孔径は0.5cm程度である。

以上のS C201（溝状遺構）と旧河道3出土遺物は形態的にまとまっており、良好な一括資料とすることができる。大半は土師器で退化した二重口縁や単純口縁の甕、又は坏部に段を有したり、やや丸みを帯びた高坏などで占められている。土師器の他には僅かながら須恵器も混じっている。

これらのことから、S C201（溝状遺構）と旧河道3の時期は概ね大束式の後半、古墳時代中期頃に比定することができる。

C-72は調査区北端のS C226から出土した上師器の甕、C-73はS C158出土の須恵器の甕で、S C158は調査区南西隅の溝状遺構である。

C-74～77はS C168出土遺物で、S C168は調査区北部に位置する落ちである。

C-78はS C150から出土した須恵器の高台部でS C150は調査区南側にある溝状の遺構である。

C-79～93は包含層上層出土遺物で、C区の十層図では①・②・⑥・⑦の各層に概ね対応する。C-79は上師器の甕で耕作土直下より出土している。

C-80は須恵器の甕で頸部を欠く。C-81は須恵質の筋鉢車でやや扁平な形態、完形である。C-82は須恵器の甕、C-83は須恵器の坏H、C-84が須恵器の蓋である。

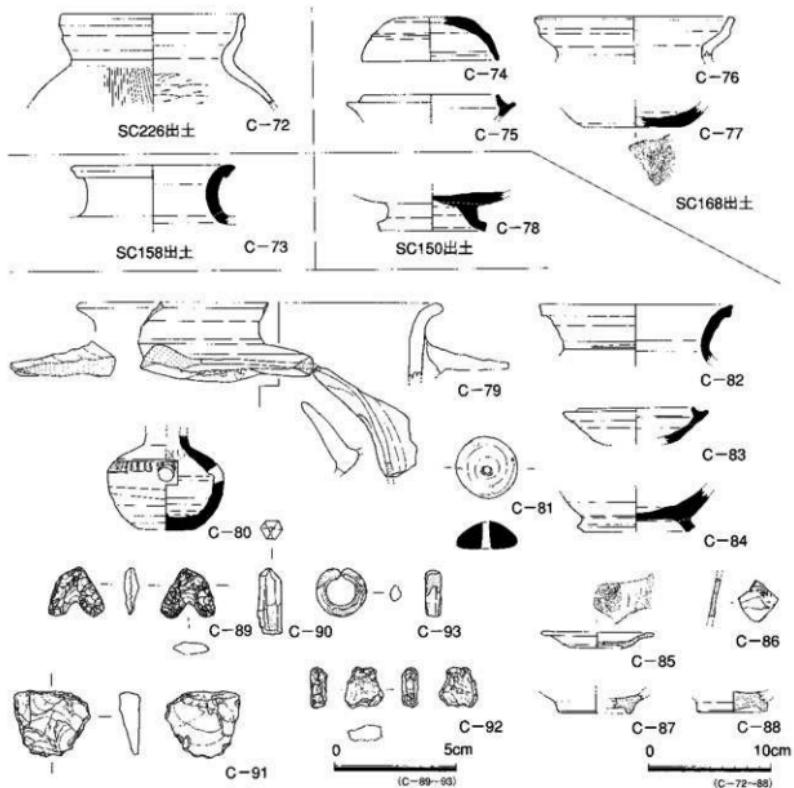
C-85～88は近・現代の陶磁器類でC-85は施釉の小皿、C-86は暗青色の染付が見られる磁器片、江戸後期のそば猪口か、C-87は綠釉陶器で、高台内面は無釉、C-88は白磁の高台部分である。

C-89～92は石器でC-89は黒曜石の凹基無茎式石鎌、C-90は透明～白濁色の水晶で六角柱状の形狀を示す。C-91は瑪瑙？の剝片、C-92が黒曜石の剝片である。

C-93は表土下から出土した耳環で長1.95cm、幅2.1cm、厚0.65cmを測る、茶錆～青錆化した軸の上に金メッキを覆っている。

C-94～109は包含層中・下層出土遺物である。C-94～99が上師器でC-94が複合口縁の甕、北端の壁から出土した。

C-95・97が高坏の坏部でC-96が底脚坏の坏部、C-96は内面にミガキが暗文状に施されている。



第16図 C区 包含層上層（断面図①、②、⑥、⑦層）出土遺物

C-98・99は高環の脚で、C-99の外面には部分的に赤彩が残る。C-100は土師器の塊でほぼ完形、外面はハケメ→ナデ、内面はナデ調整を施す。

C-101は須恵器の把手付焼、口縁端部は鋭く尖り、体部に三段の三角状の稜がある、小片で把手部は欠損。

C-102は須恵質の上馬、首～前脚部の破片で胴部に亀裂が走る、粘土の接合部分であろうか。

C-103の口縁端部は短く外反する口縁で、口縁断面はほぼ直角である、色調は灰白色を呈して硬質であり須恵質と変わらないが、亀山系の甕と思われる。C-104・105の外面は格子状のタキ、内面はナデ調整である。C-104は亀山系の甕片と思われるが、C-105はC-104とは焼成が異なっており、陶質系か、又は亀山系のいずれかであろう。

C-106は黒曜石の縦長の剥片、縁辺を細部調整しているのでスクレーパー類の使用も考えられる。

C-107は長2.7cm、幅3.2cm、厚0.7cmの耳環で全面が青銅化しており、メッキはほとんど残っていない。

C-108は鉄器で薄手、断面形態がL字状に折れている。

C-109は陶棺片、残高5.9cm、厚1.5cmを測り、外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕が残り、横・縦の突帯が付されている。遺構の頃で述べられているように、直線距離で250m離れた松江市大井町の池ノ奥C遺跡・S K01から出土している陶棺片と接合したことは特筆されてよい。(岡版37)

以上、C区出土遺物を概観すると、古いものでは黒曜石の石鎚や剥片類があり、古墳時代中期の土師器、古墳時代後期～末の須恵器、中世の龜山系統の土器、近現代の陶磁器と遺物の時期幅が広い。

但し、検出した遺構のうち、S C119（7世紀初頭）、S C153（6世紀末～7世紀初頭）、S C201・Ⅱ河道3（5世紀中）などはそれぞれ出土遺物にはまとまりが見られる。したがって、特に古墳時代中期～7世紀にかけて、遺構を形成するような人的な活動を認めて良い。

包含層中・下層からは中世に位置付けられる龜山系統の土器が出土しているため、遺構面として検出したレベルでは後世の混乱を受けている可能性も多い。しかし逆に、近・現代の陶磁器類の出土が包含層上層に限られていることは、近・現代に伴う削平は地表面にまで達せず、若干の遺構面を残存させていたと考えられる。

検出した遺構の中では、Ⅱ河道3やS C201は古墳時代中期（大束式）の遺物がまとまって検出された。これまで山津地区において、当該時期の遺物はほとんど見ることがなかったものであって、注目すべきものであり、このことは、『該期の集落が付近にある可能性を示していると考えられる。また、この土師器群と共伴する須恵器（C-48・49・68）と。包含層ながら同時期のものと考えられるC-101・105は、上師器との共伴関係から大束式後半に併行すると考えられる。これらが大井産なのか、搬入品なのかどうかは、数点の僅かな細片なので明確ではないが、従来、大井での須恵器生産は寺尾地区や廻谷地区のT K47前後の併行時期が最古と考えられていたので、山津周辺で生産されていたのであれば、大井地区での須恵器生産は従来よりやや遅る可能性もある。なお、出雲国府などでは陶質土器や軟質土器が出土しており、定形化以前の須恵器や軟質土器が出雲地域周辺で製作されていた可能性も指摘されているところである。（鳥根県2004「史跡出雲国府跡2」）』

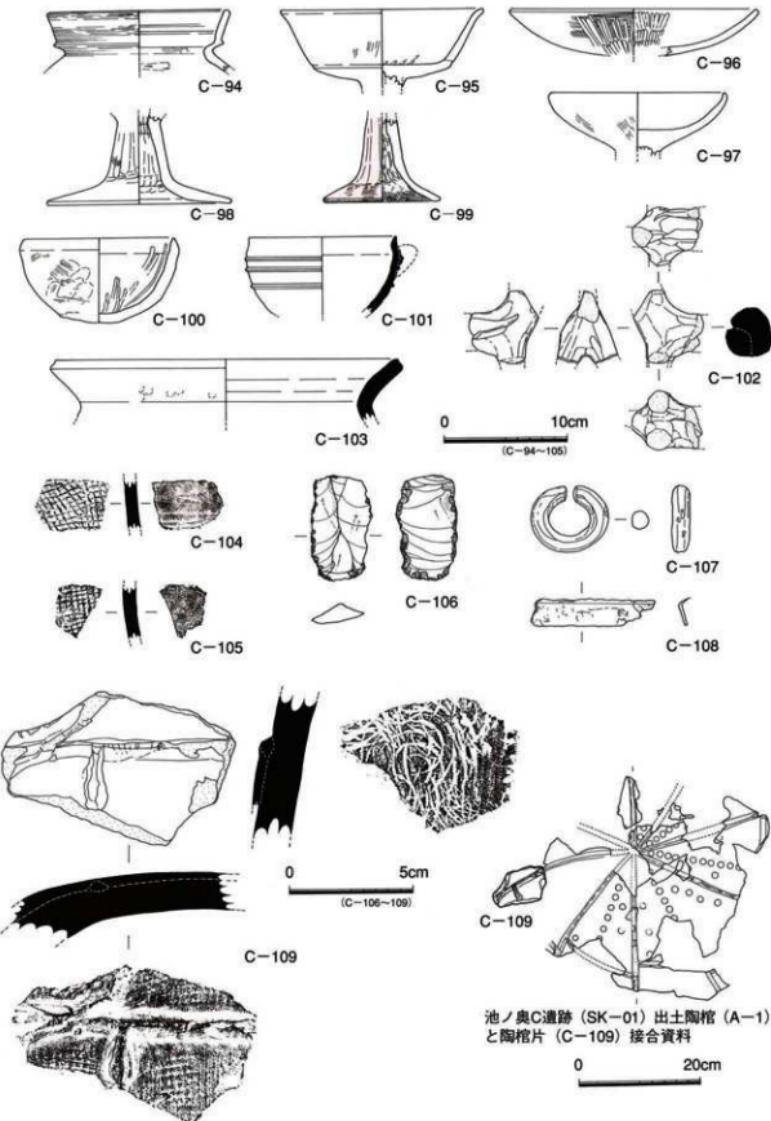
D区 遺構

(廣瀬貴子)

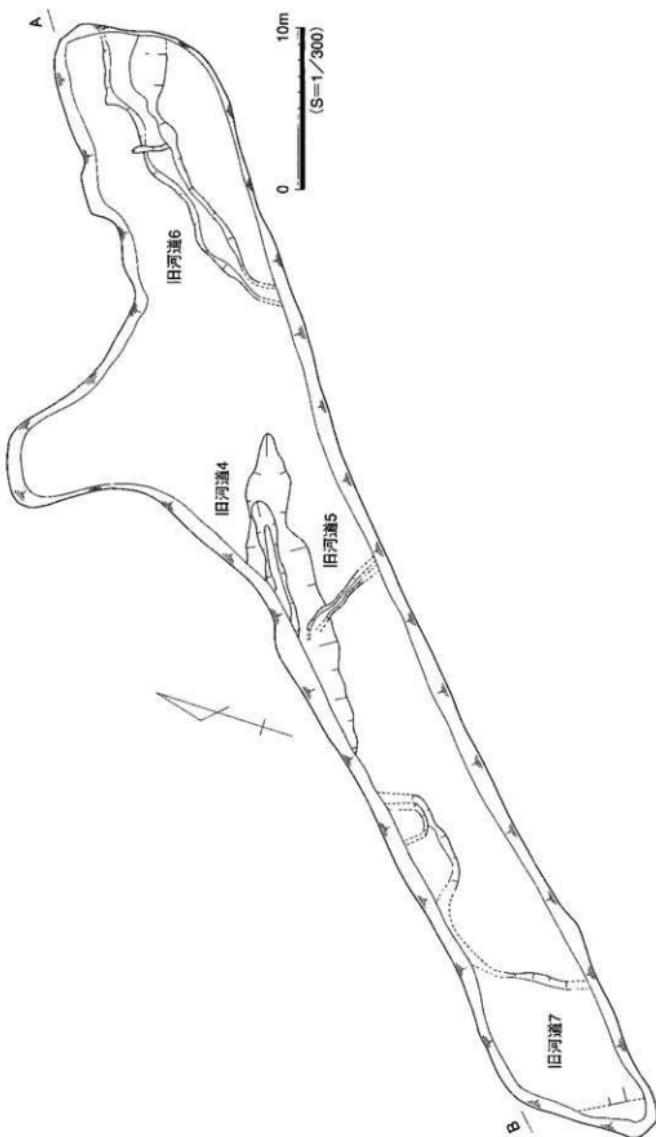
D区はC区の北東、南北75m×東西8～20mの調査区である。Ⅱ河道を4本検出するのみで、遺構は検出されなかった。

旧河道4は調査区中央部、長さ20m、最大幅4m、深さ0.2～0.25mで、北東から南西方向に流れる流痕で、北東側で細くなり消失していた。堆積土層は黒色砂質土で木や腐食土を多く含んでいた。遺物は上師器の高杯の脚部、甕片、須恵器の無蓋高杯の口縁、壺蓋片など古墳時代中期から奈良・平安時代のものが出土している。

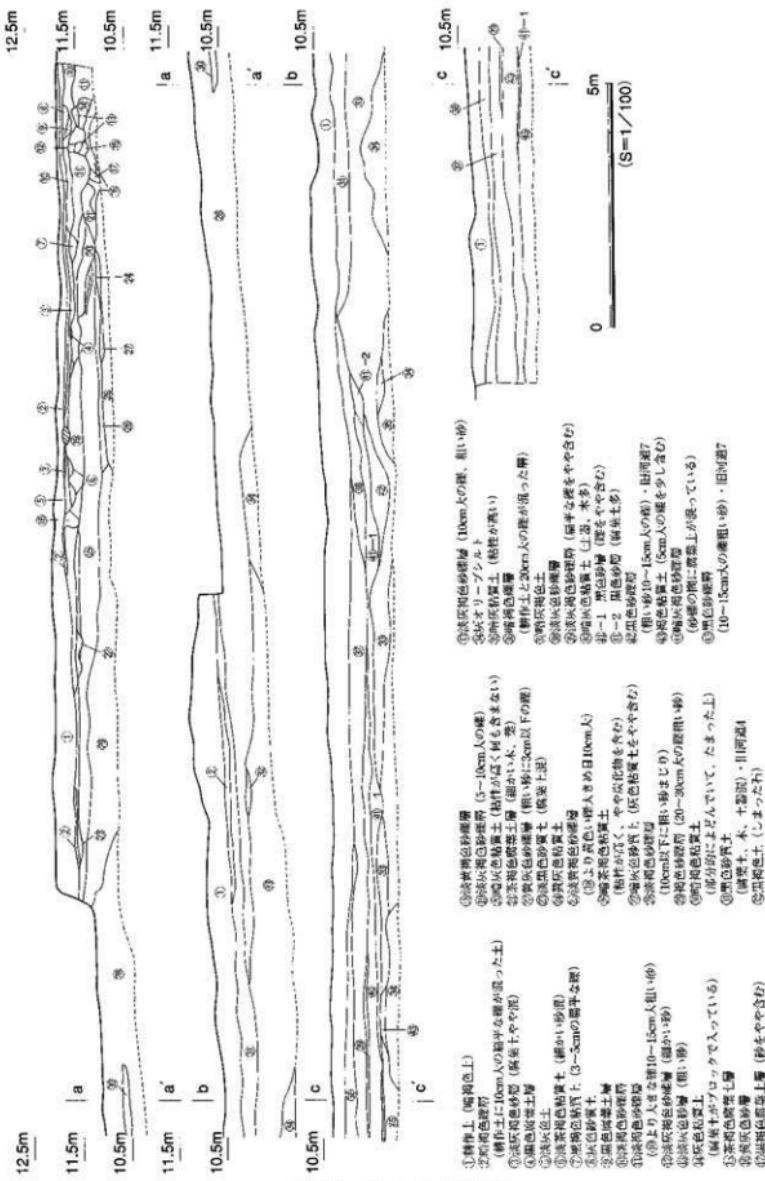
旧河道5は旧河道4に流れ込むように西から東に流れる幅0.3～0.8m、深さ0.2～0.3mの流痕である。



第17図 C区 包含層中・下層 出土遺物



第18図 D区 全景



第19図 D区 土層断面図

Ⅲ河道6は調査区北側、北東から南西に流れる。長さ19m、幅1.2~4m、深さ0.05~0.15mの浅い流底であった。堆積土層は暗茶褐色砂質土、淡茶褐色砂疊層で、古墳時代中期から奈良・平安時代の土師器の甕片、須恵器の鉢（ジョッキ形）の底部、坏蓋片、甕片などが出土している。

Ⅲ河道7は調査区の南側、北から南に流れる旧河道跡である。サブトレンチの北側の半楕円状の落ち込みも蛇行したⅢ河道7の端の部分であると考えられる。長さ4m、幅（推定）8m、深さ0.5mの流底で堆積土層は第19図の第⑤~⑦層、⑧層であった。特に第④層（暗灰色粘質土）からは古墳時代中期から奈良・平安時代にかけての土師器の甕片、高杯の脚部、須恵器の甕片、坏蓋片、田下駄など多数の遺物が出土している。また、第⑧層（淡褐色砂疊層）の上面からは土馬（雄）、水晶の玉の未成品が出土している。

遺構の右無、土層の堆積状況を確認するために、3本のサブトレンチを入れたが遺構、遺物は確認されなかった。土層の堆積状況から、Ⅲ河道6の下にはもうひとつ河道があったことが伺われる。

D区 遺物

(藤原 哲)

D-1~20はⅢ河道7の出土遺物で、土器、石器、木器が集中して出土したものである。出土層は第19図の第④層（暗灰色粘質土）に該当する。

D-1・2は土師器の甕で単純口縁。D-3は土師器の壺、70%ほど残存する、底部は丸底で直行ぎみに外反する、口縁は端部において僅かに内湾する、外面はミガキとハケメ、内面は指頭圧痕とケズリ調整である。

D-5は土師器の鉢、口縁端部がくびれ、先端は尖りぎみで体部はやや膨らみつつ緩やかに続く、外面全体的にススが付着している。D-6・7は土師器の高杯。

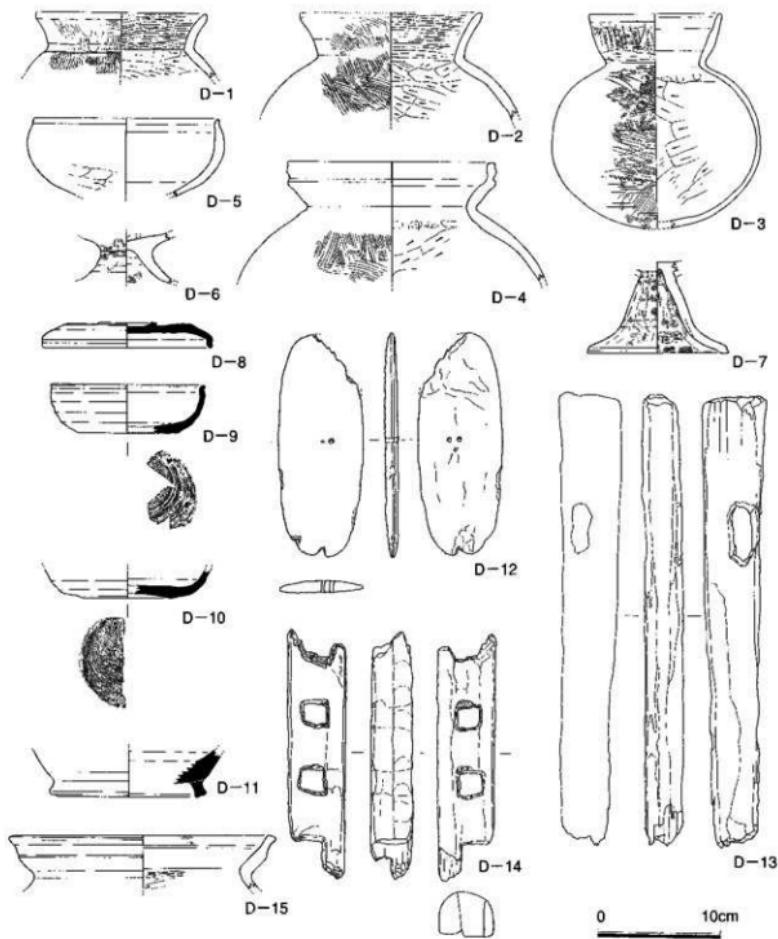
D-8は須恵器の蓋、輪状つまみで端部は凹みながら平下する、外面全体に白灰を被る。D-9は須恵器で塊A、端部はくびれ丸みを帯びる、底部の切離しは回転糸切り。D-10は須恵器の小片で塊、底部の切離しと調整は糸切り→ナデ。D-11は須恵器の壺で高台部分、底部の残りは僅かであるがケズリ→ナデか。

D-12~14は木製品。D-12は扁平な板材で片面は丁寧に仕上げてあるが、反対面は荒れており調整は不明、縁辺は丸みを帯びた長楕円形で中央部に並んで二つの穿孔が認められる。D-13は棒状の木製品で4cm×1.5cm程度の穿孔がある。D-14は棒付田下駄の棒部分で、残存する20cm長において2cm方形の穿孔が4つ穿かれている。

D-15はⅢ河道7の出土遺物のうち、特にD-12~14の木製品と共に伴する状況で出土した土師器の甕で、矧く厚い複合口縁の小片である、外面にススが付着している。

D-16~20は石器でD-16は黒曜石の石鋏、先端と基部を欠損した凹基無茎式石鋏である。D-17も同じく凹基無茎式石鋏で先端部は欠損している。D-18は黒曜石、D-19は瑪瑙でそれぞれ2~4cm程度の小剥片。D-20は黒曜石で長11.9cm、幅7.7cm、厚6.5cm、重量534gの大型の石核である、部分的に自然面を残すが、各方向よりの剥離が認められる。

D-21~24はⅢ河道4の出土遺物である。D-21は土師器の甕、口縁の細片で単純口縁であるが、僅

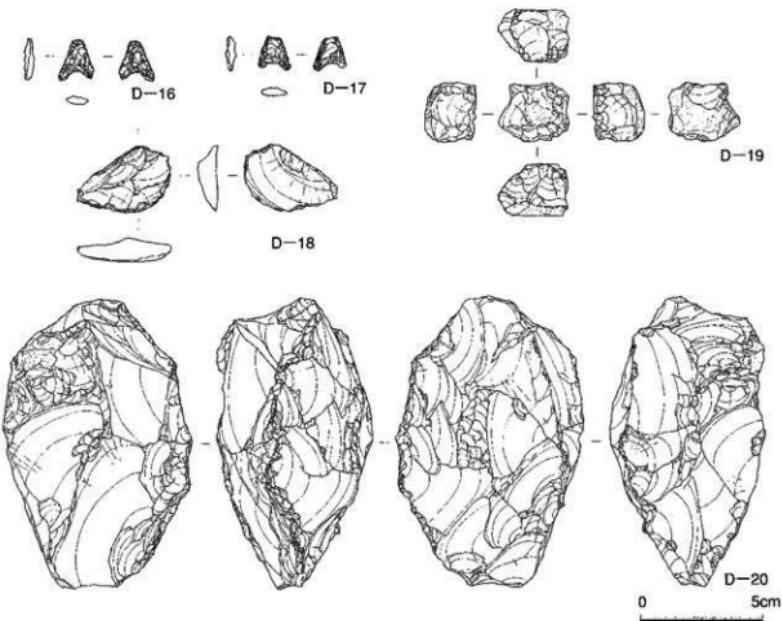


第20図 D区 旧河道7出土遺物①

かに複合部に類した突出が見られる。D-22・23は上飾器の高環（脚片）で細い筒部に、底部が強く屈曲する。

D-24は黒曜石の剥片で、全体に白っぽく風化している。

D-25～29はII河岸6の出土遺物である。D-25は弥生土器の台型上器？で、色調は褐灰色を呈している。D-26は須恵器の高台部分で底部は回転ナデを施す。D-27は小型の壺で小さな高台を付す、底部調整は回転ナデ。D-28は黒曜石で残長1.5cmを測る小型の凹基無茎式石鏃。D-29も黒曜石の凹



第21図 D区 旧河道7出土遺物②

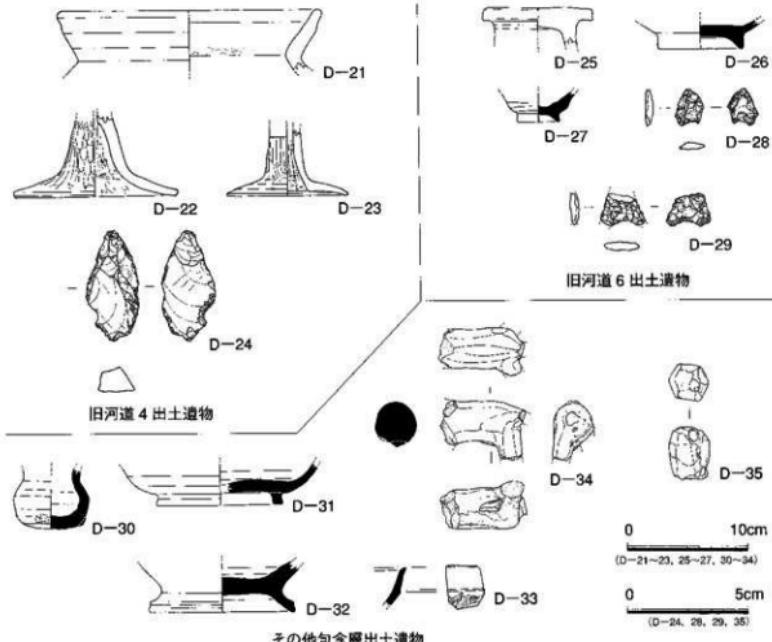
基無蓋式石鎌で先端部が欠損している。

D-30~35はその他のD区包含層出土遺物（D-30~34は須恵器）である。D-30は小壺（壺E）で底部の調整はケズリヒナデ、また底部付近に別の須恵器片が溶着する、外面の肩部と内面には白灰を被っている。D-31は壺の高台部分、底部調整はケズリ→ナデ。D-32は壺の高台部分、底部調整はナデ。D-33は高環の細片、薄手で残存五条の波状文が残る。

D-34は須恵質の土馬で後脚部分に粘土貼付けにより性器を、穿孔によって肛門の表現をしている。D-35は水晶製の切子玉、六角柱状で穿孔部分は上面の径が大きく、下面に向かって徐々に小さくなる。

D区の出土遺物に関しては大きく旧河道のものと、その他の包含層出土の二つに分けることができる。これら旧河道の出土遺物は古いものでは石鎌や弥生土器片の出土があり、5世紀代の土師器の壺や、新しいものでは8世紀後半の須恵器片が出土している。このため、II河道の最終的に埋没した上限は9~10世紀以降のものと考えられる。

また、D区の旧河道7からは木製品が若干出土している。木製品出土層の前後からは、同じく石器、土師器、須恵器が出土しており、残念ながら詳細な時期比定は不明とせざるを得ない。ただ、木製品が出土した地点から共伴した上器類として、太く短い二重口縁を呈する土師器の壺（D-15）が出土しているので、5世紀代の可能性が最も高いであろう。



第22図 D区 出土遺物

E区 遺構

(廣瀬貴子)

E区は東西92m×南北6~10mの調査区である。調査区はかつて一段の水田であり、茶畠にする為に南側の山を削って盛上(0.5~2m)がなされていた。調査区を耕上する処理などから便宜的に、No18 R杭を境に東西に分けて調査を行った結果、遺物包含層のみで遺構は検出されなかった(第23図)。

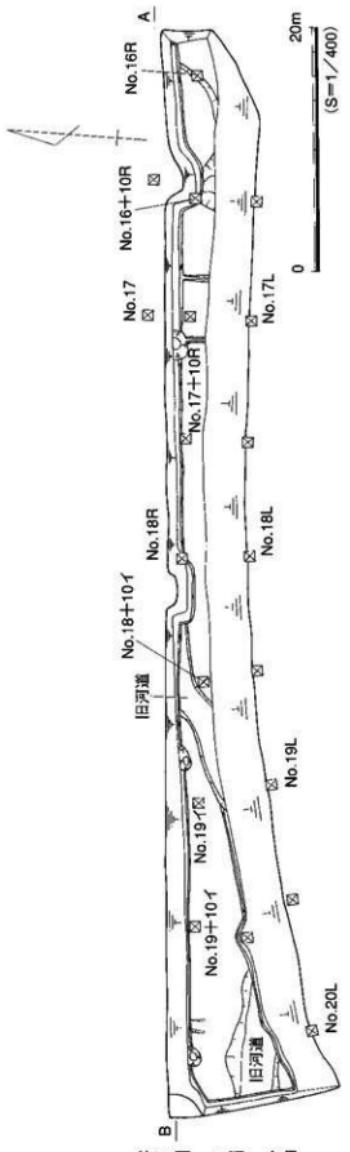
東側の遺物包含層は水平堆積でほとんどの層に軟質の角礫(和久羅石)が含まれていた。堆積土を大別し出土遺物について観察すると次のようになる(第25図)。

○旧耕作土

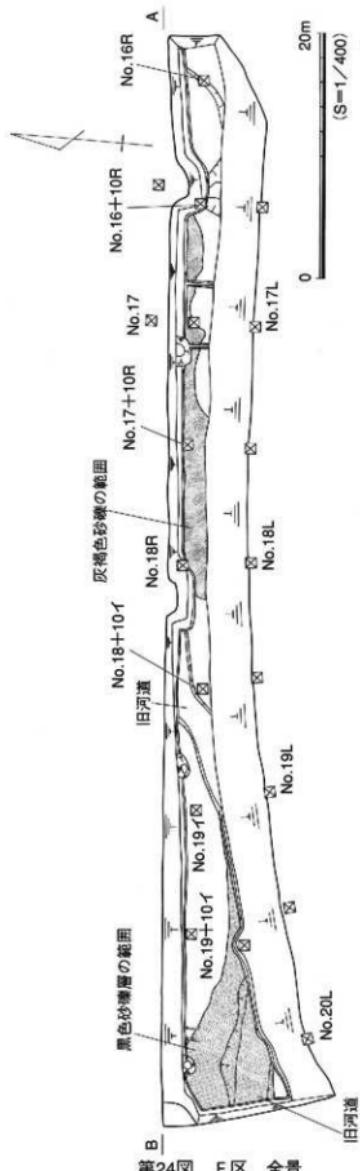
- 2cm大的和久羅石を多く含む淡褐色~黒褐色土層 6~8世紀の須恵器、陶器
- 細かな腐食物を含む灰色層 7~8世紀の須恵器、土師器
- 2cm大的和久羅石をやや含む灰色粘土上、褐灰色土上 6世紀後半~9世紀の須恵器、土師器、木製品
これらの遺物包含層の下には腐食物を含む砂礫層(無遺物層)があり、浅い水の流れがあったと考えられる。

この砂礫層は西側のNo18+10イ杭付近で別の砂礫層の流れによって消失していた。

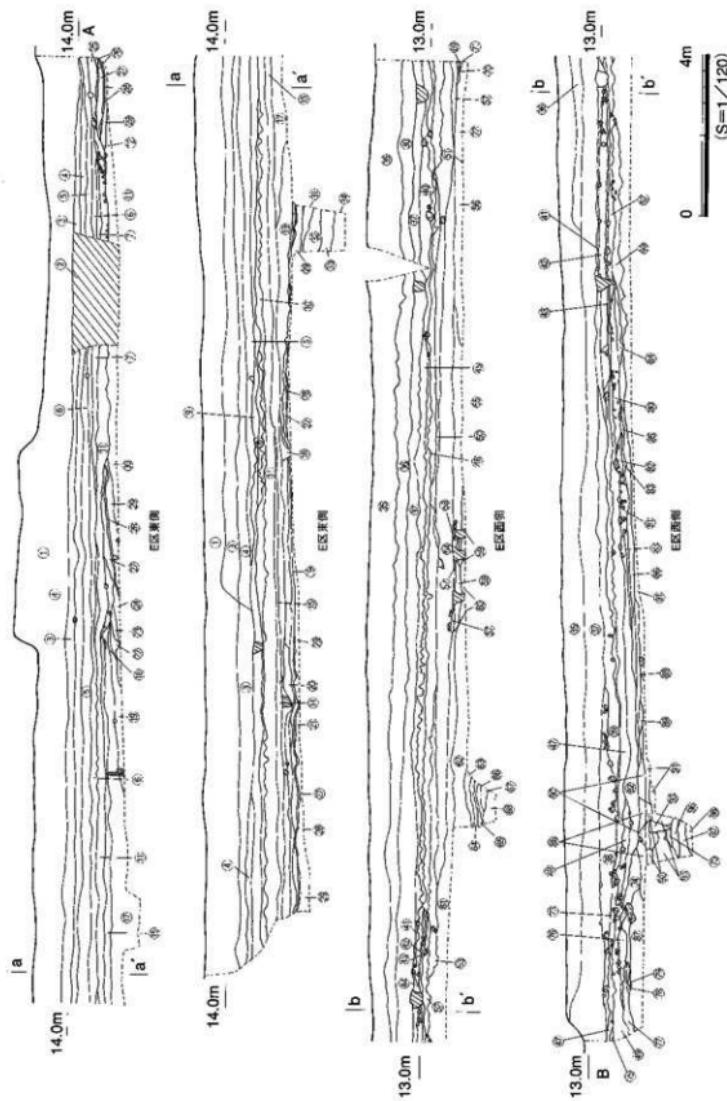
土層の堆積状況、遺構、遺物の有無確認のため深堀した結果では、遺構、遺物は確認されなかった。砂礫層の下には火山灰(A T・姶良火山灰層、E区では淡緑灰色シルト、にぼい黄色シルトにあたる)



第23図 E区 全景



第24図 E区 金堤



第25図 E区 土層断面図

の堆積が見られ、これは年代的に約3万年前と思われる（中村唯史氏の御教示による）火山灰層の下には腐食物を多く含む粘質土と淡緑灰色シルト～砂礫層が堆積していた。

西側の十層はNo19イ杭付近まで東側とほぼ同じ土層が堆積しており、No19イ杭付近からは軟質の角礫ではなく淡黄色の角礫が含まれていた。この疊は調査区北側の山の疊と同じで堆積土層の中には黑色土（表土）を含んだ層もあり、上石流的に堆積したと考えられる。この層からは古墳時代後期から8～9世紀の土器が多く出土している。西側にも東側と同様に水の流れた跡があり黒色砂礫層が堆積していた。この層は西側の遺物包含層の最下層で出雲Ⅱ期と思われる須恵器、木製品が出土しているが、時期差のある上器も混入している為、時期を特定することができない。深掘りを2ヶ所行ったが、遺構、遺物は確認されなかった。

西側には北壁とは別の土層の堆積が見られる（第25図）。暗灰色粘質土の上に紫や橙桃色の粘質土が堆積し、その上に灰色粘質土と橙桃色土の混合土が堆積していた。この混合土には、2～20cm人の大小様々な軟質の角礫（和久羅石）が含まれており、客土ではないかと思われる。この層から加工痕のある板状の木製品が出土している。

E区 遺物

（藤原 哲）

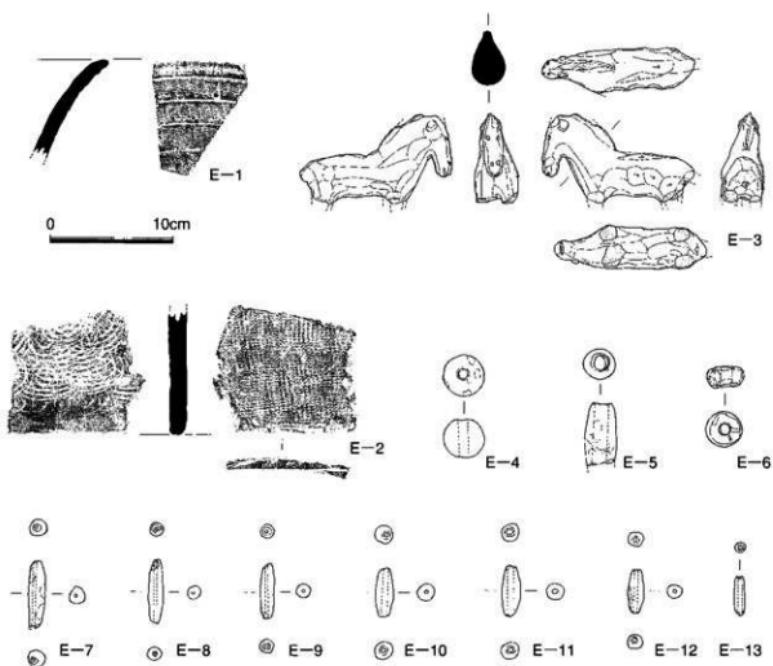
E区は現地調査担当者の報告では旧河道の他は遺構の検出は認められないことであり、全て包含層からの出土遺物となる。しかし出土遺物の量はコンテナ46箱と極めて大量にのぼる。

これを括して包含層出土としてもいいのであるが、考古学的な検討においては、何よりも先ず各遺物の出土層位を明確にすることが重要であろう。調査の組織上、現地報告と遺物整理報告の担当者が別であるので、整理報告班は現場での諸記録や、遺物に付されたラベル等を基にE区の遺物を包含層の上・中・下層に区分した。やや詳しく出土地点と層位とに言及すれば次のようになる。

現地調査は第23図のNo18R杭を境として、E区西側と、E区東側とに分けて行われている。出土遺物でいえばE-1～125はE区西側、E-126～の156がE区東側からの出土遺物である。

層位的な関係としては、E-1～13がE区西側上層出土遺物で、E-14～45層が西側包含層中層出土遺物、E-46～E-111が西側包含層下層出土遺物に大別できる。また、E区の東側出土遺物ではE-126～136が東側包含層上層出土遺物、E-143～153が東側包含層中層出土遺物、E-154～156が東側包含層下層出土遺物である。

上・中・下の各々の層位を図上でいえば（第25図）、E-14～27が灰褐・橙桃・茶褐色の各粘土層（第25図・第⑦層～⑦層ほか）、E-28～33が黒色腐食土層（第⑤層）、E-34～45が黄褐色砂礫層（第⑥層）、E-46～88が赤褐色粘質土（第⑧層）、E-89～95が暗褐色砂礫層（第⑨・⑩層）、E-96～107が暗褐色粘質土（第⑪・⑫・⑬層）、E-108～111が淡赤褐色土（第⑭層）、E-126～136が暗灰褐色土～黒色粘質土（④～⑤層）、E-143～153が灰色粘質土（第⑧～⑪層）、E-154～156が灰色粘土層の下面にそれぞれ、概ね対応していると考えて大過ない。なお、E-113～125、E-137～142はトレンチ等、その他のE区出土遺物である。以上がE区遺物の出土層位で、各遺物の概要は次の通りである。



第26図 E区西側 包含層上層（旧耕土～褐色土）出土遺物

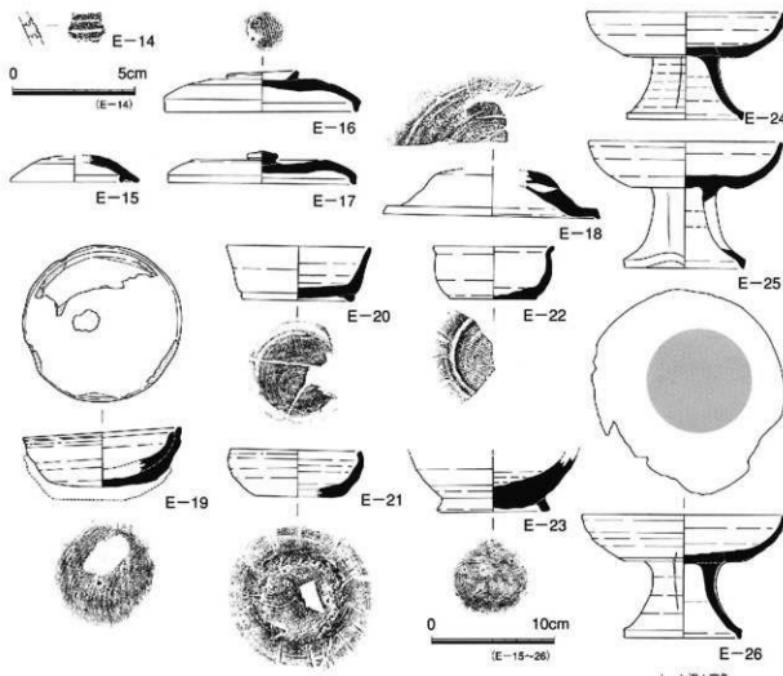
E-1～13はE区西側包含層上層遺物である。E-1は須恵器の壺片、E-2も須恵器の小片であり、内外面はタタキ調整で底部に平坦面をつくり、この平坦面には沈線状の凹みが見られる、器種は不明で瓶、鉢類の底部と考えられる、小片ながら復径を測った所、半径20cm以上の規模になり、この大きさからすると丁持壺の底部になろうか。

E-3は須恵質の上馬で裸馬である。焼成は不良で灰白色を呈し、四肢と尾は欠損している。口と鼻、肛門は刺突により、口はヘラ状工具により横位に刻線している、背面と側面に一部、ケズリによる砂粒の移動が見られる。

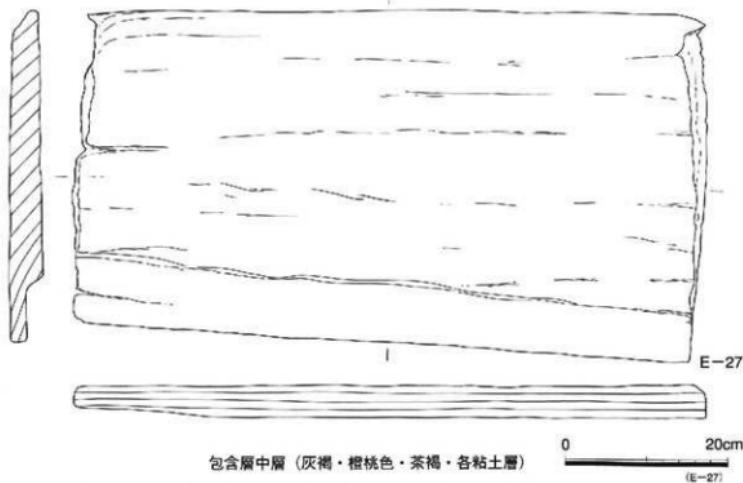
E-4・6は土玉でE-5・7～13は土鍤、全て土師質である。

E-14～27はE区西側の包含層中層（灰褐・橙桃・茶褐各粘土層）出土遺物である。E-14は残存1cm程度の微小片で、三状以上の平行沈線が見られる、繩文土器か。

E-15・16は全て須恵器で、E-15はかえりの有する小型の蓋（坪G蓋）、E-16は坪Fの蓋でやや歪み、外面に白灰が僅かに被っている。E-17は宝珠つまみを有する蓋、残存は30%程度である、全体は灰色であるが、重ね焼きのためか口縁部付近は淡茶色に変色している。E-18は20%程度の残



トーン塗：紫色



第27図 E区西側 包含層中層出土遺物①

で、歪みと火ぶくれが見られる、詳細は不明であるが、鍋・鉢類の蓋と考えられる。E-19は塊Aの重ね焼きで現状では二重の溶着があり、さらに外面には重ね焼きに伴う変色が見られる（実測図の波線部分）。

E-20は須恵器の坏B、やや軟質で黄灰色を呈する、底部は回転糸切り後、ナデか、貼付けの高台は低く肥厚したもので、体部は直線的に立ち上がる。E-21は塊Aで口縁は内傾し丸く収める、底部の切離しは回転糸切りで、糸切り後は底部周辺部分をナデしている、このナデはハケメ状の工具によって行われたものと見られ、工具による条痕が残る。E-22は塊で口縁が屈曲して外反する、底部の切離しは静止糸切り。E-23は壺の底部片、高台を有しており底部は回転糸切り調整、また、底部に三条のヘラ記号がある、底部内面には緑色の釉が被釉している。

E-24～26は高坏でE-24と26は坏部と脚部との接合痕跡が良く観察できる、何れも破片であるが、残存部分では全て一段一方向の切込みで、E-26には重ね焼き痕に伴う円形の変色が見られる。

E-27は木製品で最大長75.6cm、幅40.7cm、厚4.0cmを測る大型の板材である。

E-28～33がE区西側の包含層中層（黒色腐色土）の出土遺物である。E-28は須恵器の坏F、ほぼ完形で底部調整はナデ、体部下に浅いヘラ記号が見られる。E-29・30は須恵器の坏Cである、E-29は薄手、密度が疎で雑、質が悪く暗灰色を呈しており焼成も良くない。E-30は底部のみ、切離しは静止糸切り未調整で底部周辺の凹凸が顕著、内面には輪転回転に伴うナデ調整のロクロ目が良く観察出来る。E-31は須恵器の高坏、一段二方向（対面）の切り込みで貫通しない、坏部の見込み部分にヘラ記号が見られる。

E-32は土師質の把手で残存長さ6.6cm、幅3.2cmを測る、全体にナデ調整を施す。

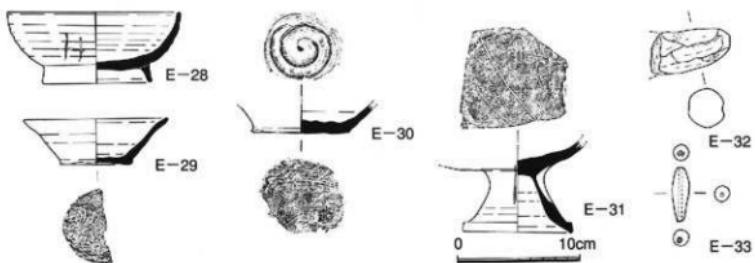
E-33は土師質の土鍤で最大長4.5cm、幅1.35cm、重さ9.0gを測る。

E-34～45はE区西側の包含層中層（黄褐色砂疊層）出土遺物である。E-34は須恵器の坏Fの蓋、80%ほど残り、肩部外面に別の須恵器が付着しており、その直下から口縁部の屈曲部までの間に白灰を被灰している（重ね焼き痕）。E-35は蓋片で大型の宝珠つまみが付く、このつまみ周辺の天井部に円弧状の沈線が施されている、全形は不明であるが、蓋自体もかなり大型であったと考えられるのでⅢの蓋であろう。

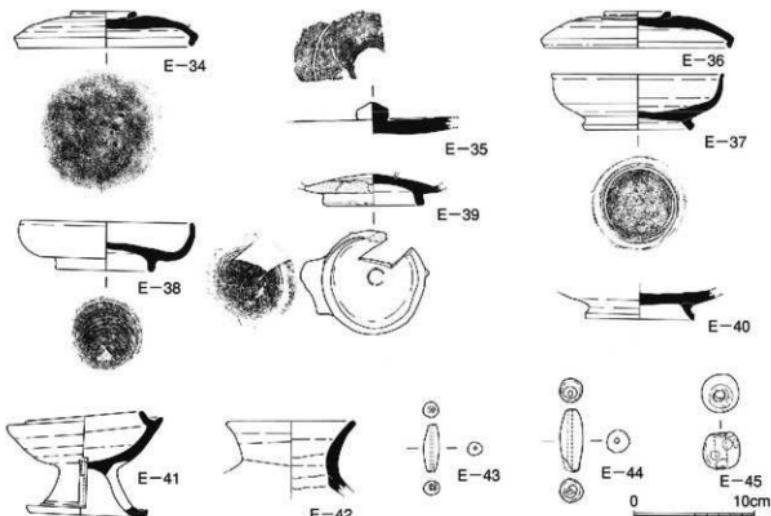
E-36は坏Fの蓋、輪状つまみで口縁部は内傾して屈曲する、端部外面がわずかに凹む、天井と肩との境付近に凹線状のくぼみが約半周ほど認められる。E-37は坏F、底部はナデによって切離し不明、但し、底部の高台内には円弧状の沈線が明瞭に認められる。体部下半はケズリ→ナデ。E-38も須恵器の坏F、歪みによるものであろう、見込み部分が上げ底状になっている、底部の切離しは回転糸切りで、その外部（高台内面）に浅い沈線状の痕跡がある、体部外面に白灰を被っており、逆位詰めか。

E-39・40は坏の高台部分、E-39の見込み部分と骨付け部分に別の須恵器片が付着している（重ね焼き、又は置台転用）、底部は回転糸切り→ナデで底部中央に竹管文が施されている。E-40は底部調整がナデ、外面に白灰を被る。

E-41は須恵質の高坏で40%残存する、一段二方向透かしか、坏部外面と脚端部の外面に白灰が被



包含層中層（黒色腐食土）



包含層中層（黄褐色砂礫層）

第28図 E区西側 包含層中層出土遺物②

灰しており、脚の裾部には全く灰が被っていない。E-42は平瓶の口縁部、粘土紐の痕跡がよく残り、頸部を輪積みしている、肩部外面と口縁内部に白灰を被る。

E-43・44は上師質の管状土錘、E-45は土師質の土玉で中央に径1.0cm大の穿孔が穿かれている。

E-46~88はE区西側の包含層下層（赤褐色粘質土）出土遺物で、E-13~83、88は全て須恵器である。E-46~56は壺Fの蓋、何れも輪状つまみで口縁端部は下方に屈曲する、(復)径も15~16cmの間で均一性があり、天井調整も天井部がヘラケズリで輪状つまみ内はナデを施している、E-53、54にはかすかに糸切痕が残る、輪状つまみは貼付けによるが、E-50にはつまみ内に粘土を貼り付けた爪形の圧痕が見られる。

E-46~48・55には重ね焼きによる変色が肩部外面に見られ、E-49・52は外面に灰を被っている。また、E-51の内面に円状の痕跡が認められるが粘土板の跡か。E-57は壺Bの蓋で口縁端部の垂下はほとんど見られない。つまみ部分が欠損しているが、宝珠形のつまみが付くと考えられる、この天井部は回転糸切りで切離されており、天井端部に円弧状の沈線を施す。

E-58~64は壺A・Bである。口縁部は全くくびれないもの（E-60・63）とわずかにナデるものくびれるというほどでもないもの（E-58・59・64）、ナデによりくびれるもの（E-61、62）とがある、底部の調整は静止糸切り（E-63）、回転糸切り（E-58・62・64）、ケズリ（E-60）ケズリ？→ナデ（E-59）、ヘラ起し→ナデ（E-61）の各種技法があり、E-58・64には糸切後が未調整で底部外周には粘土の盛り上がりが残ったままである。また、E-60は焼成が軟質で内外が白茶色を呈するが、特に粘土紐の痕跡が明瞭で内傾で積み上げている。

E-65~70は壺Fである。（復）径は13.3cm~16cmの間であり、同層出土のE-46~56の蓋と規格的には合致している。体部の形態は何れも丸みを帯び、底部は静止糸切り（E-65~67、69）、回転糸切り（E-68・70）が見られ、E-65は糸切り後の底部中央に径3.8cmの円弧状に線刻している、この円弧内の外周には白灰色変色した帶があるがこの変色は重ね焼きの結果生じたものと考えられる、E-68には見込み部分にX印のヘラ記号がある。

また、E-66の焼成はやや甘い須恵質であるが、色調は内面が黒色、外面が赤褐色を呈している、意図的に黒色土器（内黒）を模して焼成したものかもしれない。E-71は須恵器で壺Bの底部片、やや軟質で黄灰色を呈し、切離しは回転糸切りである。

E-72・73は皿B、E-72は40%残、（復）径が19.0cmで底部は回転糸切り痕、また内面に回転ヘラケズリが施されている。E-73が高台のみの破片で約30%残、高台の（復）径は16cmを測り、大型の皿であったと考えられる、底部の切離しは回転糸切り→ナデで高台の接地面は平坦であるが、粘土の盛り上がりが残る。

E-74は須恵器の底部片で底部の切離しは回転糸切り→ナデ。E-75は須恵器の小片、壺Hの蓋か、天井内面に竹管文が2つ施されている。

E-76は頸で外面（片側）に緑色の釉と小碟状の窓壁片が顯著に付着している。E-77は高壺、残存部分は約40%で一方向より貫通しない切込みが確認される。E-78・79は壺K（長頭壺）でE-78は内外面に自然釉が被り、内面にしづり目？が見られる、E-79は頸～肩部の細片であるが、接合痕が顯著で、肩部に粘土紐を貼り付け、その上にもう一段の粘土紐を積んでいる状況が分かる、それ以上では回転ナデを施されている。E-80は壺の底部、やや軟質で白灰色を呈している、底部の切り離しはヘラ切り未調整で、やや粘土が柔らかい段階で切り離したのか、粘土が移動して偏っている。

E-81は須恵質の紡錘車、完形で底径5.15cmを測る、ケズリで成形しており、外面の一部に緑色の釉が被釉している。E-82・83は須恵質の土馬である、何れも残長9~10cm程度の同規模な裸馬で、肛門を表現する刺突が見られるが性器表現はない。E-84は土師質の上製支脚である。

E-85・86は土師器で甕の細片、E-87は土師質の土玉である。

E-88は須恵器の鉢である、把手が付き、内外面はタタキ、瓶の可能性もあるが、残存する底部付

近が非常に丸みを帯びており、把手付きの鉢と判断した。

E-89~95はE区西側の包含層下層（暗褐色疊層）出土遺物で、全て須恵器である。E-89、90は塊A、E-89は口縁端部がくびれているがほぼ完形で径が10.3cmと小型である、塊G身の可能性もある。底部の調整はE-89がヘラ切り→ナデ、E-90が静止糸切り→ナデ・オサエで凹凸が認められる。また、E-90の見込み部分はナデによる細かい条痕が残る。

E-92は塊Aの溶着資料である、端部をくびれさせる須恵器の塊で、残存資料では三重の重ね焼き痕を残すが、最も外側の塊に変色部分があるので少なくとも四重以上の重ね焼きであったのは確実である、底部を観察できる最も外側の底部は回転糸切り→ナデの調整である。

E-91・94は塊Fである、E-91の底部の切離しは静止糸切りで、高台の内部に円弧状の痕跡が確認できる、E-94の底部はヘラ切り→ナデ調整である。E-93は須恵器の坏Hの蓋、脚片で一段三方向透かし（切り込み・等間隔）を施す。E-95は須恵器の坏Hの蓋、ほぼ完形で口径は11.4cmを測る、稜や口縁内面の段はほとんどなく、天井は浅いケズリ調整（周辺ヘラケズリか）。

E-96~107はE区西側の包含層下層（暗褐色粘質土出土）出土遺物で、全て須恵器である。E-96は塊B、又は塊Hの蓋でいずれか判断困難である、図上では塊Bとして掲載してある、70%残で底部調整はヘラ切り→ナデでX印のヘラ記号がある。

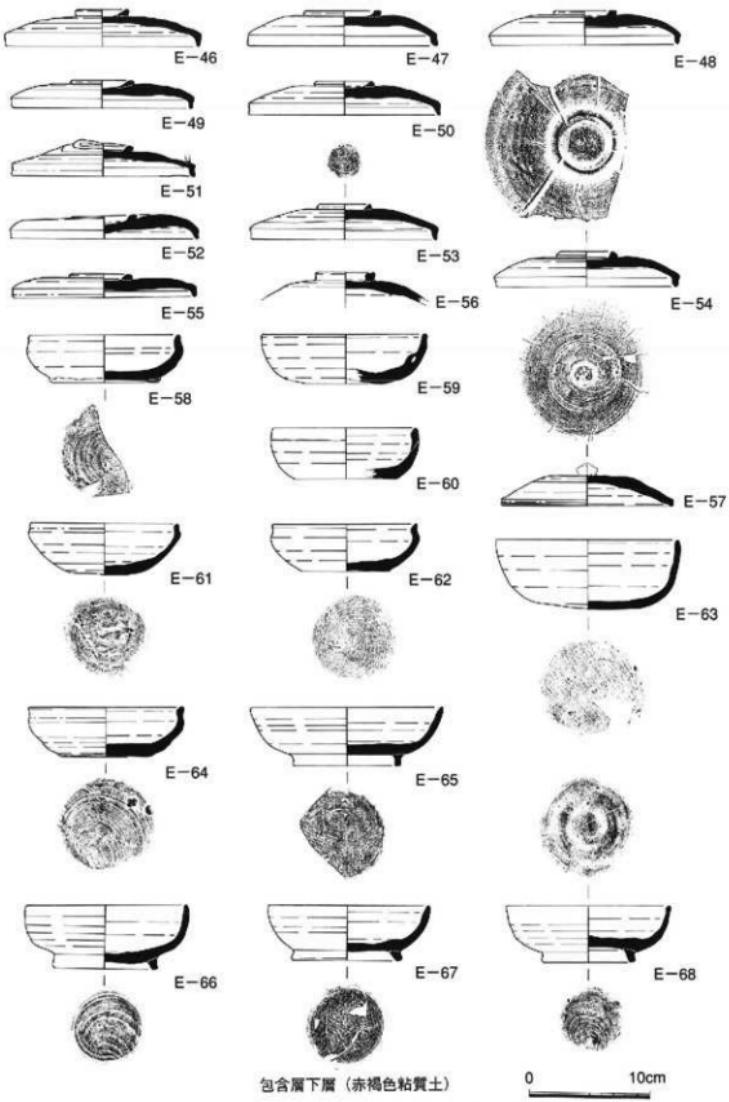
E-97・99・100は塊A、E-97の底部の切り離しは回転糸切り未調整で口縁が僅かにくびれる、E-99は口縁端部を極めて強くナデしており、くびれるというよりも屈曲して外反する、底部は回転糸切り→ナデ、底部は極めて平坦で粘土のはみ出しがあってやや上げ底状を呈する、E-100は口縁をくびれさせ、底部は切り離し後ナデ・オサエ、底部の凹凸が激しくヘラ起こしによって切り離したと思われる。

E-101~103・105・106は壺である。E-101は小壺の底部で底部の切り離しはヘラ切りで、工具による条痕が残る。E-102は高台付の壺底部、内外面茶褐色の良好な焼き上がりで底部はナデ。E-103は壺K（長頸壺）の頸部片。E-105・106が壺EでE-105が丸底で底部はナデ調整、E-106の底部調整はケズリ、内外面に部分的に白灰を被る。E-104は須恵質の把手、最大長6.5cm、最大幅2.6cmで牛の角状に把手が伸び、先端部分は平坦になっている。

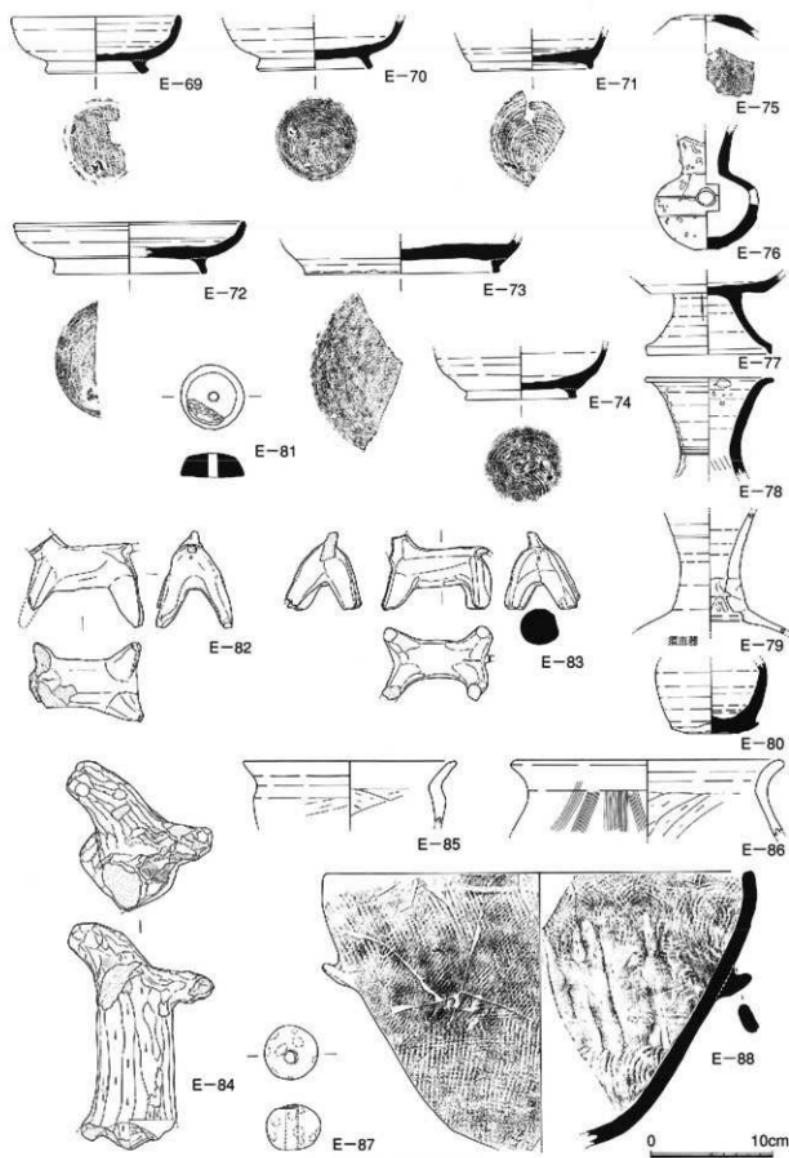
E-107は須恵質の土馬、頭部のみの破片で目は粘土塊を浮文状に貼り付け、かつその中を刺突しており、鼻も刺突、口は横位に線刻した後、口内に刺突を施している。また、たてがみ部分は貼り付け痕が認められる。

E-108~112はE区西側の包含層下層（淡赤褐色土）出土遺物で、E-112を除いて全て須恵器である。E-108は塊Fで底部調整は静止糸切り→ナデ、また、底部には円弧状の沈線が残る。E-109は塊B、口径11.8cm、器高3.4cmで塊といよりほぼ皿状である、底部の切り離しは回転糸切りで底部周辺をナデしている、内外面に白灰を被る。E-110は壺Eで、底部はヘラ切り未調整で凹凸が激しい、また、見込み部分もオサエのためか凹凸が著しい。E-111は高台片、底部は黄灰を被り調整不明、ヘラ記号を施している。

E-112は黒曜石のスクレイバー（石匙）で最大長3.3cm、幅4.5cm、厚0.7cmを測る。

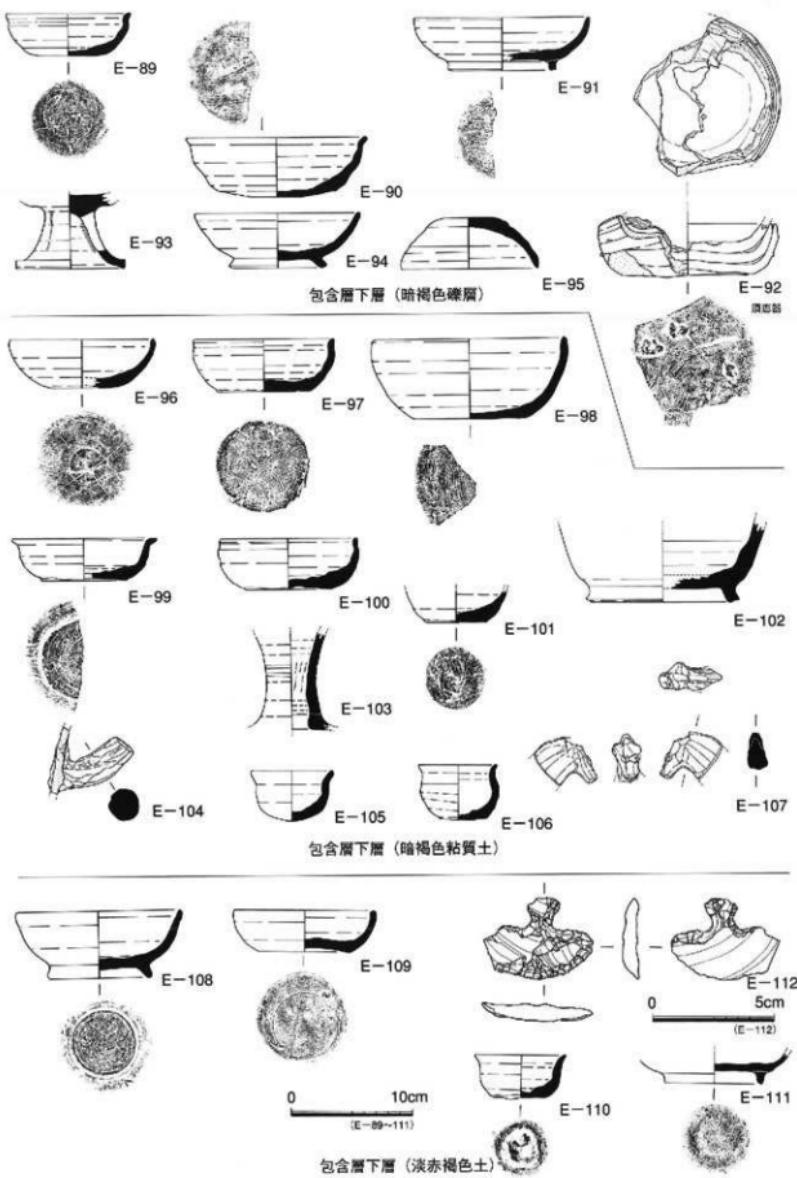


第29図 E区西側 包含層下層出土遺物①



包含層下層（赤褐色粘質土）

第30図 E区西側 包含層下層出土遺物②



第31図 E区西側 包含層下層出土遺物③

E-113～124はE区西側のその他包含層出土遺物である。E-113は小型の壺H、底部はヘラ切り未調整で粘土の凹凸が激しい。E-114は壺の底部、底部の切り離しはヘラ切りで、底部内面はロクロ目による渦巻きが顕著。E-115は須恵器の底部、大型で壺か、底部は静止糸切りで切り離しており、その後、底部周辺を工具でナデてるためか、条痕が残っている。

E-116は壺Fの蓋、口径は18.6cmとやや大きくかえりを有する、天井はケズっており、輪状つまみの内部はナデか、つまみ内の天井にヘラ記号あり。E-117は須恵器の高台片、底部の調整は静止糸切り→ナデ。E-118は壺F蓋、天井部は（静止？）糸切り後、回転ヘラケズリを施し、輪状つまみを貼り付け、つまみ内部をナデており、糸切り痕がかすかに残る。

E-119は壺F、60%残で底部の切離しは静止糸切り。E-120は皿A、底部は平底でケズり、底部周辺はオサエている。E-121は高壺脚部、脚部のみで切込み等はなし。E-122は壺L、薄手で胴部は丸みを帯びている、頸部は残存しないがやや短い頸部がついていたと思われる、体部下部は静止ケズリによる面が見える。

E-123は須恵質の土馬、裸馬で頭部と脚、尾を欠損している。粘土の貼り付けによって性器を表現している。背中部分はケズリにより平坦な面を作る。

E-124は大型の甕B、口縁～中胴部片で口径は40.4cm、残高42.7cmを測る、歪みが見られ、体部の内外面はタタキ調整である。

E-125は黒曜石の石鎌、回基無茎式の完形で押圧剥離によって整形されている。

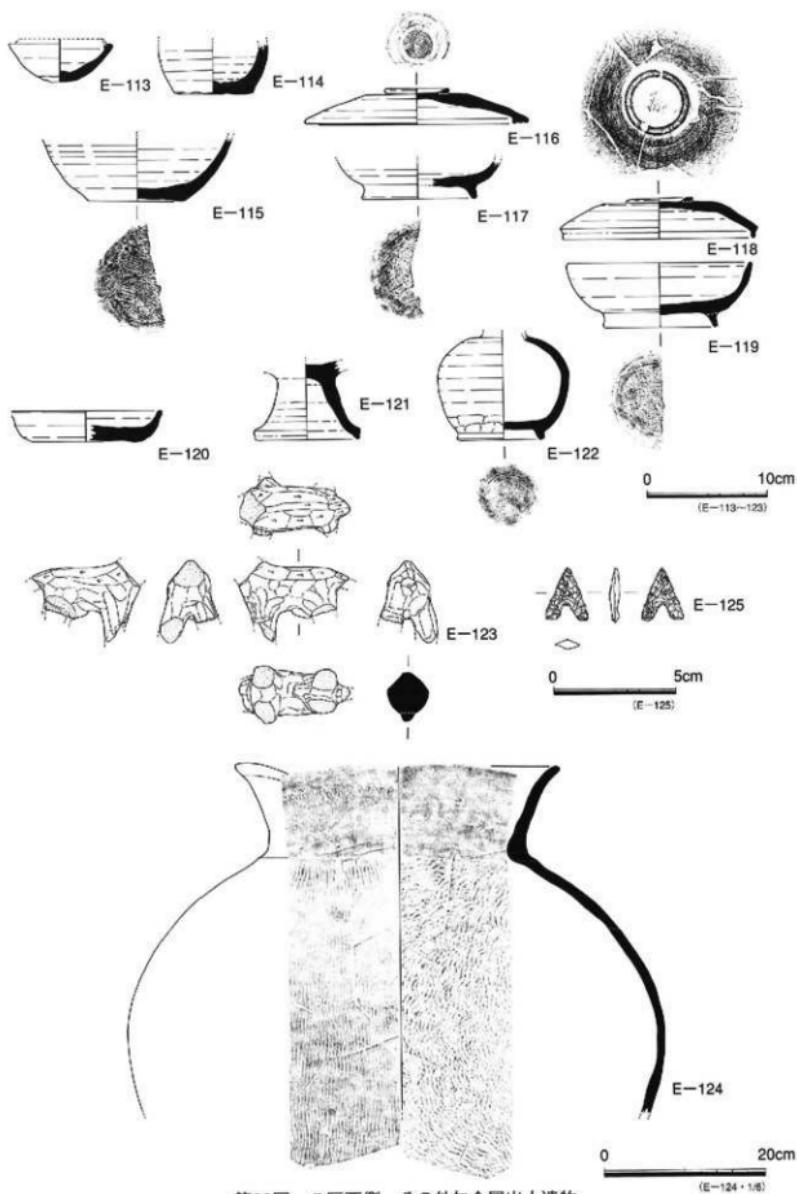
E-126～136はE区東側の包含層上層（暗灰褐色土～黒褐色粘土質）出土遺物である。E-126は須恵器の蓋で、しっかりした宝珠つまみが付き全形は小型であったと思われる、壺Gの蓋であろう。E-127は壺H、80%ほど残り口径は8.2cm、立上がり高は0.3cmを測る、底部はヘラ切り→ナデ、受部の貼り付け痕が比較的良く分かる、外面は被灰している。

E-128は小型の壺、底部のみで高台を付す、底部の調整はナデ、体部外面は回転ヘラケズリ。E-129は須恵器の高台片、底部調整はケズリ？→ナデでヘラ記号あり。E-130も須恵器の高台片、見込み部分に円形の別須恵器片が付着・剥離しており、かつ、見込み部分には緑色の釉が全面的に被っている、置台として転用したか、但し、破損面には灰が全く被っていない。E-131は壺Hである、風化が著しく調整は不明瞭であるが切り離し後ナデと思われる。

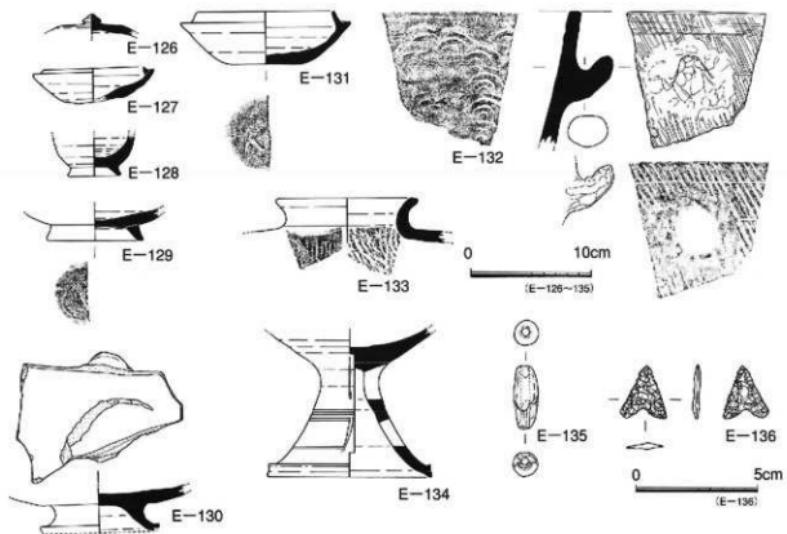
E-132は須恵器の櫃、口縁～把手の小片で内外面の調整はタタキで二条の沈線が認められる、E-133は甕、肩部にヘラ描きによる円弧状のヘラ記号が施されている。E-134は高壺、二段二方向の透かしで上段は切り込み、下段は方形？透かしで中段に二条、下段に一条の凹線を施す、壺の見込み部分に綠釉が被釉する。

E-135は土師質の土鉢、一部欠損しており、残存長5.2cmを測る。E-136は黒曜石の石鎌、回基無茎式で僅かながら先端と基部が欠損している。

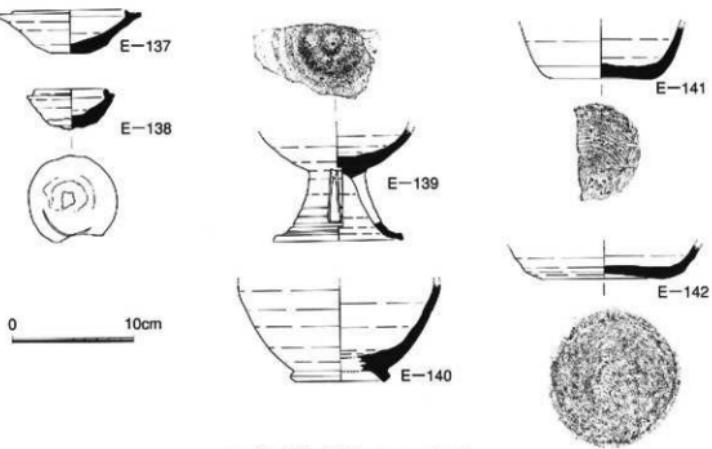
E-137～142はE区東側のその他の包含層出土遺物である。E-137・138は須恵器の壺H、E-137は外面で被灰しており調整不明瞭、ヘラ切り→オサエか、蓋の可能性も否定できない。E-138は90%残であるが口径6.0cm、受部径7.3cm、器高3.3cmと極めて小型の壺Hである、小型のミニチュアである



第32図 E区西側 その他包含層出土遺物

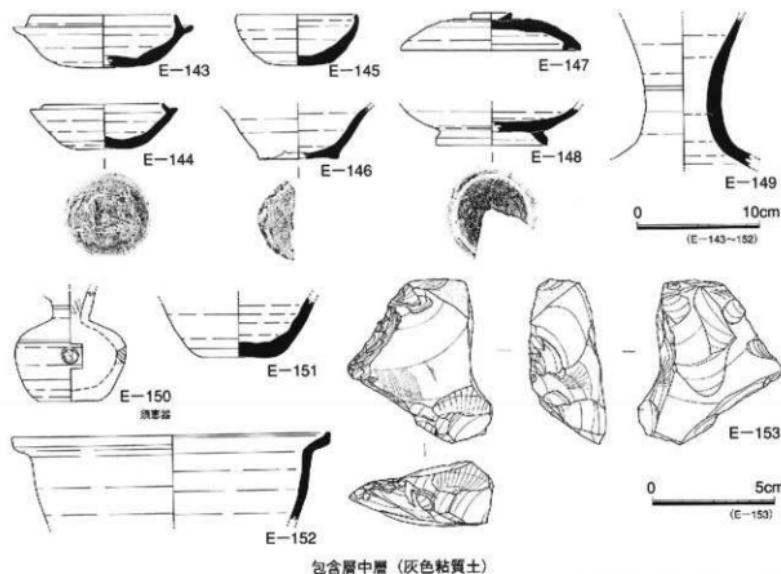


包含層上層（暗灰褐色土～黒褐色粘質土）



その他包含層（側溝・トレンチほか）

第33図 E区東側 出土遺物①



包含層中層（灰色粘質土）



包含層下層（灰色オリーブシルト）

第34図 E区東側 出土遺物②

が整形にはロクロを使用しており回転ナデ痕がある、底部はヘラ切り未調整で凹凸が激しい、一部外面に別の須恵器片があり、重ね焼きをしたものか。

E-139は高壺、一段で二方向に方形の透かしである、壺部内外面に灰を被る。E-140は壺の底部、底部内面に緑色の釉を被る。E-141も壺の底部で、底部の切り離しは回転糸切りで底部周辺はケズっている。E-142は須恵器の壺、大型の壺か、底部の調整は回転糸切り→ナデ。

E-143～153はE区東側の包含層中層（灰色粘質土）出土遺物である。E-143・144は須恵器の壺H、E-143は口径12cm、受部径14.7cm、受部高0.9cmを測り、外面に白灰を被る。E-144は口径9.8cm、受部径12cm、受部高0.4cmを測る、底部はヘラ切り→ナデで僅かに周辺をケズっている（周辺ヘラケズり）、底面には被灰している。

E-145は壺Gの身、口径10cm、器高4.2cmを測り、口縁端部はわずかに内傾し薄く丸く收める、底部はヘラ切り→ナデで周辺をケズる（周辺ヘラケズリ）。

E-146は須恵器の壺C、焼成は極めて悪く軟質で黄褐色を呈する、また、破損部分付近が黒くススけているが、焼成時の温度が低かったためであろう、底部の切り離しは回転糸切り未調整で底部周辺に粘土の凹凸が残る。

E-147は壺Fの蓋、かえりを有し、小さな（径3.4cm）輪状つまみを付す。E-148は須恵器の底部片、底部調整はナデ。

E-149は壺K（長頸壺）、肩一頸部片で内外面は被灰する、頸部中程に凹線を一条施し、頸部の接合は粘土紐積み上げによる。E-150は須恵器の瓶、平底で頸部を欠損する、底部の調整はケズリ、穿孔部分は約半分ほど貫通しているが、もう半分には粘土が若干付着したまま焼成されている、また肩～頸にかけての内面にしばり目が残る。

E-151は壺の底部、下胴～底部は回転ヘラケズリを施す。E-152は須恵器の鉢（鍋）小片で、口縁は強く外反し、ほぼ直上に立ち上がる端面を持つ、口縁内面にススと思われる黒ずんだ箇所がある。

E-153は黒曜石の石核、但し、一部に刃部と思われる部分があり、スクレーパーとしても使用されたかもしれない。

E-154～156はE区東側の包含層下層（灰色オリーブシルト）出土遺物である。E-154は須恵器の蓋、小片で天井部のみである、宝珠つまみを付す天井は平坦で、つまみの周間に径4.8cmの円弧状の沈線を巡らす。

E-155は壺F、外面に被灰しており、重ね焼き時の重みのためか大きく歪んでいる、底部の切り離しは静止糸切り。E-156は須恵器の甕小片で、外面に格子状のヘラ記号を有する。

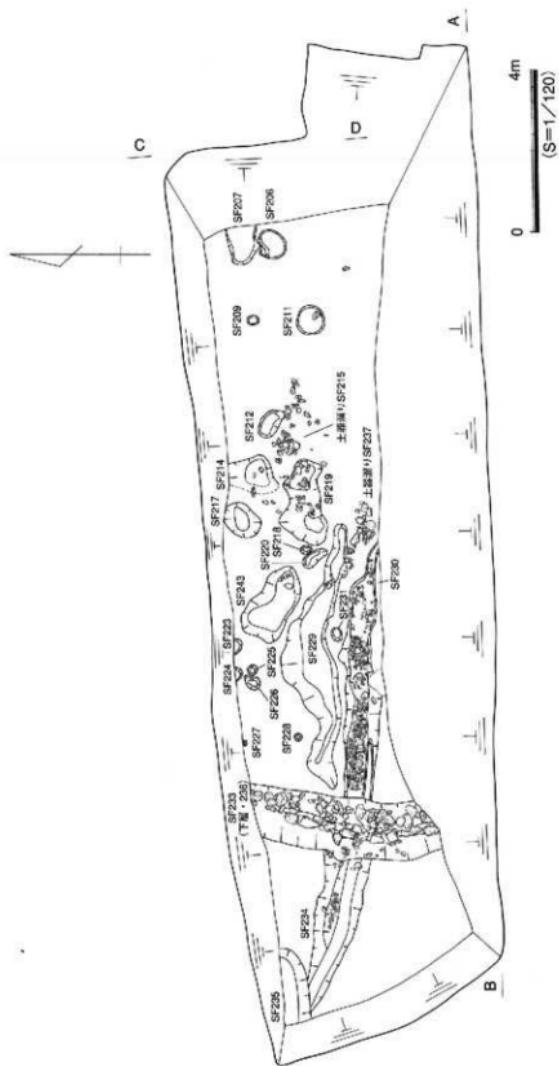
以上、E区の出土遺物を概観した。E区の出土遺物では古いものでは黒曜石や繩文土器片、古墳時代の須恵器などがあり、新しいものでは9～10世紀代の須恵器が出土しているが、大部分は8～9世紀代のものである。

現地調査の報告では遺構は旧河道のみで他の遺構の検出は無いことであるが、出土遺物は比較的に多く、時期的にも傾向的にはまとまっている。中でも、細かく層位に区分したうちE区西側の包含層下層（赤褐色粘質土）では山津Ⅲ～Ⅳ期（8世紀～9世紀）、特にⅣ期（8世紀）の遺物で大半が占められており、E区付近においては当該時間において何らかの人的活動が行われていたことが想定される。

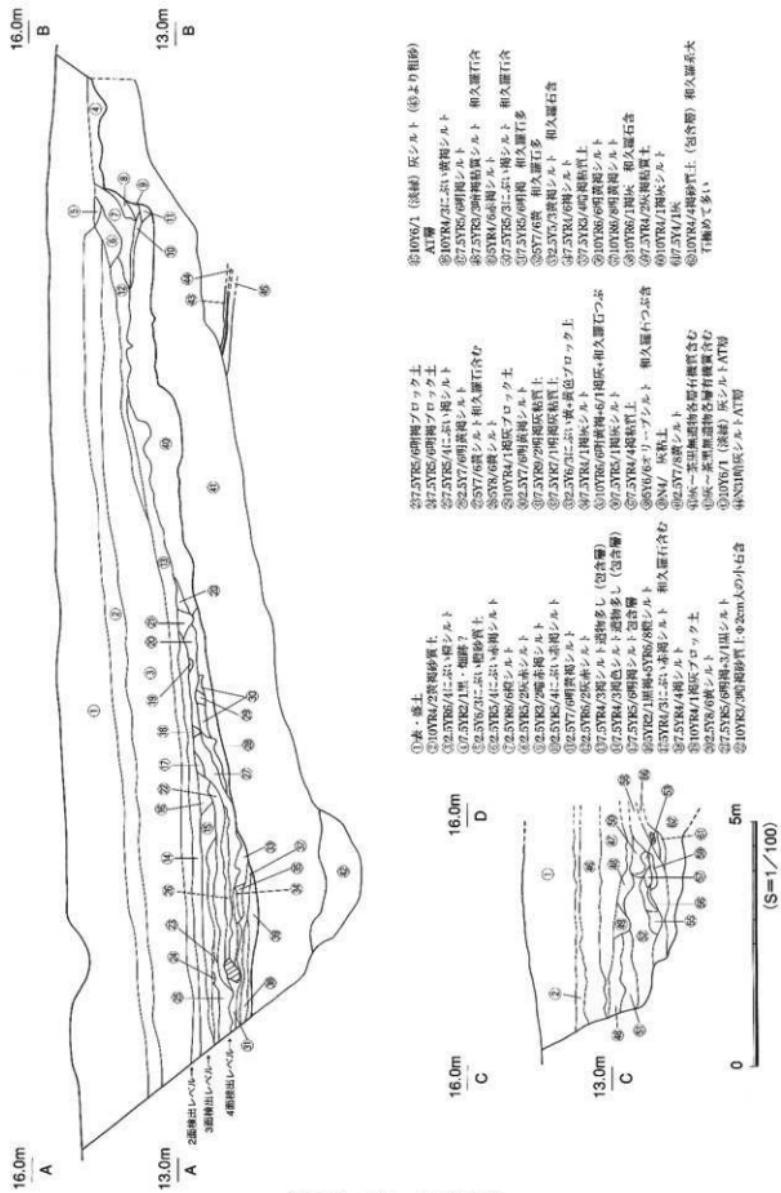
F区 遺構と遺物

（藤原 哲）

F区の調査面積は25m×7mを測り、その基本層序は次のようなものである（第36図）。地表下の表土・盛土（第①層）は調査区西端で0.7mと最も浅く、次第に深くなり調査区東端では1.4mを測る。調査区西端ではその直下が黑色層であり（第②層・旧畑跡か）、②層の下は地山を検出したが、調査区西側では②層を切り込むようにして9、10世紀の石列遺構（S F233・236）が断面でも確認できる。石列遺構以東は全体的に層位がなだらかに深くなり、黄褐色砂質土（第③層）、橙色シルト層（第④層）



第35図 F区 2面全景



第36図 F図 土層断面図

層) を挟んで G L - 2 m 以下から遺物が多量に出土する褐色シルト層(⑬層、⑭層)、黄色シルト層(⑯、⑰層)、暗褐色砂質土(⑯層)、にぶい褐色土(⑮層)などの各包含層が続く。最も深い調査区西端では G L - 3.8m 以下に有機質を含む灰~茶・黒の様々な小堆積の各層からなる無遺物層があり(⑪層)、さらにこの無遺物層の下には灰色と暗灰色のシルト層(⑯~⑯層)が比較的水平に堆積している。この⑯~⑯の灰色層は始良火山灰層(AT層)であるとの指摘を受けた層である(第2章第2節・中村報告)。

これらの堆積状況から、当該地の大まかな変遷としては次のように想定される。先ず、AT層の堆積から氷河時代にまで及ぶ地層が確認でき、それ以後、有機質を含むような湿地状の無遺物層の堆積があり、西に高く、東に低い谷底のような地形を呈していたと考えられる。それ以後の包含層各層は、基本的にこの地形を踏襲して堆積しており、この包含層から多くの遺物が出土した。

発掘調査は包含層の各層において全体的に平面精査を試み、遺構の有無を調べ、各層位毎に掘削して行った。掘削途上に石列が見え始め遺物も検出し始めたので、先ず G L - 2 m 前後の第⑬層(褐色シルト層)において精査を行った(第1面)。

この時、石列より西はすぐ地山層が検出されたが、この石列より東に向かって地形としては低く、深くなっている、明確な遺構が明らかでないので、その下の第⑯層(褐色シルト層)まで人力で掘削を試みた(第2面)。

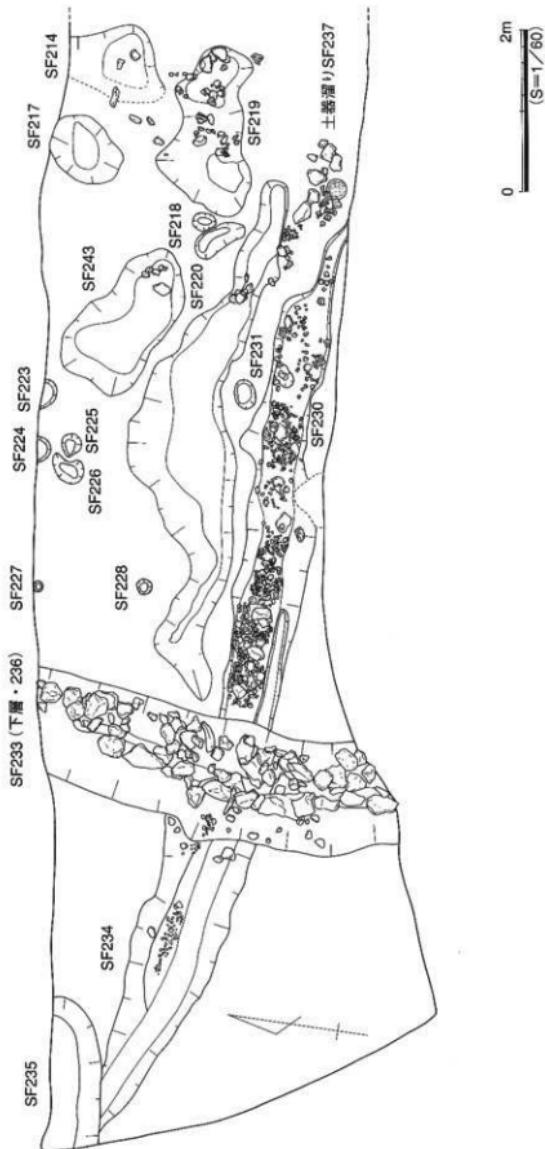
この⑯層(褐色シルト層)をベースとする層において小道状の遺構や溝、不定土坑などを検出し、先に見えていた石列と併せて調査した(第37図)。2面目の調査後、もう一段掘り下げ、明褐色~明黄褐色シルト層(第⑯、⑯層ほか)をベース土とする第3面を、更に一段下げる明褐色~褐色粘質土(第⑯、⑯層ほか)をベースとする第4面を調査し、地山層(灰~黒・有機層)に達した。

3~4面では不定形の土坑を若干検出したが、いずれも人為的なものか、地形の凹みか判断できなかった。調査後、出土遺物を検討したが、ある程度時期がまとまっているものもある一方、3面と4面との遺物の年代差は無く、むしろ、自然地形的な低湿地に遺物が堆積し、各遺構も人為的なものというよりは概ね自然地形の凹凸やブロック状に固まった土に堆積した遺物として検討しなければならないであろう。以下、各調査について述べる。先ず、第2面目の調査成果は次のようなものである(第35・37図)。

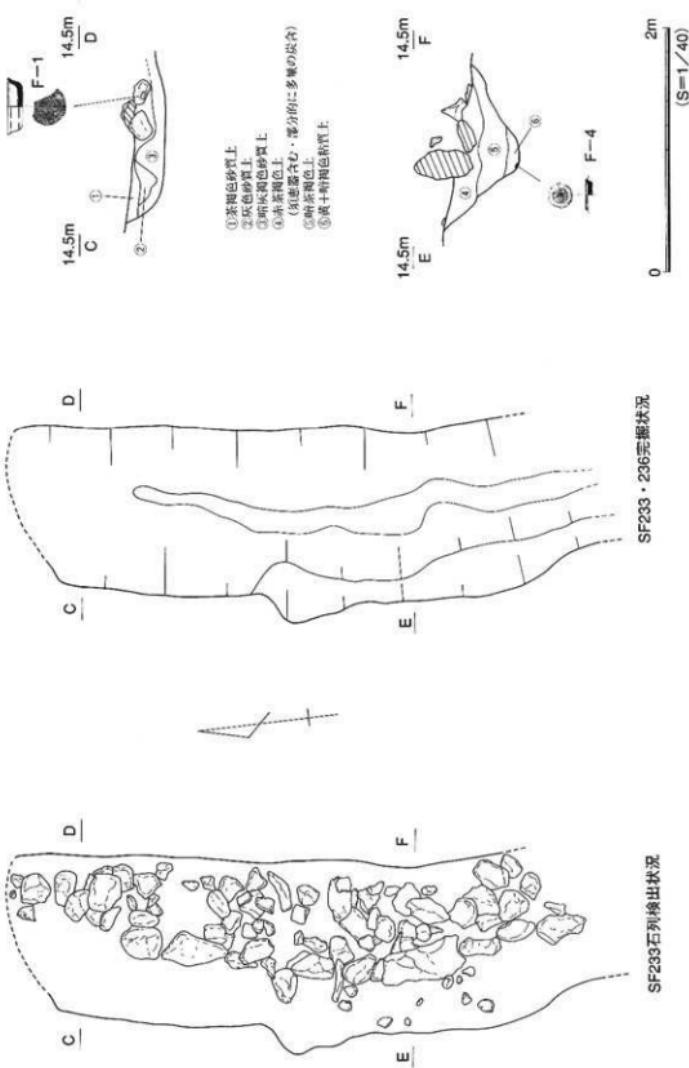
第2面目の西部で検出された石列遺構は径10~50cm 大の大礫がやや乱雑に置かれたものである。大礫が検出されたのはその上層のみで、下層は南端では V 字状に近い溝のような形態を示していた。そこで上層の石列遺構を S F 233、下層の溝状遺構を S F 236として調査を行った。

S F 233・S F 236は幅1.5m 最大深さ0.5m、検出長さは4.5m、南北方向に伸びる(北に浅く南に深い)溝状の遺構で上層には大礫が多数検出された(第38図)。出土遺物は極めて少なく、石礫と共に須恵器の皿E(F-1)と高台片(F-2)、甕片(F-3)、蓋片(F-4)が図化された。

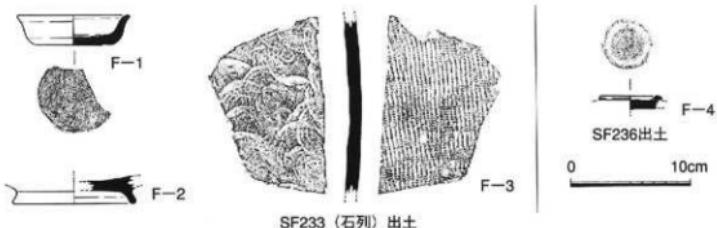
F-1は平底で底部の切り離しは回転糸切り、内面は被灰している、F-2は高台片で底部はケズリ、F-3は甕片で内外面タタキ調整である。また、下層の S F 236からは須恵器の蓋片(F-4)が最下層で出土している、輪状つまみ内の切り離し部分は静止糸切り→ナデ調整。



第37図 F区 2面（西半）遺構平面図



第38図 SF233・236平・断面図



第39図 F区 SF233・236出土遺物

SF230・SF234は、この石列遺構SF233・236に切られて、直交するように東西方向に走っている。SF230は須恵器の細片を敷き詰めた小道状の遺構で、SF234も石列に切られているため詳細は不明であるが、位置的に考えて一連のものと考えられる。

SF230は幅0.6~0.9m程度で検出長さは6m、西はSF233・SF236に切られ、東は調査区中央部付近で遺構の肩がやや不明瞭になり調査区外へと延びる(第40図)。SF234は位置的にはSF230から続く位置にあるが、幅は1m内外でSF230よりやや広く、出土する須恵器片などもやや少ない、SF234は東に石列SF233・236に切られ、西は土抗SF235に切られている(第37図)。

須恵器片が大量に出土したSF230は検出面からの深さが10cm未満の浅い溝状の部分に須恵器片、窯壁片、小砾が大量に出土した。遺構の底面はやや硬化しており、出土遺物は10cm未満の破片が大部分を占めていた、これらが意図的に粉碎し、敷き詰めたような状況であった(第41図)。

F-5~55はSF230・234出土遺物である。F-5~9は何れも須恵器の細片でF-5・6は宝珠を付した蓋でつまみ部分、F-7は端部が屈曲する蓋、F-8は須恵器の环H、F-9は口縁端部がくびれる塊Aである。

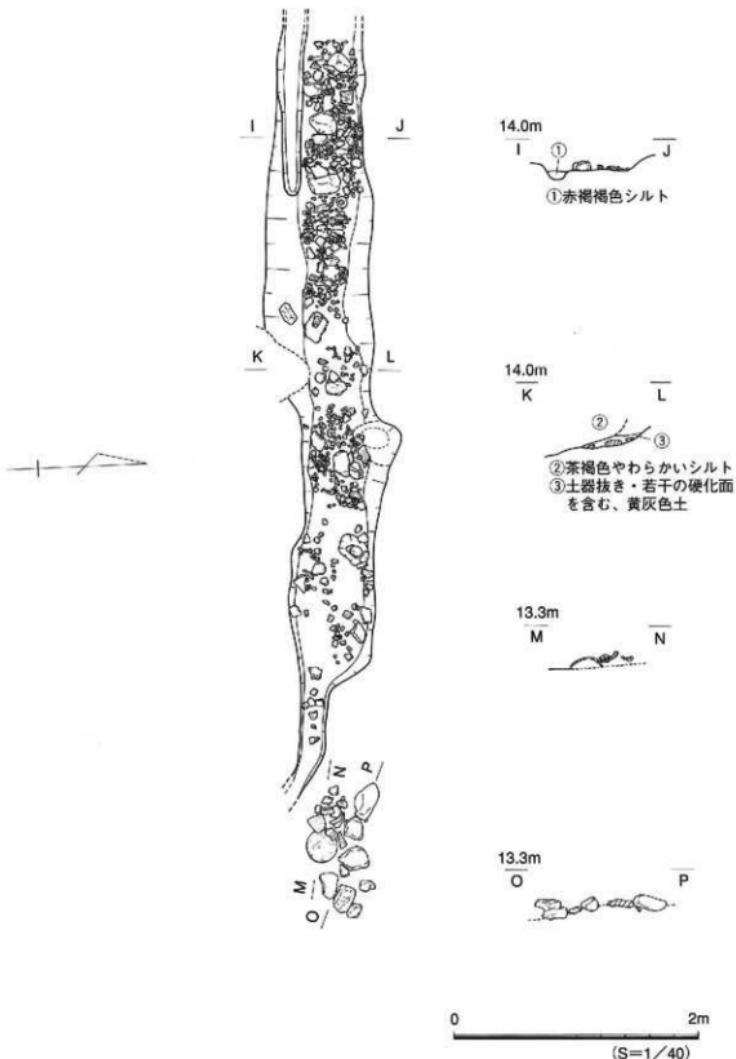
F-10~11・13は塊A、何れも細片でF-11は溶着資料である。F-15・17・18は底部片で回転糸切り痕が残る。

F-12は高台の溶着細片で14・16は底部片。F-14は風化が著しく灰を被り、F-16の底部はナデ。F-19はIII A、底部の切り離しは回転糸切りで、歪みを生じている。

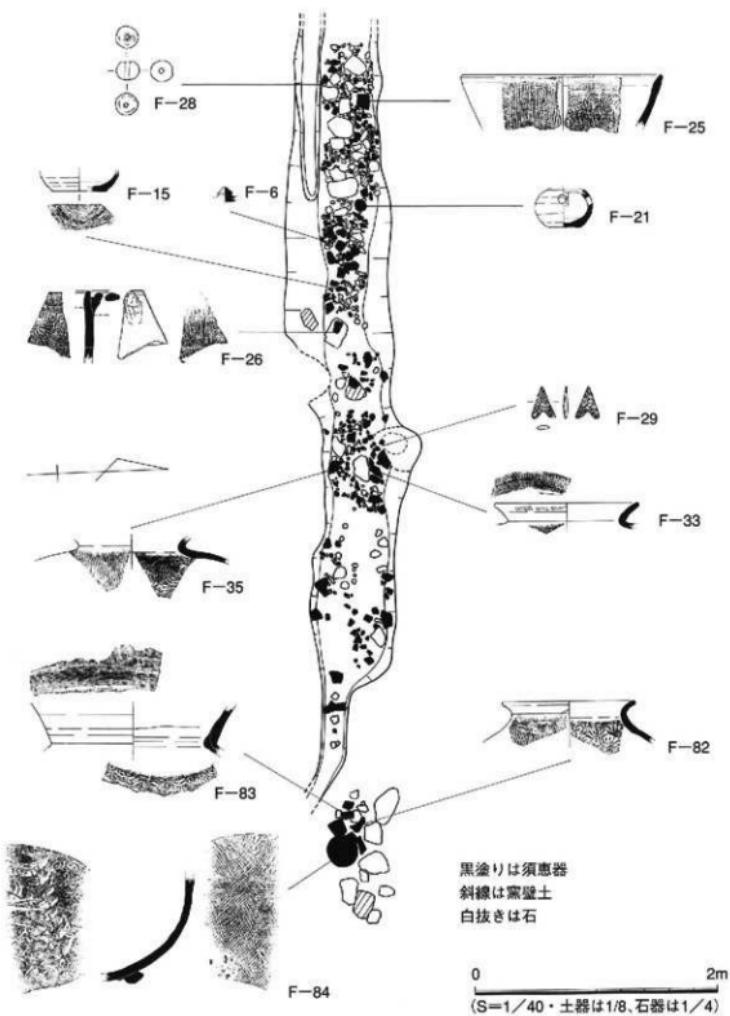
F-20は小型の壺(壺D)で残存は良好であるが、被灰と傷みが激しく、かつ、歪みが生じている。底部の切り離しは灰により不明瞭。F-21は壺の体部、意図的に破損したように、肩部の部分で水平な擬口縁状の剥離が生じている。F-22・23は壺の肩部で小片、F-24は高壺片で風化が著しい。F-25は鉢か、内外面にタタキ調整が残る。

F-27・28は土師質の土錐・土玉。F-29は黒曜石の石錐で完形である。F-30は棒状の石で断面が矩形に近い、叩き石か? F-30は石器か自然石か不明であるが、小道状遺構SF230から出土しているため図化した。

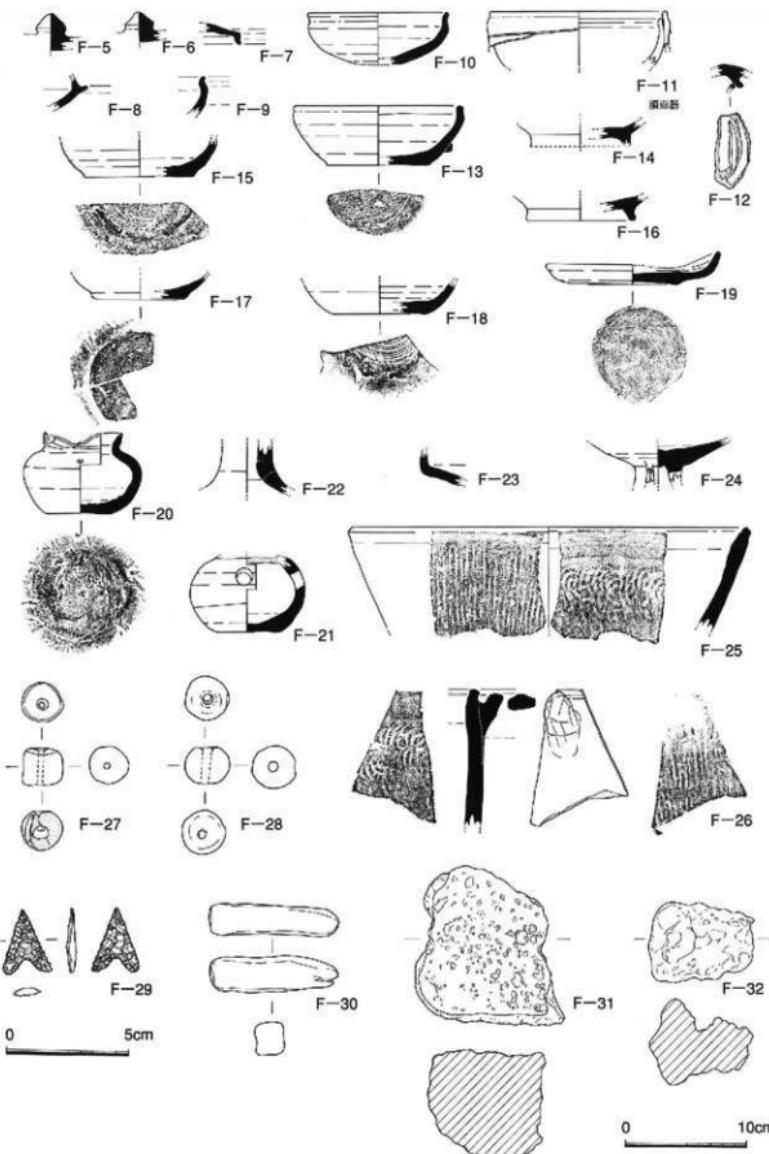
F-31・32は窯壁片である、単なる窯壁であるが、SF230には窯壁片を転用し、人為的に多数敷きつめられている状況にあったので代表例として2点を図化した。



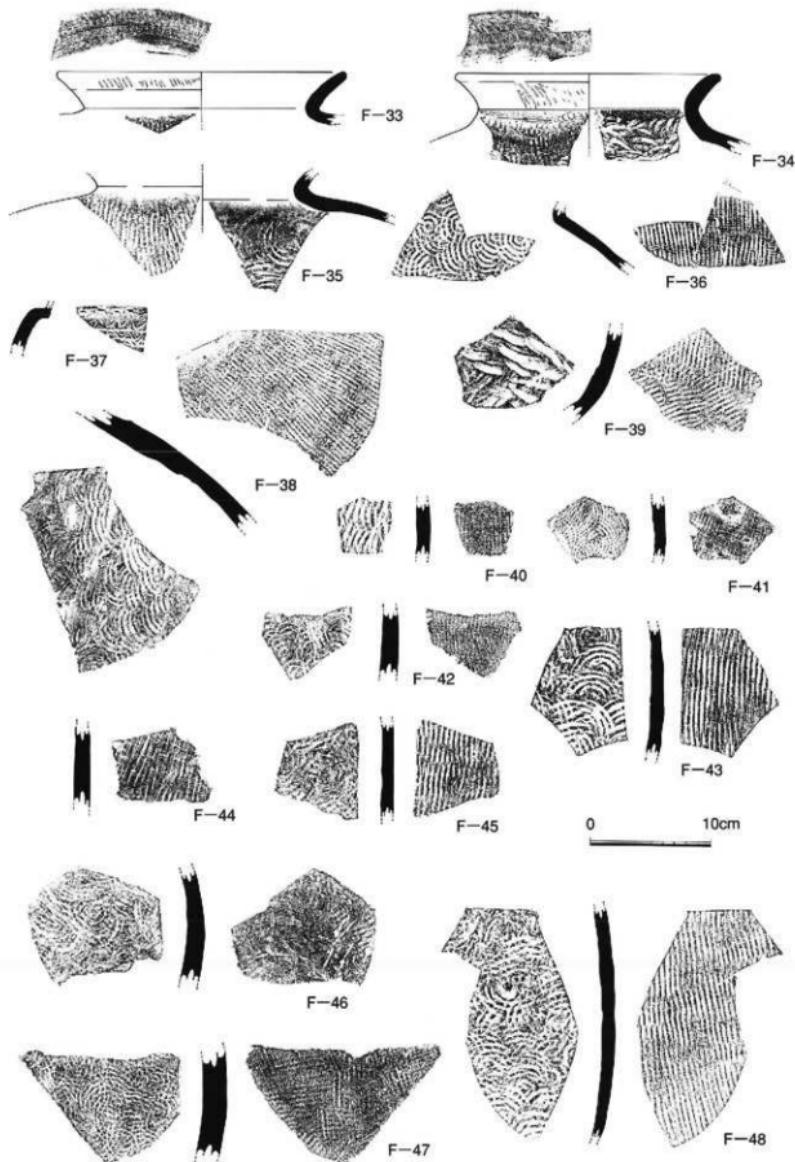
第40図 S F 230 (小道状遺構) 平・断面図



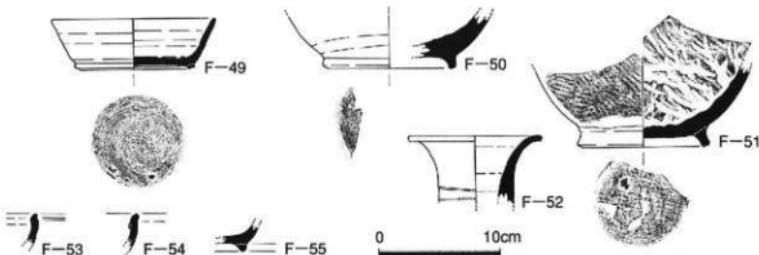
第41図 S F 230 (小道状遺構) 遺物検出状況



第42図 F区 SF 230 出土遺物①



第43図 F区 SF 230 出土遺物②



第44図 F区 SF 234出土遺物

F-33~48は須恵器の破片、これも細片をSF 230に人為的に敷き詰めた状況にあった。代表的なものを図示したが、大きいものでは長軸20cmものから、小さいものでは軸1cm未満のものもある。

F-49は壺Bで底部の切離しは回転糸切り。F-50・51は壺の高台片、F-51は内外タタキ目が残り底部はナデ。F-52は壺の口縁、細片であり沈線が2条認められる。F-53・54は塊Aの細片、F-55は高台の小片である。

F-56~68は土器溜まりSF 215の出土遺物である。SF 215は第2面の調査区中央よりやや東から出土した土器溜まりで、明確な造構は確認できなかったが多数の土器がまとまって出土している。

F-56は輪状つまみの小片。F-57~60は高台片、底部の調整はF-57・58がナデ、F-59が回転糸切り、F-60は静止糸切りである。F-61・63は塊、F-62は壺の底部、F-64・66は壺A、F-65は壺B、F-67・68は皿Bである。総じてこの土器溜まりSF 215から出土している遺物には風化したものが多い。

SF 219は上器溜まりSF 215の西に位置する長軸2m、短軸0.6mの土坑状の窪みであり、SF 215とは一連の造構であった可能性もある。出土遺物はF-69~76の8点を図化した。

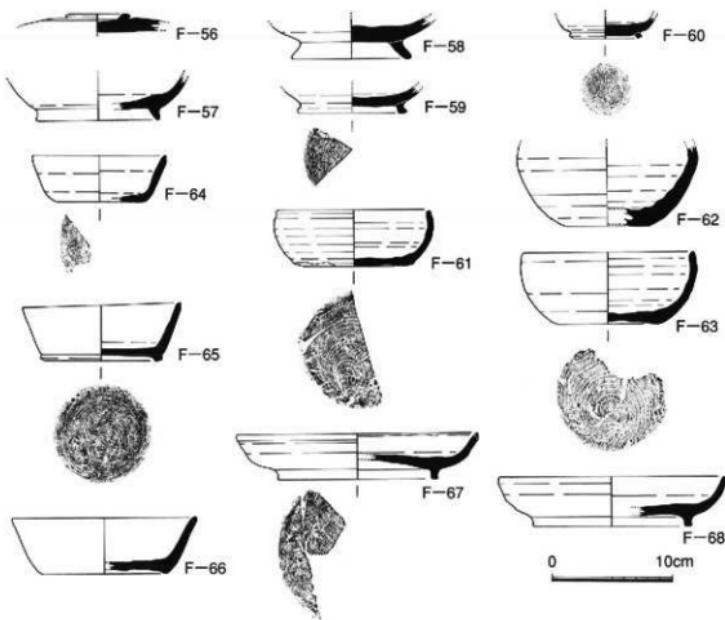
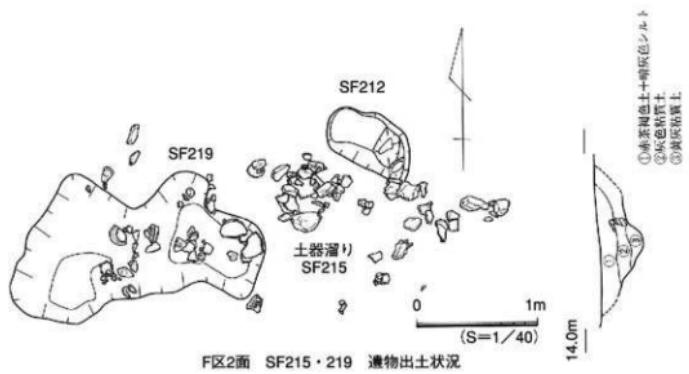
F-69・70は高環の細片、何れも焼成が極めて悪く一見、土師質に似た橙色を呈している。F-71は壺A、底部中央に焼成後の穿孔が見られるので、焼台として転用したものかもしれない、但し、窯・灰原からの出土ではなく、顕著な2次焼成の痕跡も認められない、底部の切離しは糸切り。

F-72は塊で底部の切離しは回転糸切り。F-73は皿B、約50%残で底部の切離しは糸切り→ナデ、内面に灰を被っている。

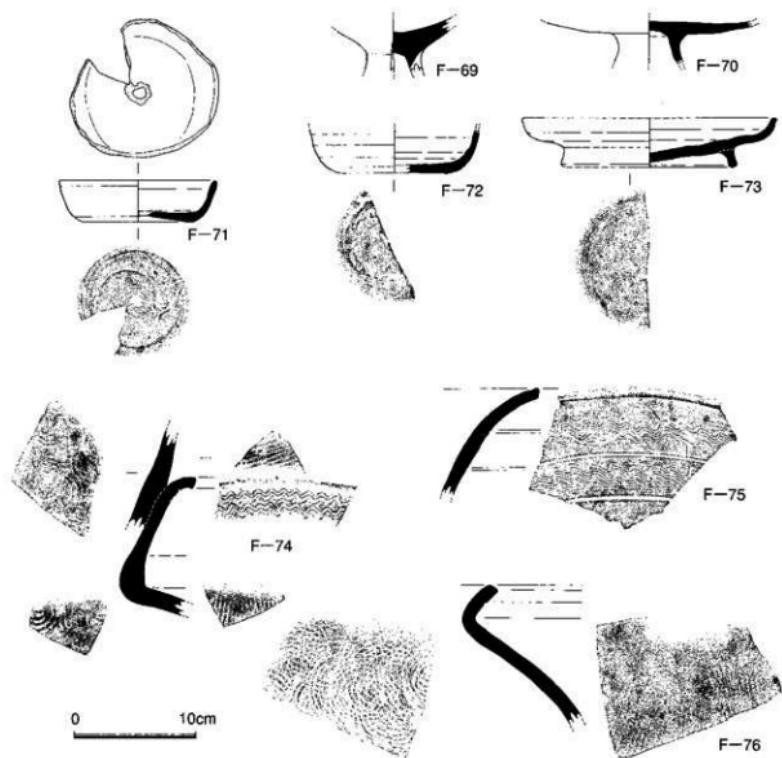
F-74~76は甕片、F-74は甕Aの口縁片と体部片とが2個体溶着しており、口縁部のものには太描きの波状文を施している。F-75は甕Aの破片、沈線と波状文を施す。F-76は甕Cの口縁片である。

F-77~84は2面の各種造構出土遺物である。F-77~79はSF 212出土遺物である。SF 212は先に記した土器溜まりSF 215の北東にある土坑状のもので、蓋・壺・塊の細片が出土している。

F-77は口縁端部に垂下がほとんど消失している蓋片で壺AかBの蓋になると思われる。天井は回転ヘラケズリでつまみ部分は欠損のため不明。F-78は回転糸切り痕を残す底部片、F-79は高台部分の小片である。



第45図 SF215（土器溜り）出土遺物



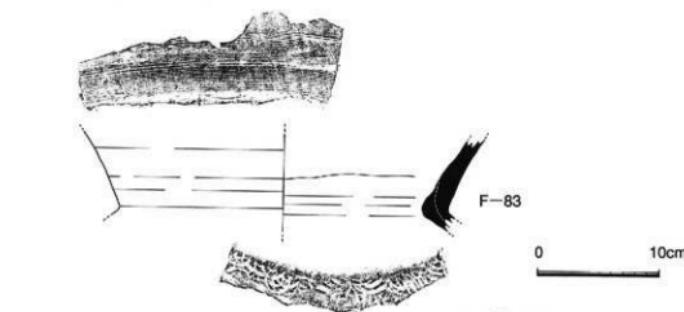
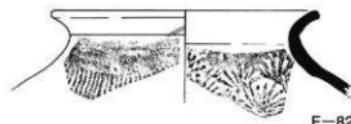
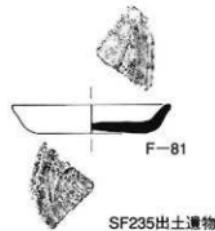
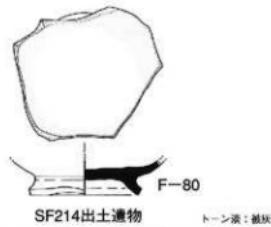
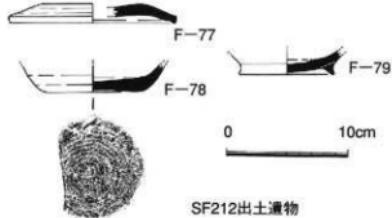
第46図 F区 S F 219出土遺物

F-80はS F 214出土遺物で高台片、小片であるが重ね焼きと思われる部分が認められる（見込み部分に灰を被り円形の変色）、出土したS F 214は調査区中央北端に位置している。

F-81はS F 235出土遺物の皿Aである、S F 235は先に見た小道状遺構S F 234を切るように検出された土坑状のもので調査区北西隅に位置している。

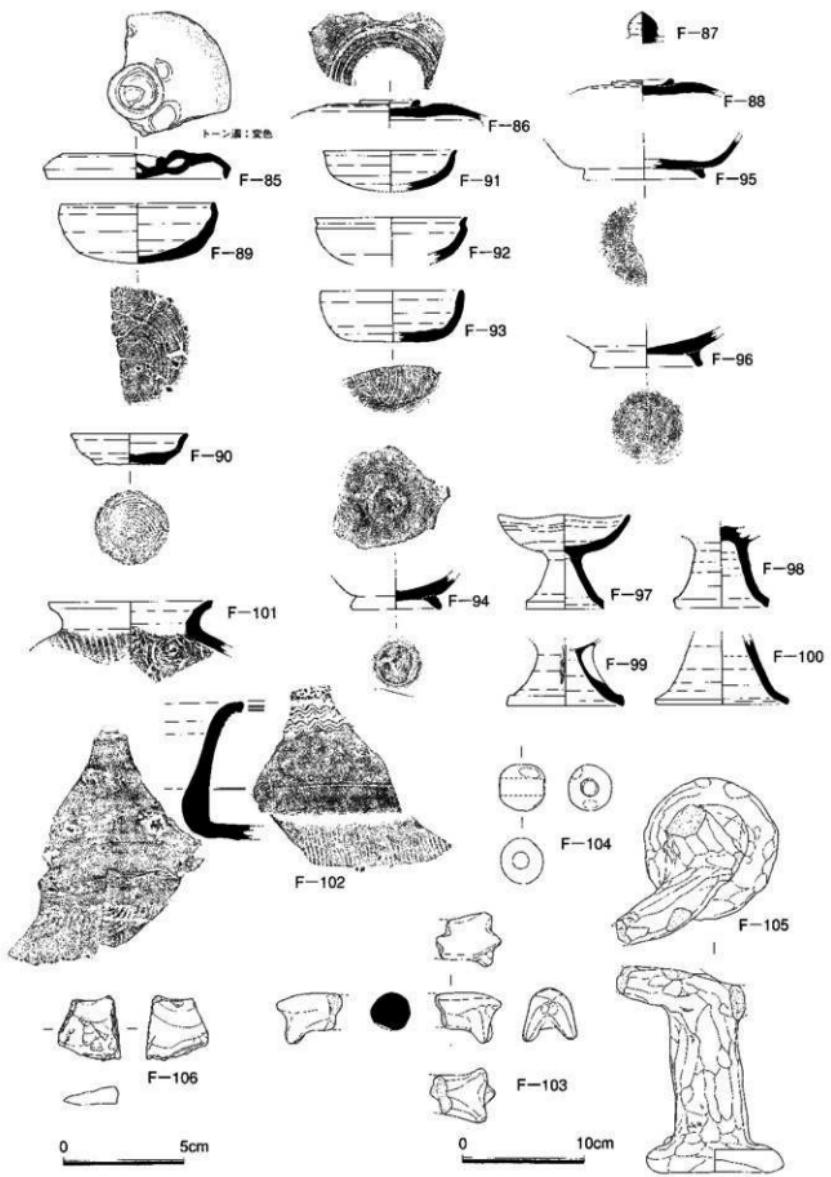
F-82～84はS F 237出土遺物である。S F 237は小道状遺構S F 230の直東に位置する土器溜まりでS F 230と同一関連の可能性も高い、出土遺物のF-82～84はいずれも蓋でF-82は甕Cの口縁片、内面の叩き具は車輪文である。F-83は甕A片、頸部と体部との接合痕が明瞭に残る、肩部外間に灰を被る。F-84は大型甕の体部片で内外面タタキ調整。

F-85～105はF区2面の包含層出土遺物で、特に断面図では第36図の①・⑫・⑬層を中心とした包含層出土遺物である。F-85～88は蓋片でF-87以外は輪状つまみ、F-85は火膨れがひどく、外面は重ね焼きと思われる変色部分が顕著である。F-86は10%ほどの小片、天井部分に沈線状の条痕



SF237（土器溝）出土遺物

第47図 F区 2面遺構出土遺物



第48図 F区 2面包合層（断面図④・⑫・⑬層）出土遺物

が残る。F-87は大型の宝珠状つまみ片で、F-88は微細片である。

F-89・91-93は塊で、F-89には体部に重ね焼きの変色が認められる、F-91は小型の塊で底部はケズリ調整を施す。F-90は小型の皿状の形態を示す、底部の切り離しは回転糸切り痕で、やや底部が高くなっている。

F-94-96は高台の小片で、F-94の底部調整はナデ、また底部には円状の条痕が認められ、見込み部分にはX印のヘラ記号が記されている。F-95・96の切離しは静止糸切りで、F-96の底部には灰が被っている。

F-97-100は高坏類でF-97は50%残存、極めて小型の高坏で復元口径は10.8cm、器高は7.7cmを測る、坏部の底部はケズリで、残存部分に透かしは認められない。F-98も残存部に透かしはない小型の脚であるが、F-99は貫通していない切込みが認められる、また下-99は坏部と脚部との剥離が残り、接合面が観察できる。

F-101・102は壺片、F-101は壺Cで内外面タタキ調整、F-102は大型の壺Aの破片、頸部には五条の太い沈線が巡る。

F-103は須恵質の土馬片、極めて小型で腹部～尻尾部分までの残存長が5.4cm、脚の高さも1cm程度で、馬具や性器等の表現は認められない裸馬である。焼成も極めて不良で灰白色を呈している。F-104は十師質の土玉ではぼ光形、焼成時の黒斑が残る。

F-105は上師質の十製支脚、一部欠損するが約80%ほど残存している、残存長16.2cm、脚部径11.6cmを測る。F-106は石器、暗赤色を呈する瑪瑙の剥片で最大長2.7cm、幅2.6cmを測る。

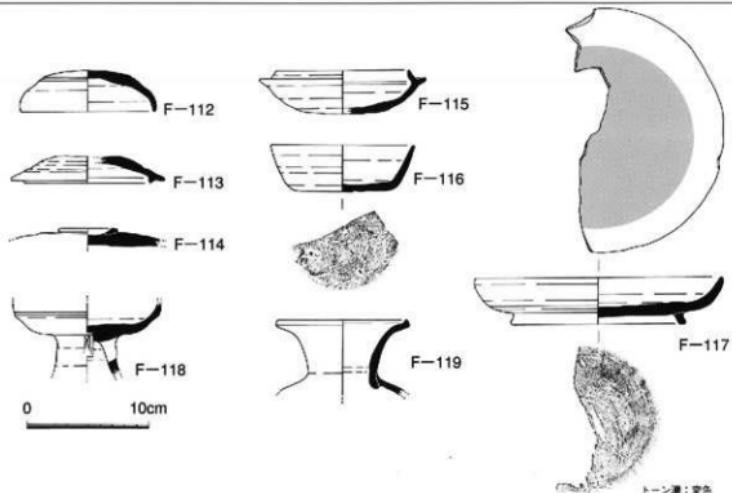
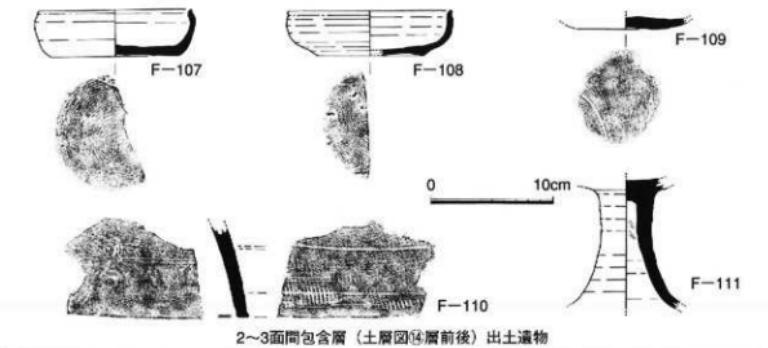
2面の調査終了時、既にF区西端は地山が検出されていた。先述したとおり、F区の地山は西に高く、東になだらかに低くなっている。従って、F区では2面終了後も調査区東部では湿地上の包含層が堆積していた。調査では2面で小道状の遺構等を検出したので、2面終了後も包含層を少しづつ掘り下げ、精査等を繰り返し、3面と4面の調査を試みた（第36図）。

F-107-111は2～3面間の包含層出土遺物で、上層図の第36図でいえば概ね第④層前後からの出土遺物である。F-112-117は同じく3～4面間の包含層出土遺物で、層位は土層図の第36図でいえ概ね②、③、④層等に対応する。

F-107・108は壺AでF-107は口縁端部はくびれるが、強くナデた結果か、やや内窪ぎみである。F-108はやや薄手、F-107・108とも底部の切り離しは回転糸切り。F-109は小片の底部片で静止糸切り痕が残る。

F-110は脚部片でタタキ痕が残るが、内面は同心円文にて具痕をナデ消している、子持窓の脚か。F-110は高坏片で残存部に透かしは無い、脚が高く、残存高は10.7cmを測る、内面にはシボリ痕が残る。

F-112は壺Hの蓋、外面肩部に灰を被る。F-113はかえりの有る蓋の小片でつまみ部分は欠損、穴井部に灰を被っており、かえり部分の（復）径は10.2cmを測る、壺Gの蓋であろう。F-114は輪状つまみを付した蓋の小片で外面全体に灰を被る。F-115は壺Hの身で50%残、底部の調整はケズリ→ナデ。



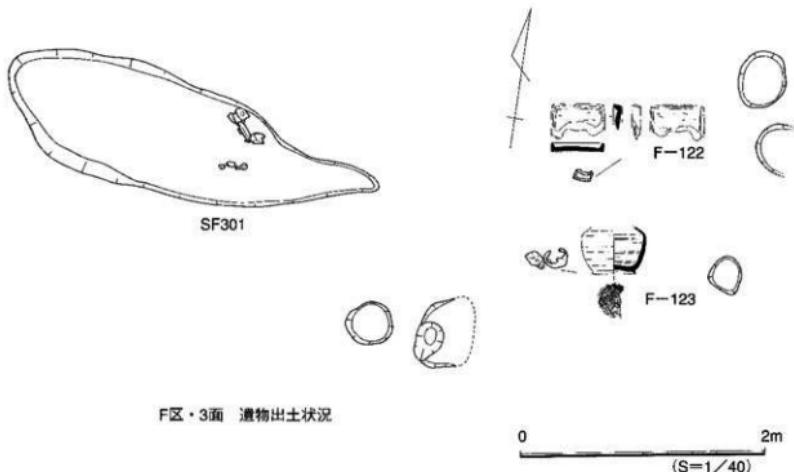
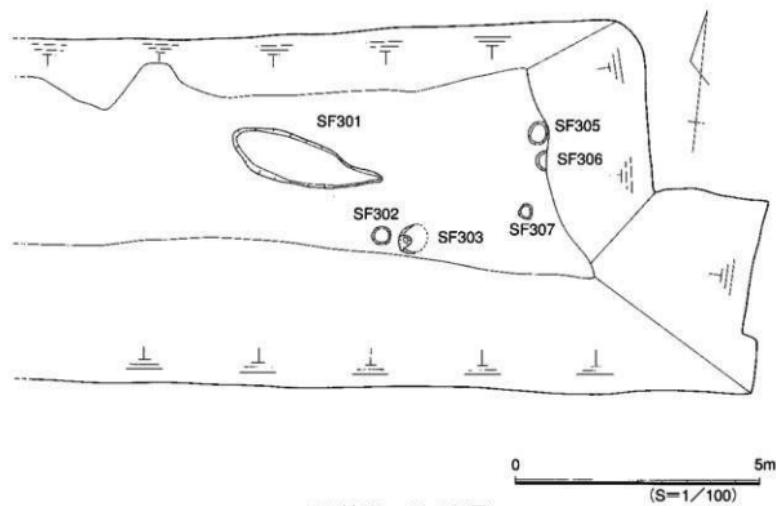
3~4面間包含層（土層図⑩・⑪・⑫・⑬層）出土遺物

第49図 F区 包含層出土遺物

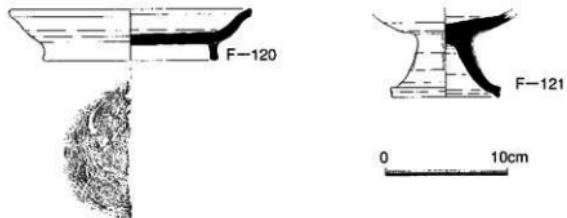
F-116は壺Aで40%残、口縁は直線状に伸び、丸く先尖状に納まる、底部は平底で回転糸切り痕が残る。

F-117は壺Bで（復）径は20.4cm、（復）高台径は14.2cmを測る、1cm高の高台に、体部は丸く内湾して立ち上がる、内面に重ね焼きと思われる径14.2cm程度の円形の変色が見られる。

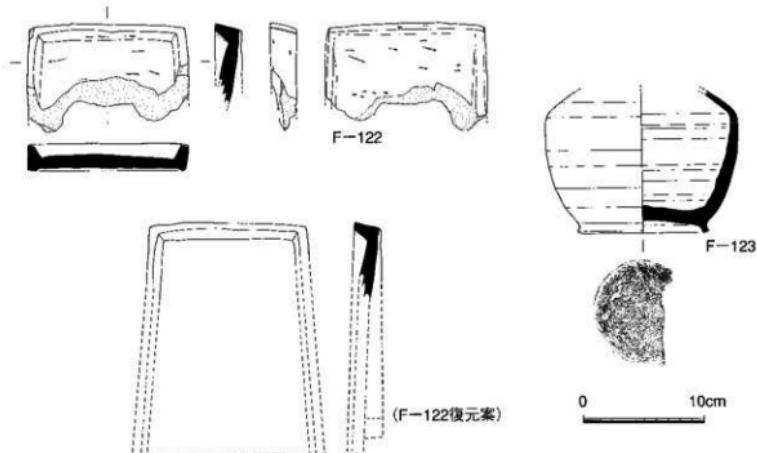
F-118は高壺で壺部～脚部にかけての小片、2方向に（長方形か）透かしが残る。F-119は壺の口縁で接合痕が明瞭に残る、わずかな小片であるが、イチジク形の体部を呈する壺Mと思われる。



第50図 F区 3面 平面図



SF301出土遺物



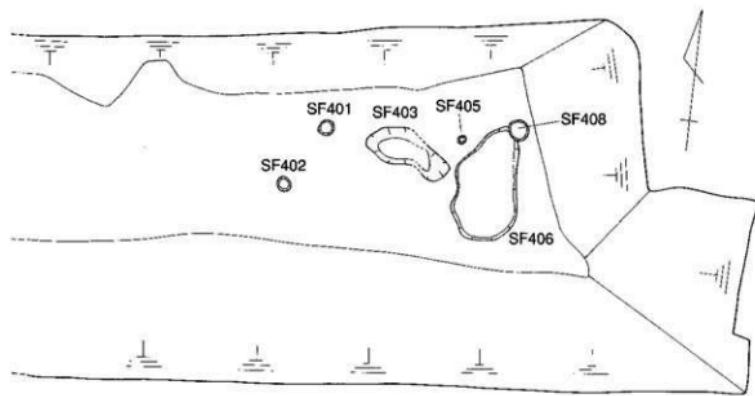
3面精査時出土遺物

第51図 F区 3面出土遺物

F-120・121は第3面精査時に検出したSF301出土遺物である。F-120は皿Dで50%残、(復)径は20cm、底部の切り離しは回転糸切り(→ナデ?)で貼り付け高台。

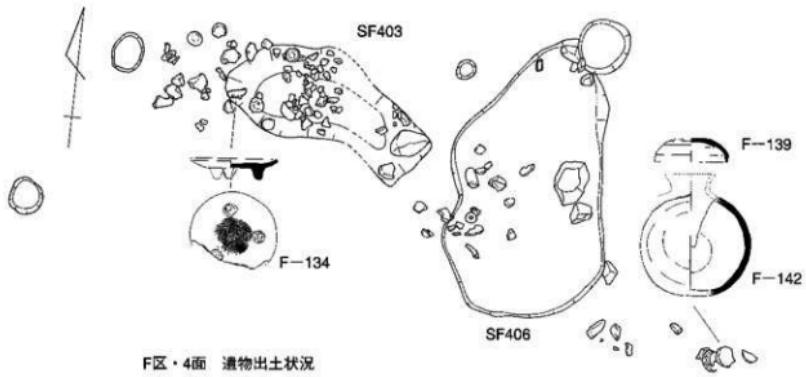
F-121は高环の脚~坏部にかけて、脚部には三方向の切込みがあるが貫通せず、焼成が甘く灰黄色を呈する。

F-122・123は第3面精査時に出土した遺物でF-122が須恵質の鳳字硯、残存長6.6cm、狭端幅12.9、外堤幅1.2cm、高さ1.1cmを測る、硯面が前方(海部)に低く傾斜しているので堤背後方部には脚がついていたと思われる、頭部の外堤部(縁帶)はほぼ直角であるが僅かにハの字状を呈しており、陸部に向かって広がっていくものと思われる、残存部位には内堤等は確認出来ない、硯背面・海部共に砂粒の移動が見られ、外堤内外面にも砂粒の移動が顕著であるので、(静止)ケズリにより最終調整を施していると考えられる。



F区（末端）・4面 平面図

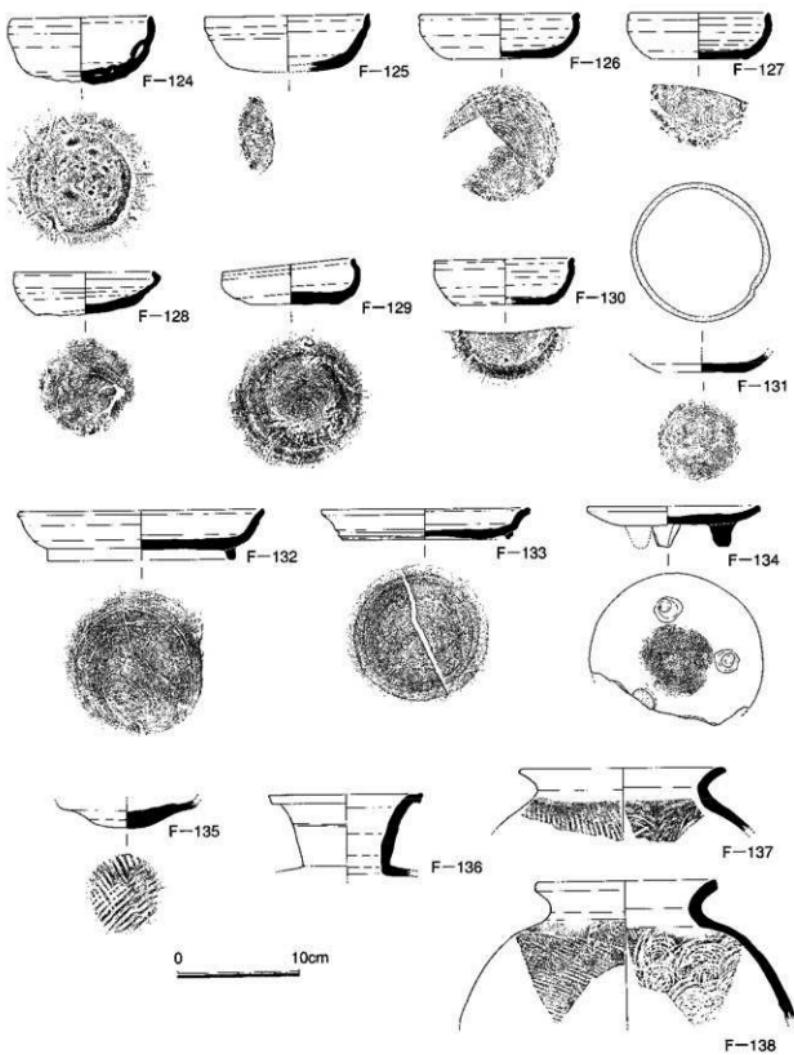
0 5m
(S=1/100)



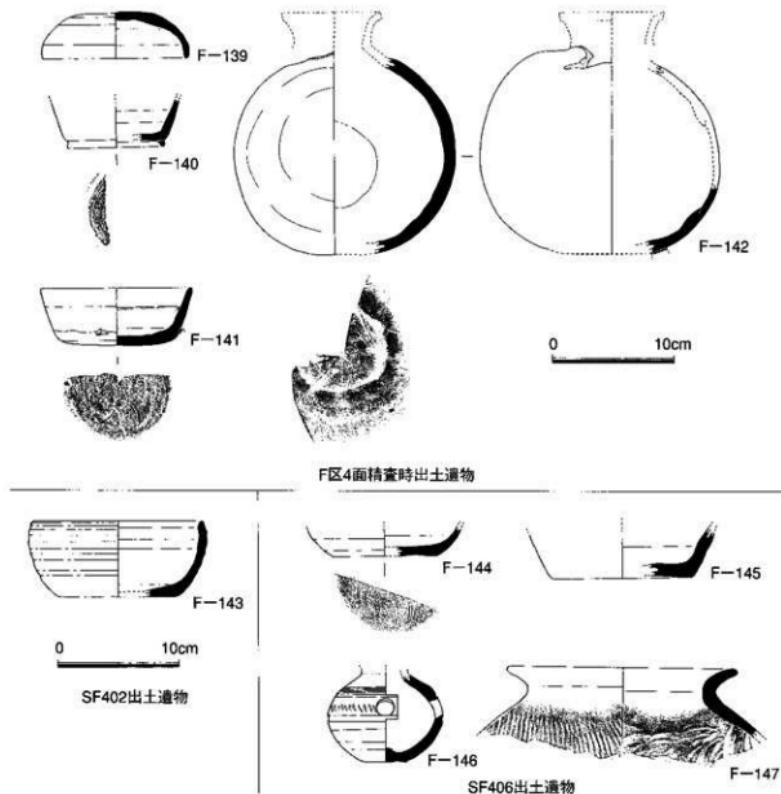
F区・4面 遺物出土状況

0 2m
(S=1/40)

第52図 F区 4面平面図



第53図 F区 SF 403出土遺物

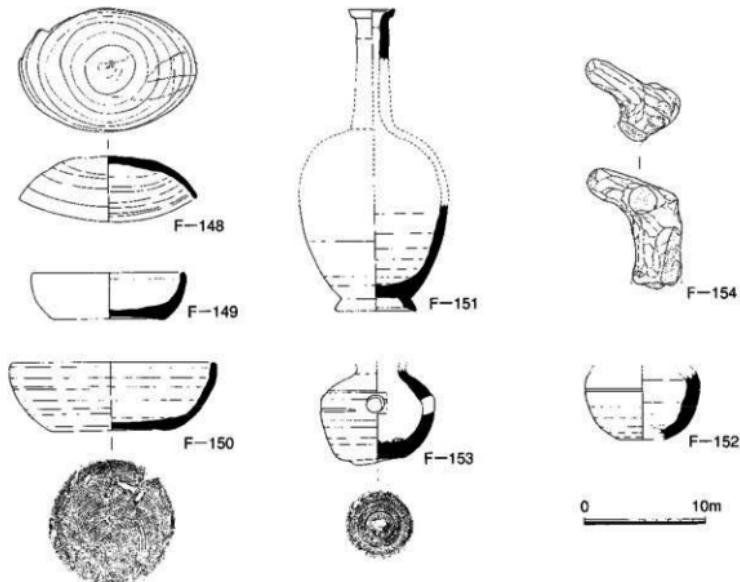


第54図 F区 4面出土遺物

F-123は高台付きの壺底部、底Kか、焼成が極めて甘く、ほぼ上師質に類した黄褐色を呈する、底部の切り離しは風化で不明瞭であるが、×印のヘラ記号が確認出来る。

第4面はF区の調査区最東部に位置する最も深い部分で、特にSF403・406の土坑状の凹みからある程度まとまった量の遺物を検出した（第52図）。F-124～138がSF403出土遺物、F-144～147はSF406出土遺物である。また、F-143はSF402出土遺物で、F-139～142が第4面を精査した時点では出土した遺物である。

F-124～130は壺Aで何れも底部の切り離しは回転糸切りである、F-124は完形で口縁部をナデるがくびれは無し、口縁の端部はわずかに内湾し、体部～底部にかけては火膨れが顯著、また体部には重ね焼きの変色が認められる。F-125は（復）径13.6cmを測り、口縁内面に別の須恵器片が溶着している。F-126は約60%残で（復）径は13.2cmを測る、口縁先端部の内外面に灰を被る。F-127は



第55図 F区 その他包含層出土遺物

50%残で(復)径11.6cm、器高3.8cmとやや小ぶりの塊A、F-128は外面に白灰を被り、体部は歪む、重ね焼きをしたためか。F-129も歪みがある塊A、底部の回転糸切り痕の周辺は僅かに盛り上がり、底部周辺に条痕が見られる。F-130は体部に重ね焼きの変色がある、また、これも底部の回転糸切り痕の周辺は僅かに盛り上がり、盛上がり部分に条痕が見られる。F-131は底部片で切り離しは回転糸切り痕が残る、体部は擬円錐状に水平に欠損している。

F-132~134は皿でF-132は皿D、90%残で口縁部分をナデにより凹ませ、口縁端部に平坦面を作る、底部の切り離しは回転糸切り→ナデ、焼成は悪く歪みがある。F-133は皿F、ほぼ完形で口径は17.2cm、器高2.5cmを測る、端正で各屈曲点の角度が強い、高台部分は非常に低く、斜めに貼り付け、逆三角形状の接地面も僅か、底部の切り離しは回転糸切りであるが、底部の周辺部は糸切り→ケズリ。F-134は皿X、皿部が非常に浅い三足の皿で、外面に白灰を被る、脚部は厚み・脚の高さ共に1.9cmを測るが、一足のみ欠損する、底部の切り離しは回転糸切りで切り反し後に脚を貼り付けている。

F-135は器種不明、(図では)下部に当たる部分に原体幅が3mmの厚い格子状のタタキ痕が残る、何かの接合部分か。

F-136は壺L、もしくはMの口縁片で沈線を一条施し、内外面に灰を被る。F-137は壺Cの口縁片で、外面タタキ痕、内面同心円痕が残る。F-138は横瓶で内外面はタタキ調整。

F-139は壺Hの蓋、やや厚手で稜と口縁端部の段は無し、天井はヘラ切り→ナデで天井周辺を一一周ケズる。F-140は壺Bの小片で体部は直線的に伸びる、焼成は悪く黄灰色を呈する、底部の切り離しは糸切り。F-141は壺A、45%残で（復）径は12.6cm、器高は4.7cmを測る、内外面に重ね焼き跡の変色が見られる。F-142は横瓶の体部、肩部に粘土の附着痕が見られる、横瓶にしてはかなり球状の器形である。

F-143は壺Aの小片で体部のナデ痕跡が明確である、底部調整はナデ。F-144・145は平底の底盤で、底部の切り離しは回転糸切り。F-145は焼成が悪く軟質、底部の切離しは腐耗の為に不明瞭。F-146は壺の体部片、肩部にカキ目、列点文を施し、底部調整はケズリ。F-147は甌Cの口縁片で、体部の内外面はタタキ調整。

F-148～154はF区のその他包含層出土遺物である。F-148は壺Hの蓋、80%残であるが、歪みがひどく梢円形を呈している、稜はなく口縁内面も無段、外面白灰を被る。F-149は壺A、焼成が甘く土師質に近い黃褐色を呈している、風化により調整は不明瞭。F-150は壺B、70%残で口径は17.1cm、器高は5.6cmを測る、焼成は悪く橙色であるが、見込み部分と底面のみ黒斑状に黒くなっているので正位詰めで焼成されたものと思われる、底部は平底で切り離しは回転糸切り。

F-151は水瓶、高台部分はハの字状に広がり、内側に斜め平坦な面を持つ、肩部は薄くやや丸く立ち上がる、内外面に緑色の釉を被り正位詰めと思われる、口縁部分は口径3.8cm、残高4.3cmを測り、口縁部に面を有する、底部と口縁部が出土しているが、直接的には同一個体ではないかもしれない。

F-152・153は甌で、F-152は細片。F-153の肩部の凹線は途中で途切れる、肩部には灰を被り、やや火膨れぎみである。

F-154は土師器の土製支脚で残存高9.8cmを測り、風化が顕著である。

以上、F区の出土遺物を概観した。F区の遺物は若干古いものの混入もあるが、おしなべて山津Ⅲ～Ⅳ期（8世紀～9世紀）のものが多く、特にⅣ期（8世紀末～9世紀）のもの多かったのが特徴的である。比較的稀少な遺物としては小型の土馬（F-103）、風字硯（F-122）、三足付皿（F-134）、水瓶（F-151）などが出土している。

地形としてはF区は西に高く東に低く、西端ではGL-1mで地山を検出したが、東端では6mの深さまで包含層が統一していた。この東側の包含層、特にその下層（現地調査では3～4面として掘削した下部分）は有機質を含む茶褐色土層であった。

調査の結果としては、F区は東側に深くなっており、ある程度の滞水や流水があった湿地上の状態であったと想定できる。検出した遺構であるSF233（石列）やSF230（小道状遺構）などは、そういった湿地地形のものを区画したり、通行し得るために造られたものではないであろうか。

但し、他の土坑状に検出してSF～と番号を付したもの多くは人為的というよりは、自然的な凹みであった可能性が極めて高い。3面と4面として調査したものについても、結果としては下層の4面の方にも新しい様相の上器が出土しているので、その感は一層強まる。

しかしながら、現地調査当時としてはSF233（石列）やSF230（小道状遺構）など、明らかな遺構を検出しており、面的な精査・調査を行なう必要性は確かに存在したと主張し得る。また、現地で

は各遺構番号を付した地点からはある程度まとまった遺物も出土しており、遺物は細かく取り上げた。こういった調査の工程・方法も含めた個々の遺物の出土状況を報告することも無意味ではあるまい。

したがって、事実報告に関しては現場での層位や出土地点を細かく記載しており、各遺構Noは人為的な遺構と捕らえずに、同じ層・同じ地点で出土した上器つまり（包含層）として取り扱う方が良いであろう。

G区 遺構

(江川幸子)

G区の調査に際しては、これに先立つ隣接地（F区）での遺構検出レベルが地表下2m強であり、かつ交通量の多い県道に接しているため、鋼矢板で囲って調査を安全に行う必要があった。そこで、重機を利用して4ヶ所の試掘トレンチを掘り、深さ、遺構の有無を確認し、調査範囲を7×22mに絞り込み、まず3方を鋼矢板で囲んで調査の安全確保対策を行った。

次に掘削に入ったが、遺構面が深いため、家屋の基礎となっていた深さ1.1m強の土を大型重機で除去し、次いで大まかな堆積状況を知るために小型重機で長さ22mのトレンチを掘った。その結果、厚さ約15cmの黒色粘土層と地山直上面層の紫灰色砂質土から多くの遺物が出土したため、その2層については丁寧な手掘りを行い、その他の層については重機を利用して少しずつ慎重に剥ぐように掘り下げるのこととした。調査の成果は以下のとおりである。

G区の基本上層は、上から家屋の基礎土層、それ以前の住居の基礎土層、赤褐色粘質土、濁褐色粘質土、様々な小単位の堆積層、黒色粘質土、褐灰色砂質土、砂混じりの灰色粘質土、紫灰色砂質土（場所によっては砂礫層）、地山（砂礫層）となっていた。以下、層ごとに概略を記す。

図56の第①、②層にわたる家屋の基礎土層は、上層ではナイロン袋やタイル等が出土した。下層では短く切られた竹根が多く混ぜ込まれており、竹林を造成した状況が伺えた。

赤褐色粘質土（第⑦層）や濁褐色粘質土（第⑨層）からは数点の須恵器破片が出土したが、厚い層のわりには遺物の出土量が少ない層であった。

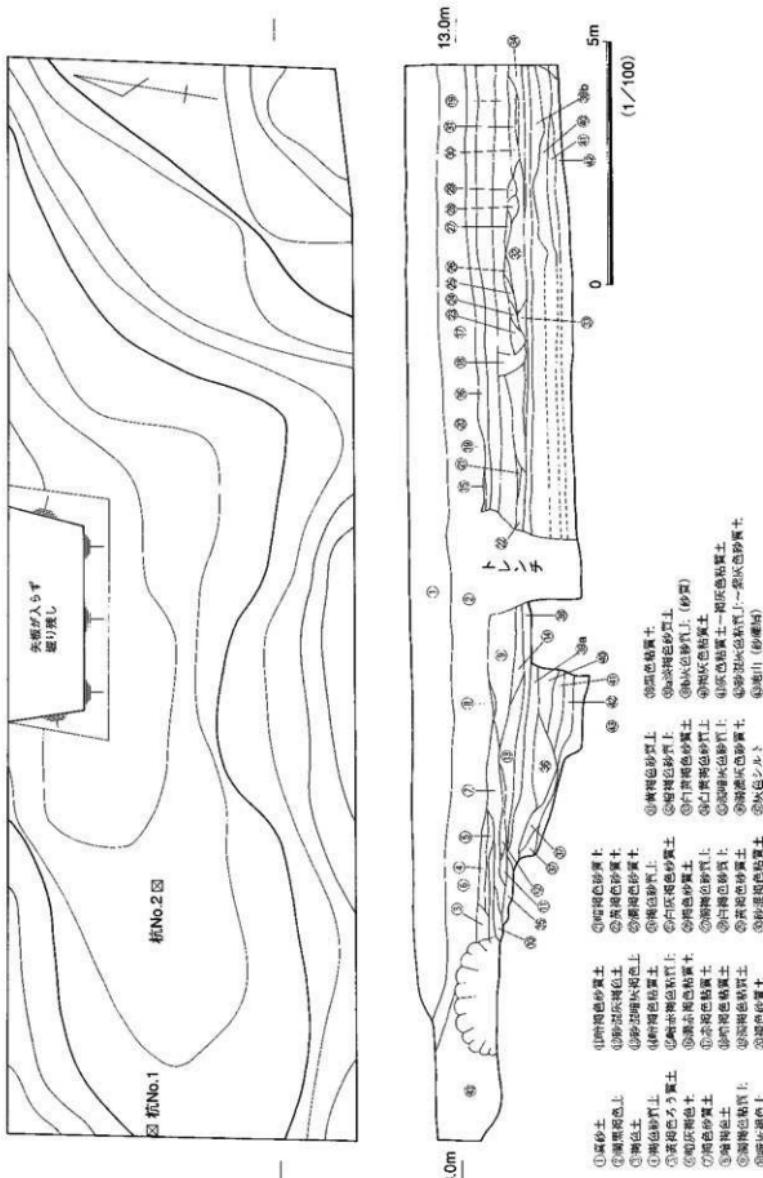
様々な小単位の堆積層（第⑧～⑩層ほか）は、地山の客土層のほかに砂質土の小単位が多く、水の流れがあったことが想定された。

黒色粘質土（第⑪層）は厚さ約15cmで、丁寧な手掘りを行ったところ、細かい須恵器の破片が大量に出土した。ここで出土した須恵器片の特徴は、小さめの破片が大半を占めていたということである。土の色、質から考えてもかつて水田として耕作されていた層と推定される。確認できた最も新しい須恵器は9世紀代のもので陶磁器片は出土しなかったが、これだけをもって年代比定の根拠とするのは危険であり、時期は不明と考えたい。

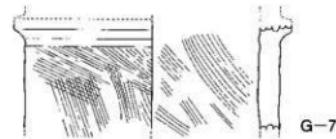
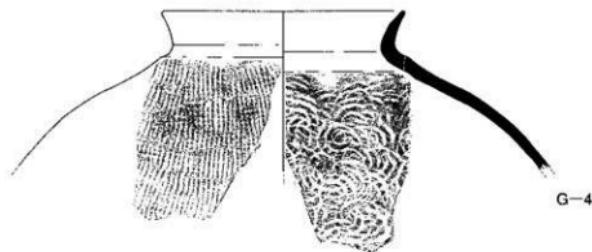
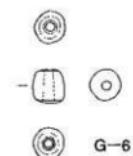
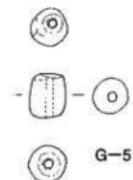
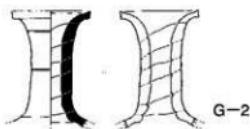
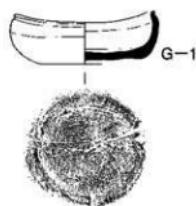
褐灰色粘質土（第⑫～⑬層）は基本的に遺物が少ない層であったが、ところどころからやや大きめの須恵器破片が出土した。

砂混じりの灰色粘質土（第⑭層）は、やや遺物量が多かったが、完形を保つものは少ないようであった。

紫灰色砂質土層（場合によっては砂礫層・第⑮層）は地山（砂礫層・第⑯層）直上の層である。

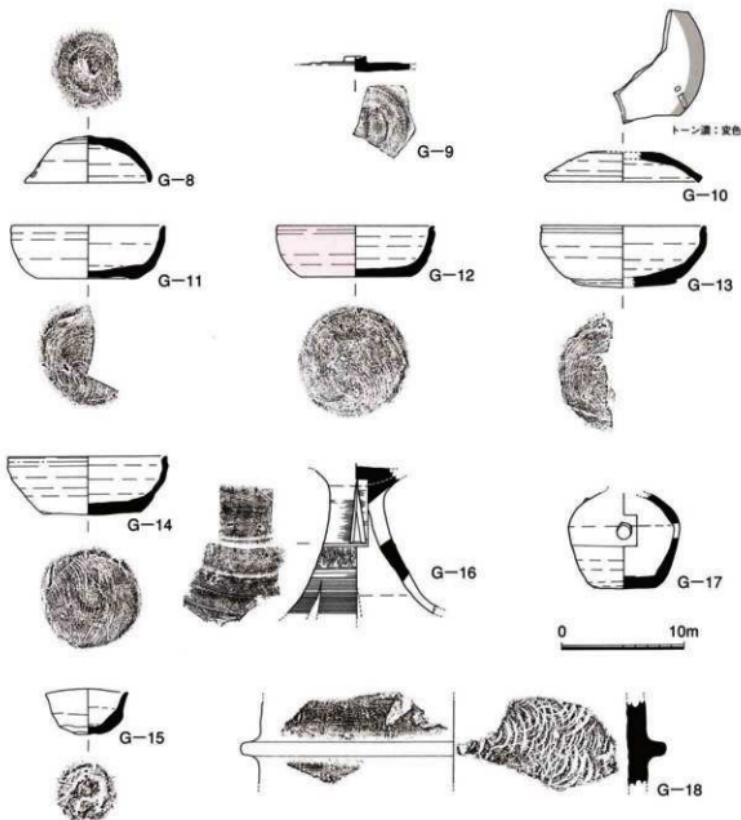


第56図 G区 調査終了後の等高線図



0 10cm

第57図 G区 黒色粘質土層出土遺物

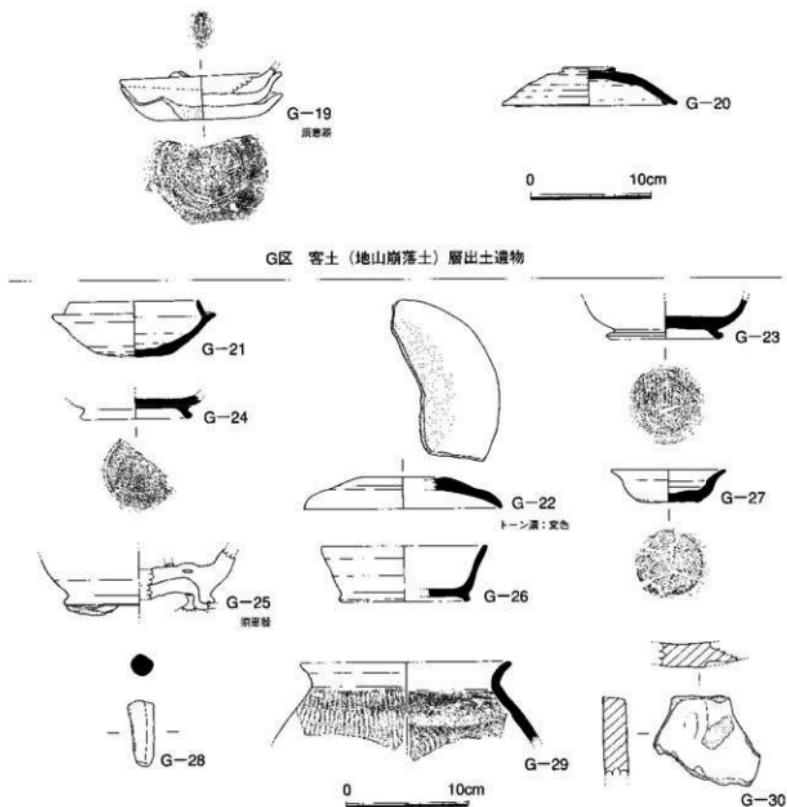


第58図 G区 淡褐色砂質土～灰色砂質土（砂）層出土遺物

完形に近い須恵器の破片が非常に多く、地山直上面及びやや浮いたレベルから多くの須恵器が出士した。中でも5体の土馬が出土したことは特筆すべきことであろう。調査区内の地山を南北方向でみると中央部が低い川底となっており、その流路は西から北東に向けて流れているようである（第60図）。

須恵器群はその流路の両地山面に貼り付くように出土し、川底の砂層からも多量の須恵器が出土した。

上記したとおり、地山面は西から北東に流れる自然流路によって北東の断面が緩やかなU字状に侵食されていた。そして、その流路内と流路两岸からおびただしい量の須恵器が出土したのである。



第59図 G区 灰色粘質土～褐色砂質土層出土遺物

それは窯の灰原とは違い、完形もしくは完形に近い須恵器が大半を占め、焼き損じ等の個体は少數であった。器種構成としては甕、壺、高坏類が目立ち、甕、蓋坏類の出土割合がやや少ないという印象を受けた。須恵質の土馬5体が出土したこと、十帥器の出土がほとんど見られなかったこともG区の人大きな特徴といえる。

須恵器の時期幅は6世紀後半から7世紀末と広かったが、大部分が7世紀末のものであり、この自然流路付近に須恵器が放置された時期は7世紀末と考えられる。

G-1~7は黒色粘質土層出土遺物である。この黒色粘質土は、土層図では第56図の第⑧層にあたる。G-1は須恵器の塊A、ほぼ完形であるが、歪みが著しい。底部の切り離しは回転糸切り。G-2は水瓶の口縁部で1~1.5cm太の粘土紐の巻上げ痕が観察できる。G-3は須恵器片で内外面をタタキ調整で製作した甕であろうか、この体部に断面カマボコ状の突帯を貼り付けているが、体部の色調が暗灰色、突帯の色調は暗緑色とかなり明確な相違を呈している。G-4は須恵器の甕C、G-5は須恵質の上錐で色調は白灰色を呈する。G-6も同上の上錐であるが、色調は黄褐色を呈しており、生焼けの須恵質か土師質か判断に苦しむところである。G-7は円筒埴輪で焼成は上師質、小片であるが、比較的しっかりした高0.8cm程度の突帯を付す、内外は斜方向のハケメを施している。

G-8~18は淡褐色砂質上~灰色砂質上(砂)層出土遺物で全て須恵器である。この層は土層図では第59図の⑩層に対応する。G-8は壺H蓋(又は壺G身)径10.4cm、器高3.8cmと小型の蓋で稜は無く、天井は切り離し→ナデ調整を施す。G-9は蓋片で残存部は僅かである、つまみ部分は、径1.9cmと極めて小さく垂直に立ち上がる輪状つまみで特徴的である。G-10は蓋片で(復)径は12.4cmを測る、かえりや垂下することない端部でつまみの形状は欠損のため不明、天井部には重ね焼き痕と思われる変色が認められる。

G-11~13は塊A、G-11は口縁部のくびれがほとんど無く、底部の切り離しは回転糸切りで周辺部の盛上り部分に工具痕と思われる条痕が見られる。G-12は風化が著しいが赤色顔料?と思われる赤色が見られる、底部切り離しは回転糸切り。また、G-11とG-13の体部には重ね焼き痕と思われる変色が認められる。G-15は小型の壺Eで口径6.6cm、器高3.8cmを測る、歪みが著しい。

G-16は加飾性の高い高壺で、脚部にカキ目、波状文、沈線を施す、透かしは二~三方の三角スカシで千鳥状に配置されていたと考えられる。G-17は体部のみの龜、肩部に被灰している。G-18は須恵質の了持壺で内外面がタタキ調整、また、1.5cmの突帯を付す。

G-19・20は客上(地山崩落上)層出土遺物で、G-19は須恵器・皿の重ね焼き資料、現行で三重の重ね焼きが認められる。G-20はかえりを有し、輪状つまみを付した壺Fの蓋である。

G-21~30は灰色粘質上~褐灰色砂質上層出土遺物でG-30(平瓦)を除いて全て須恵器である。灰色粘質土・褐灰色砂質土層は土層図では第56図の第⑪層に当たる。G-21は壺Hの身、ほぼ完形で口径10.6cm、器高4.5cmを測る、底部の回転糸切り痕が極めて良く残る。G-22は蓋、焼成はやや不良で暗灰色を呈する、天井はケズリで内面は重ね焼きと思われる円形の変色が認められる、つまみ部分は欠損しており不明。

G-23・24は壺F?の高台片で、底部の切り離し調整がG-23は静止糸切り→ナデ、G-24はケズリである。G-25は壺とその他の須恵器が溶着した資料である、二次焼成による傷みが激しく、内外に白灰を被っているので、置台として転用していると考えられる。

G-26は壺Bの小片、やや軟質で暗灰色を呈する、底部調整は回転ヘラケズリに貼り付け高台である。G-27は皿E、完形で口径9.1cm、器高2.6cmを測る、口縁端部が強く張り、内面には段が生じている、底部の切離しは回転糸切り未調整である。G-28は須恵質の土馬の脚片、やや軟質で黄褐色を

呈する。G-29は甕Cの小片、内外タタキ調整を施し、口縁内面に被灰する。

G-30は平瓦であるが、内外面には凹凸や布目はない。

G-31～172は砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土層出土遺物であるが、特にG-105～172は同層の中でも地山直上近くで取り上げられたものである。砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土層は土層図では第56図の③層に対応する。詳細は遺構の項を参照して頂きたい。

G-31～G-33は坏Hの蓋で、何れも稜は無く口径10～11cm前後の小型品、また天井の調整はナデである。

G-34～40は坏Hの身、G-39は口径12cmとやや大きいが、概ね蓋と対応した小型の須恵器であり、底部調整もG-34～36・38がヘラ切り未調整、G-40は浅い回転ヘラケズリ調整である（G-37・39は被灰で不明）。G-36は外面全面に白灰を被って歪むが、重ね焼きの結果、重みで変形したものと思われる、これに限らず、G-37・38・39は底部外面に被灰する、これに対し、G-40は逆方向の受部内面に被灰している、また、G-34は底部にヘラ記号を施す。

G-41・42は坏GでG-41は約60%残、（復）径9.8cmでかえりのある宝珠つまみ、外面に少し灰を被っている。G-42も同じく約60%残、（復）口径10cmで、底部調整は切離し後のナデ調整。

G-43～47は坏Fの蓋、全てかえりを有し、輪状つまみを付す、G-43は内面、G-44はつまみ内にナデによる円弧状の痕跡が残り、G-45・46の肩部には列点状の押刻（スタンプ文）が見られる、また、G-47はつまみ内に「十」字のヘラ記号を施す。

G-48～53は坏F、もしくは坏Iの身である、G-48は80%残、口径13.4cmを測り、外面に白灰を被る、底部調整は糸切り→ナデ調整、また、見込み部分にヘラ記号を施す。G-49は60%残、やや歪むが、器高1.2cmのしっかりした高台を付す、腰部分に×印のヘラ記号を施す、底部調整はヘラケズリ→ナデ。G-50は40%残、外面の回転ナデ痕が明瞭で、底部の調整は切り離し→ナデ調整。G-51は内面に重ね焼きの痕跡が明瞭に残り、口縁端部は擬口縁状に平坦になっている。G-52は80%残、底部の調整はナデで、径3.4cmと小さい円弧状の重ね焼き痕と、ヘラ記号が残る。G-53は70%残、低い皿状の体部に崩曲する口縁部、高台は1.3cmと高く、また、内面に重ね焼き痕と思われる径10.4cm大の円状の変色が見られる。

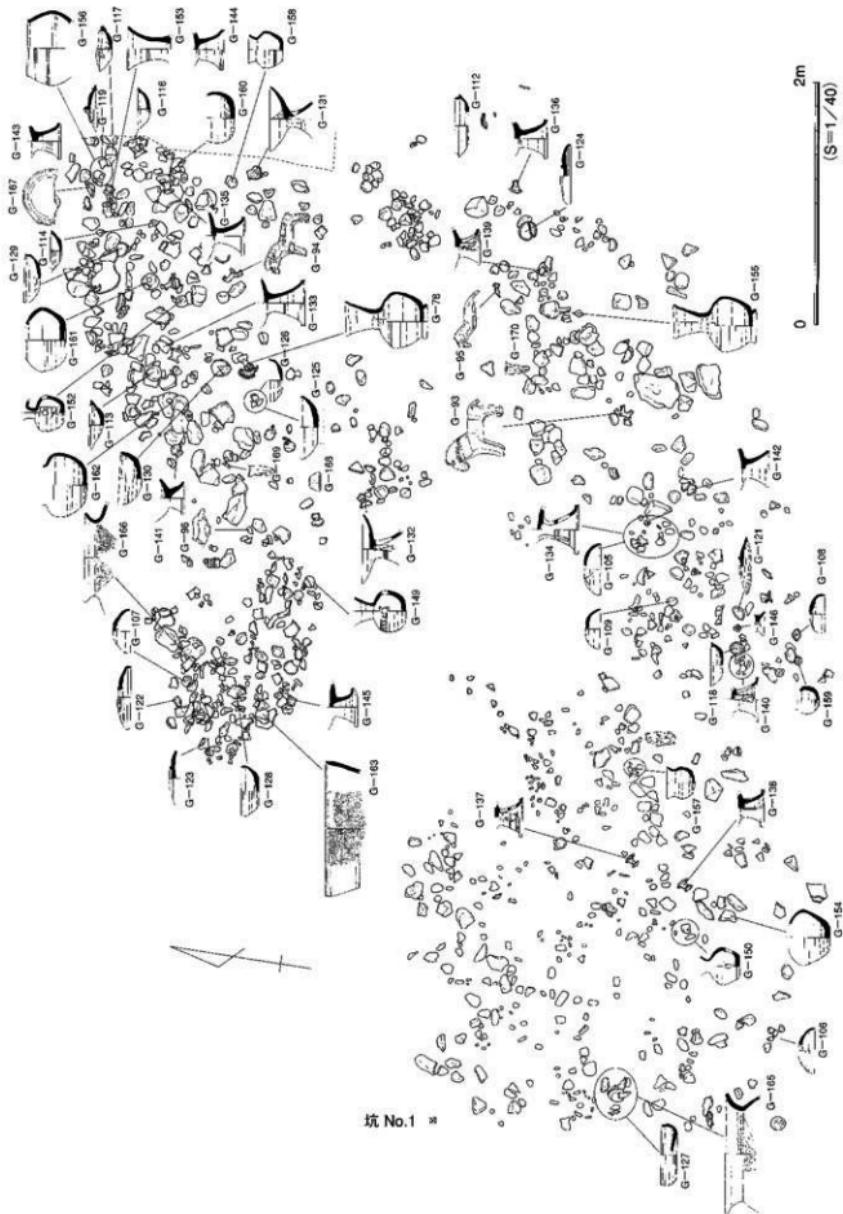
G-54は須恵器の溶着資料で、輪状つまみの蓋と、高台片とが二個体溶着する。

G-55～62は塊である。ミニチュア状の小型（径6.8cm）のG-61から（（復）径12.1cm）のG-58まで出土している、G-58はくびれ部分が大井特有にくびれるが、体部に七条の円線状の凹みを施している、底部調整はG-55・57～59が回転糸切り、G-56が静止糸切り、G-60がケズリである。G-63～71は高坏、もしくは脚部である。

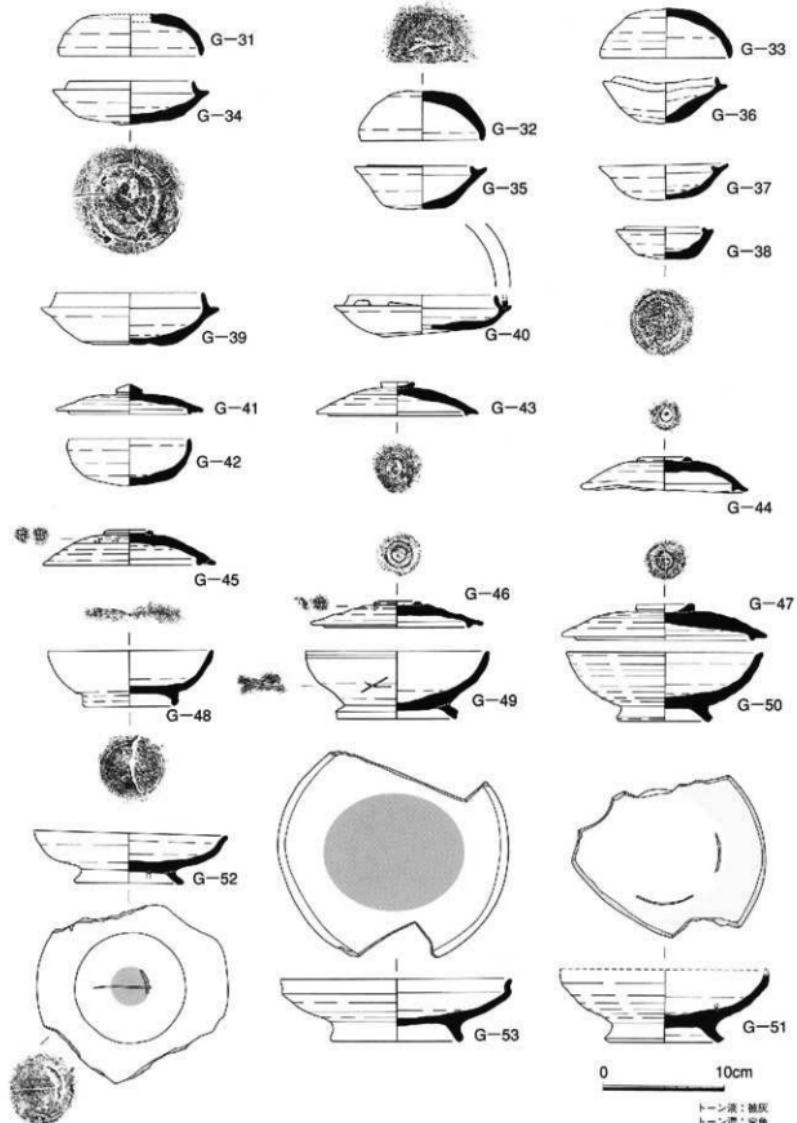
G-63は小型の脚で脚付塊、又は小型の高坏だと考えられる。G-64は70%残の高坏Bで脚部には二段二方向からの切込みを施す、脚内面にはシボリ日と思われる痕跡が同われ、皿状の浅い坏部がつく、坏内面と外間に若干の灰を被る。G-65は70%残であるが、脚端部を欠損する、G-64と同じく皿状の浅い坏部で、坏内面を中心して被灰している。G-66は坏部と脚の一部、脚の径が大きく、坏部の口縁は浅く広がる。G-67・69は脚部のみ、G-67は二段二方向の切込みを施す、脚外間に被灰す



第60図 G区 砂混灰色粘質土～紫灰色粘質土（断面図②層）遺物出土状況①

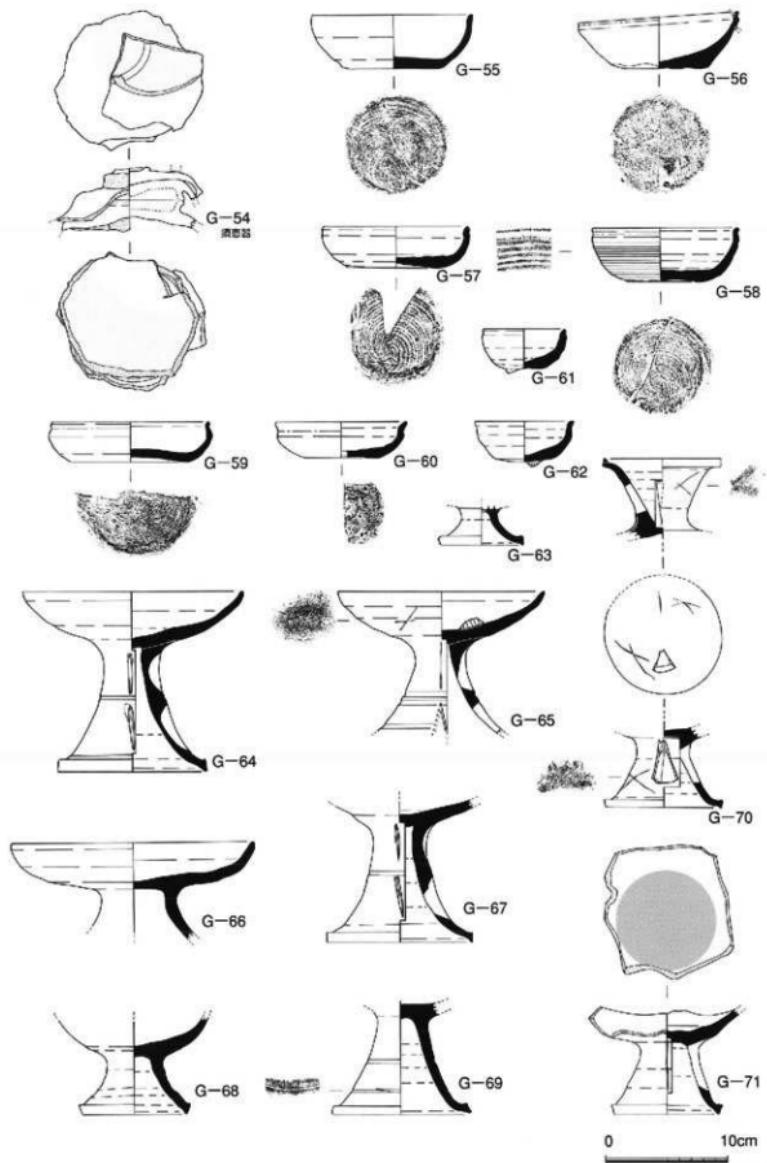


第61図 G区 砂混灰色粘質土～紫灰色粘質土(断面図②層) 遺物出土状況②



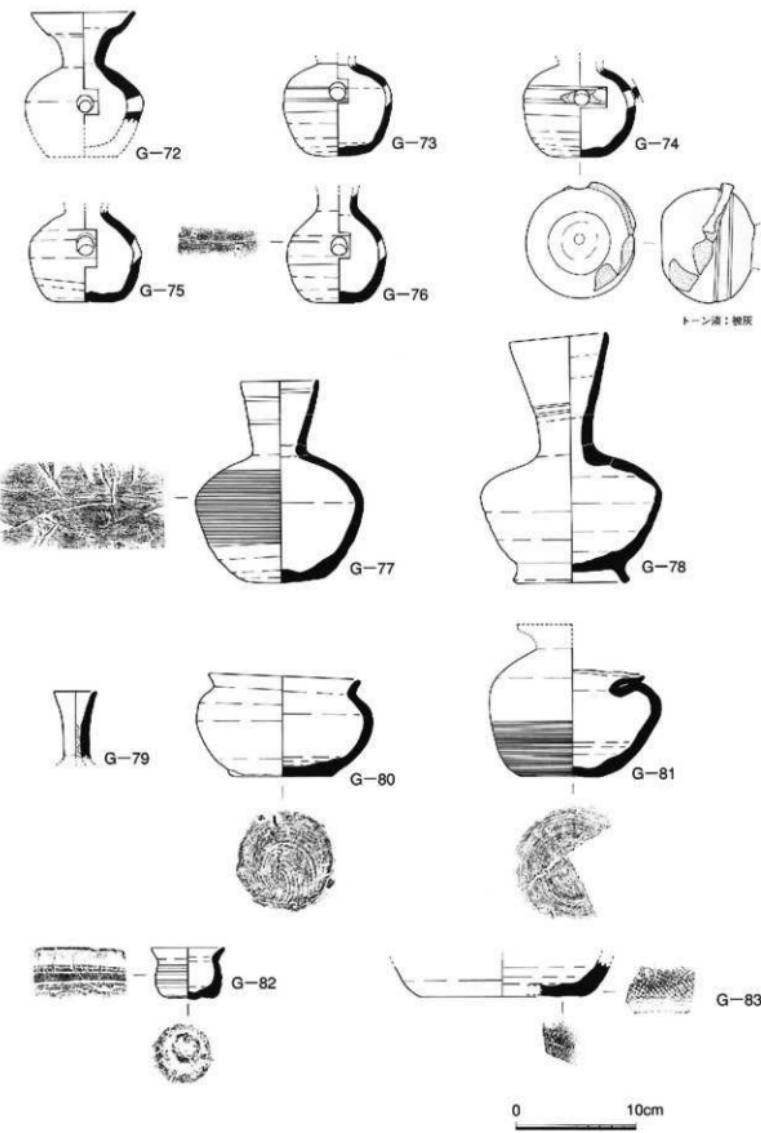
第62図 G区 砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土出土遺物①

トーン底：緑灰
トーン面：朱色

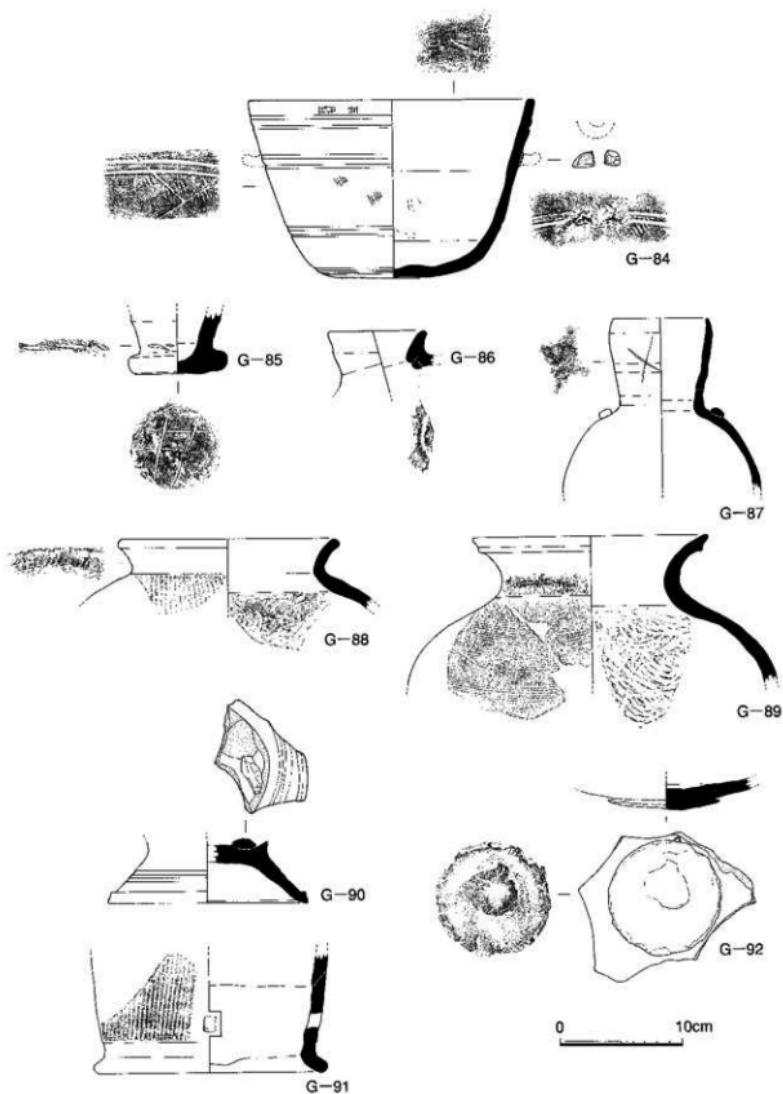


第63図 G区 砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土出土遺物②

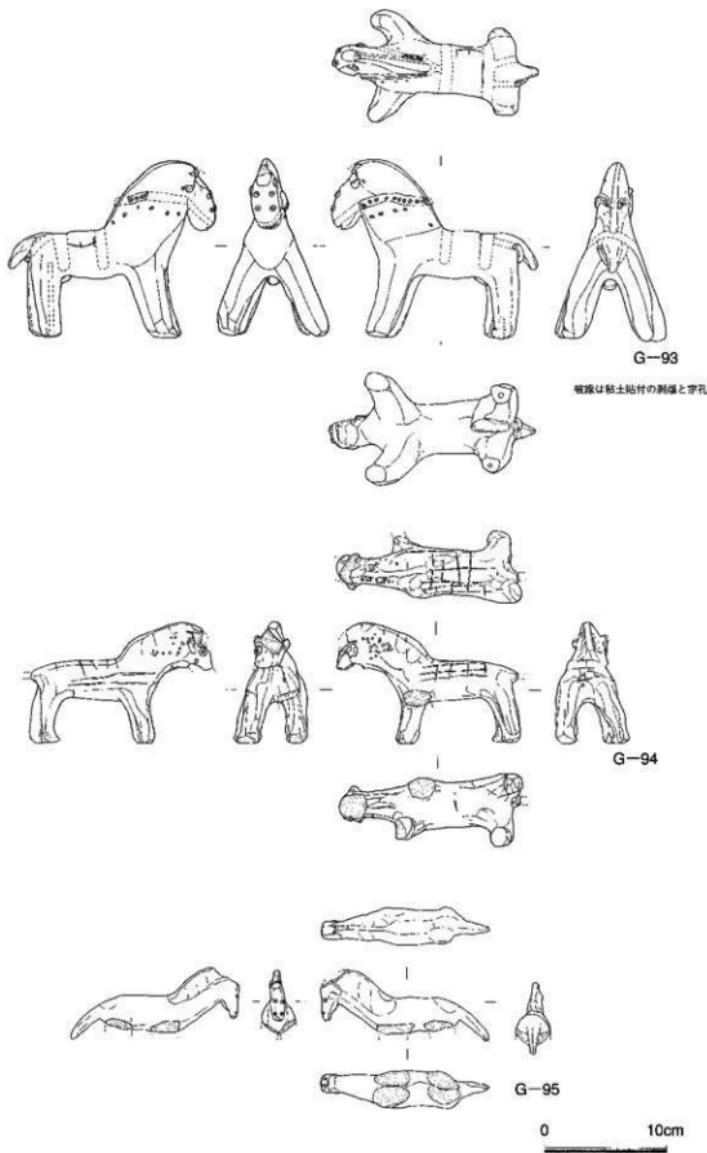
トーン色：史色
トーン線：板塗



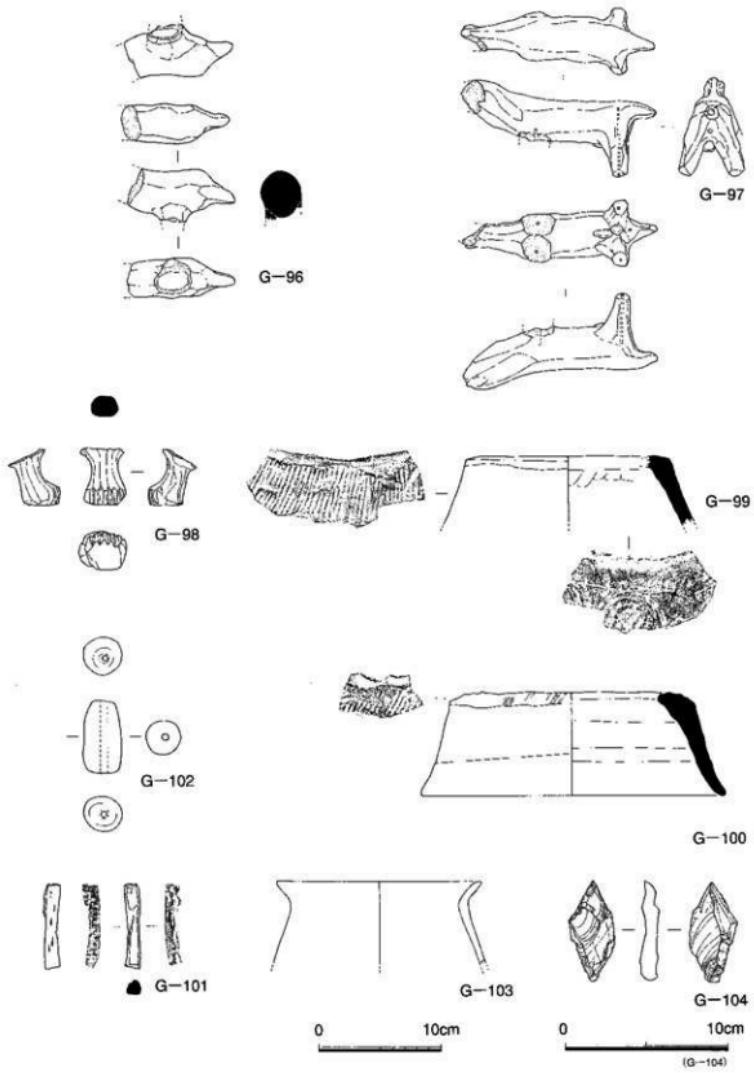
第64図 G区 砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土出土遺物③



第65図 G区 砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土出土遺物④



第66図 G区 砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土出土遺物⑤



第67図 G区 砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土出土遺物⑥

る、G-69は脚部のみほぼ丸形であるが、透かしや切込みはない。G-70は脚部が一段二方向透かしで、一方は二角透かし、対面は切込みである、また、それぞれ透かしの左側にX印のヘラ記号が計二つ施されている。G-71は环～脚部にかけて約60%残、重みがあり、一段二方向の切込みを施す、环部内面には重ね焼き痕と思われる径8cm大の円形の変色が見られる。

G-72～76は甌、G-72が口縁～肩にかけて、他は体部のみである。G-72は頸部内と体部に灰を被り、G-73は頸部の割れが瓶口縁状に平坦になる。G-74は肩～腹部にかけて別の須恵器片が溶着しており、肩部には白灰を被る、これは、壺か何かの上に重ね焼きした結果と考えられる。G-76は肩に沈線を施すが全周せずに途中で途切れる。

G-77・78は長颈甌（壺K）である、G-77は無高台、80%残で口径6.3cm、器高16.4cmを施す、また、体部にカキ目を施す。G-78は高台付きで、70%残でやや重む、口径8.2cm、器高20.4cmを測り、色調は灰色を呈する、肩部と頸部との粘土組の接合が極めて明瞭である。G-79は壺の頸部と思われるが口縁3.5cm、頸長5.6cmと極めて小さくミニチュアの壺と考えられる。

G-80～83は壺である、G-80は70%残の壺Bでやや歪んでいる、底部の切離しは回転糸切り。G-81は重みが著しいため、口縁の詳細は不明であるが、短く立ち上がっていたと考えられる、体部下半にはカキ目を施す。G-82は壺E、70%残で口径6.0cm、器高4.2cmを測る、底部は切離し→ナデで、体部に四条の沈線を施している。G-83は壺の底部片か、外面はタタキで（図では）底部にヘラ記号？を施す。

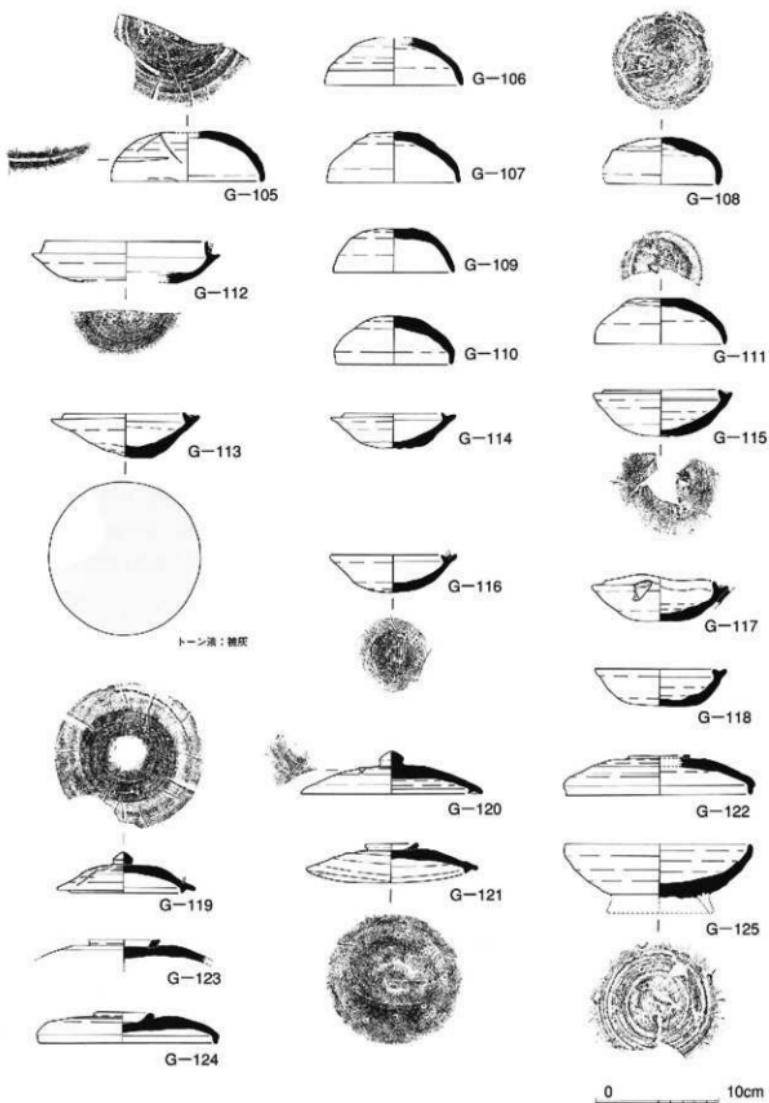
G-84は大型の深い鉢（鉢D）で約80%残、口径23.6cm、器高14.7cmを測り、底部の調整はナデ、体部はタタキ→ナデで丁寧にナデているため、ほんの僅かにタタキ痕が残るのみである、把手は欠損しているが、割れ面を見ると水平な環状の把手が付いていたと考えられる、また、把手痕のちょうど対面が欠損しているため把手の数は不明であるが、図上では二方向に把手が付くように復元した。G-85は捏鉢（鉢F）の底部片、厚手で体部と底部との境に工具が当たったような痕跡が残る、また、底部には#印のヘラ記号が、太い沈線で力強く記されている。

G-86は平瓶の口縁片、開窓痕が僅かに残る。G-87は提瓶の小片で、頸部にX印のヘラ記号を施し、ボタン状の小さな把手を付す、また、体部に被灰している。

G-88は甌C、体部の内外面はタタキ調整で、頸部外面にもタタキ痕が残る。G-89は甌B、体部の内外面はタタキ調整で頸部に列点文、カキ目を施す、外面と頸部内面に緑色の釉を被る。

G-90～92は器種不明の須恵器で、G-90は脚か（もしくは窓道具か）内外面に白灰を被り、図での上面に別の須恵器の破片が溶着している。G-91は当初、甌と考えたが方形？の穿孔痕が極めて僅かに見られたので脚として図化したものである、外面はタタキ痕が残るが内面は全面にナデている。G-92は底部？と思われる部位に径9.5cm大の円形粘土上が張り付いているものである、これは溶着したものではなく、元来の一體物であったようであろうが、詳細は不明である。

G-93～97は須恵質の土馬である。G-93はほぼ丸形の飾り馬（馬具の欠あり）、焼成はやや甘く淡白色を呈する、頭部には浮文状の貼付けが四つあるが、目と鼻、もしくは目と辻金具を表現したもののか、口はヘラ状工具で刻線しており、男性器は貼り付けと竹管文を施している、馬具は粘土貼り付



第68図 G区 砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土出土遺物⑦（地山直上①）

けで表現されており、剥離部分には変色が認められる（図では波線で表現している）、このうち、手綱は貼り付け部分に竹管文を施し、前輪、後輪、尻繩は貼り付けと思われる変色が見られる、また、手綱の下に荒い列点文、前輪と後輪との間に細い刻線状の痕跡があり、胸繩や鞍橋を表現したものであろうか、その他に特筆すべきこととしては、後二脚に0.2cm人の穿孔があり（前二脚は穿孔無し）、確認できた範囲では右後ろ足は6cmの深さ、左後ろ足は1.7cmの深さであった。G-94も飾り馬であるが、馬具の表現は貼り付けではなく、刻線である、また、男性器の表現はないが、肛門と思われる刺突痕がある、首の部分にはランダムな列点文を施し、鞍部は沈線によって鞍の表現をする、目と耳は貼り付けでタテガミ部分はオサエ。G-95は四脚と頭部の一部を欠損した裸馬で焼成は甘く白灰色を呈している、棒状の体部に四脚とタテガミを貼り付けて製作したと考えられ、目・鼻は刺突（竹管）によって表現する。G-96は下肢の破片、脚と体部との接合が良く分かり、丸い体部に脚を貼り付け、周囲をオサエていた状況が伺われる。G-97は前二脚と頭部を欠損した裸馬で、オス（男性器の表現あり）、残存する四脚部分に全て穿孔が認められ、後脚では4～5.5cmまでは深さを確認できた。また、前脚部分の穿孔は体部に食い込んで1cm前後の深さを測り、これらの穿孔は極めて深い部分まで入っていることが分かる。

G-98は須恵質の獸脚、剥離痕が残り、全体の器形は不明である。

G-99～101は窯道具関連の遺物、G-99は焼台か、極めて小片で詳細は不明、内外タタキにより成形されている。G-100は焼台、タタキとオサエにより荒く成形されている。G-101は壺の切り屑板用の窯道具、残存長6.9cm、幅1cmで、ヘラ状工具で切ったと思われる平坦で砂粒の移動が認められる。

G-102は土師質の土鉢で完形、明褐色で多孔質である。G-103は土師質の甕で小片、屈曲が強く口縁が強く外反する、風化が著しく調整は全く不明。

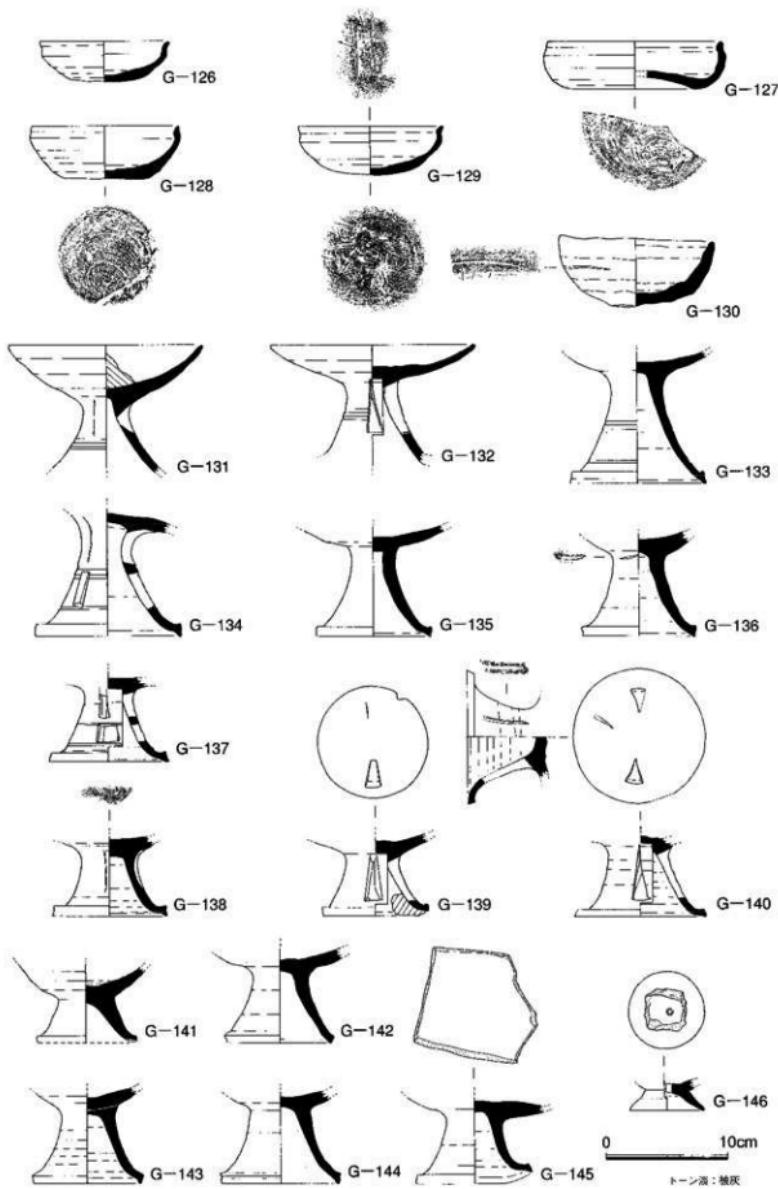
G-104は黒曜石の剥片で長6.1cm、幅2.8cmを測る。

G-105～172はG-31～104と同じく砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土層出土遺物であるが、特に同層の中でも地山直上近くで取り上げられたものである。

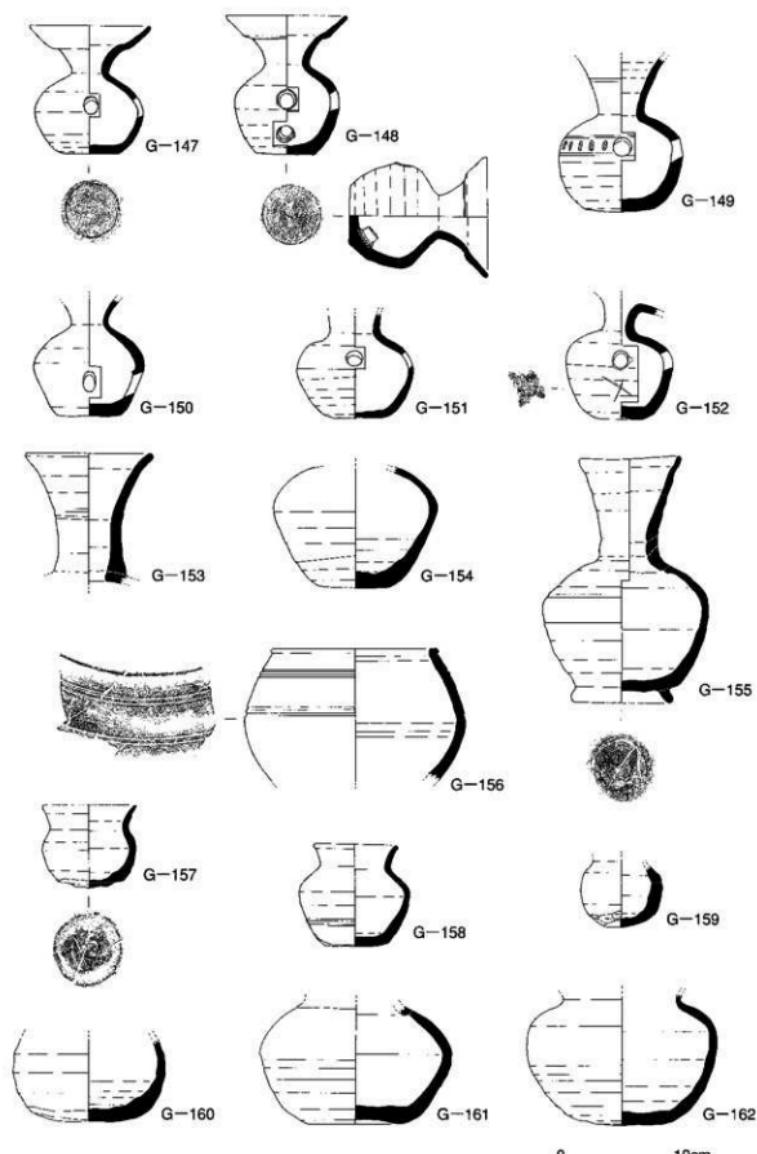
G-105～111は壺Hの蓋、G-105・106は口径11.4～12.3cmとやや大きく稜の部分が存在するが、G-107～111は概ね10cm内外の小判品、ただし、天井部は全て切離し後が未調整かナデである、また、G-105は天井部にX印のヘラ記号を施している。

G-112～118は壺H身でこれも、概ね蓋と対応して口径8～9cm前後の小型で占められている。このうち、G-113は外面に白灰が被り、一部に半円状の変色が見られ、かつ、重みでと思われる歪みが生じている、これらは重ね焼きの痕跡であろう、このG-113以外にもG-117・118も外面に同じく被灰しているが、G-116には受部の部分に灰が被っている、その他、G-112にはヘラ記号が見られ、G-116には底部に切離し後の工具による条痕が観察できる。

G-119は壺Gの蓋で90%残、天井は回転ヘラケズリで宝珠形のつまみを付す、体部外面にX印のヘラ記号が施され、また、重ね焼きの痕跡と思われる痕跡として、端部外面の変色と別の須恵器片が円形に残る。



第69図 G区 砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土出土遺物⑥（地山直上②）



第70図 G区 砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土出土遺物⑨ (地山直上③)

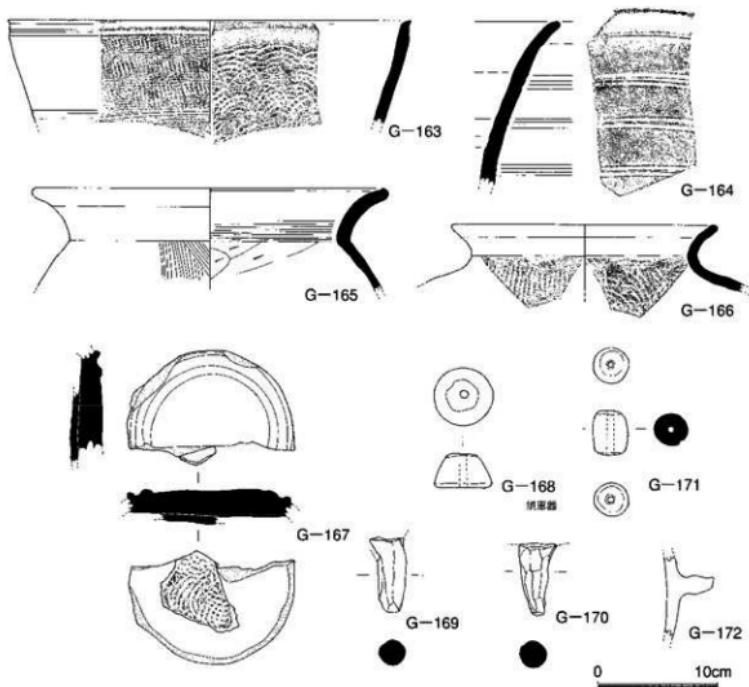
G-120～124は壺Fの蓋でG-120は焼成が甘く灰黄色でヘラ記号を施す、かえりがあり、つまみは宝珠形である。G-121はかえりを有し、輪状つまみを付すもので完形であるが、歪みが苦しい、内面に不定方向のナデの痕跡が明瞭に残る、G-122・124は輪状つまみに口縁端部が下方に折れ曲がる形態で、G-123は輪状つまみの小片である。

G-125は壺Fの身であるが高台部分を欠損する、この高台部分の剥離痕には接合沈線と思われる二条の沈線が巡らされており、体部と貼り付け高台との接合に関する好資料である。

G-126～130は須恵器の壺、G-126は（復）口径10.6cmと小型であるが、大井特有の口縁部をくびれさせた形態である、G-127は30%残、底部が歪みによるものか凹む、底部の切離しは回転糸切り、G-128は70%残の壺A、重ね焼きと思われる変色があり、体部の上位は黄茶色、下位は暗灰色を呈している、底部の切離しは回転糸切りである。G-129は60%残の壺Aで、内面（見込み部分）に二条の鋭いヘラ記号を施す、底部の調整は切離し→ナデで、工具痕と思われる条痕が残っている。G-130は90%残であるが、極めて厚手で粗雑な作りの感じを受ける、底部はヘラ切り→ナデで凹印が激しい。

G-131～145は高壺である、G-131は外面と壺内面に縁軸を被る、また、壺内に窓壁片が付着している。G-132は30%残の小片、残存部分では一段二方向三角透かしで、壺部はほとんど直といつていいほど大きく浅く広がる。G-133・135・136・142～145は脚部の残りが良いが、透かしはなし。G-134は歪み有り、三方向二段透かしで上段は切込み、下段は方形透かしである。G-136は壺部と脚部との境に横に引いた沈線（ヘラ記号？）が見られる。G-137は二方向二段の方形透かしで外面に縁灰を被っている、G-138は一段二方向の切込みで壺内面（見込み部分）にヘラ記号を施す。G-139は一段二方向透かしであるが、一方が方形透かしで対面の透かしは切込み。G-140は一段二方向二角透かしであるが、脚部に上下方向の沈線が確認できる、ヘラ記号か、もしくは割り付の痕跡かの何れかと思われる。G-141は短い脚に、壺部は丸みを帯びており、高壺というよりは脚付壺とした方が良いかもしない。G-142は焼成がやや軟質で茶灰色を呈する。G-143は脚部と壺部との粘土の相違のためか、焼成具合での色調が全く異なり、壺部は黒褐色、脚部は灰色を呈している。G-144は焼成が悪く砂地が日立つ。G-145は壺内面（見込み部分）に重ね焼きと思われる円形の変色があり、その周囲には灰が被っている。G-146は底径6.2cmと小型の脚片、壺部分の底面に小さな焼成前の穿孔が見られる。

G-147～152は罐である。G-147・148は90%残で全形が同われる資料である、G-147は（復）口径10.0cm、器高10.5cm、胴部最大径9.0cmを、G-148は（復）口径10.0cm、器高11.4cm、胴部最大径8.6cmを測る、また、G-147・148の何れも底部調整には回転ヘラケズリを施し、底部には井印のヘラ記号を記す、頸部内面肩部に被灰しているのも同様である、その他、特筆すべきこととしてはG-148には体部内に小さな粘土塊が残っている、位置的関係や規模からいって体部の穿孔時のものが残存（かつ、そのまま焼成）したものと考えられる。G-149～152は頸部を欠損している、G-149は胴部に列点文を施し、G-150は胴部の穿孔部がかなり下付きに穿かれている。G-152はやや歪みがあるが、体部下位にX印のヘラ記号が見える。

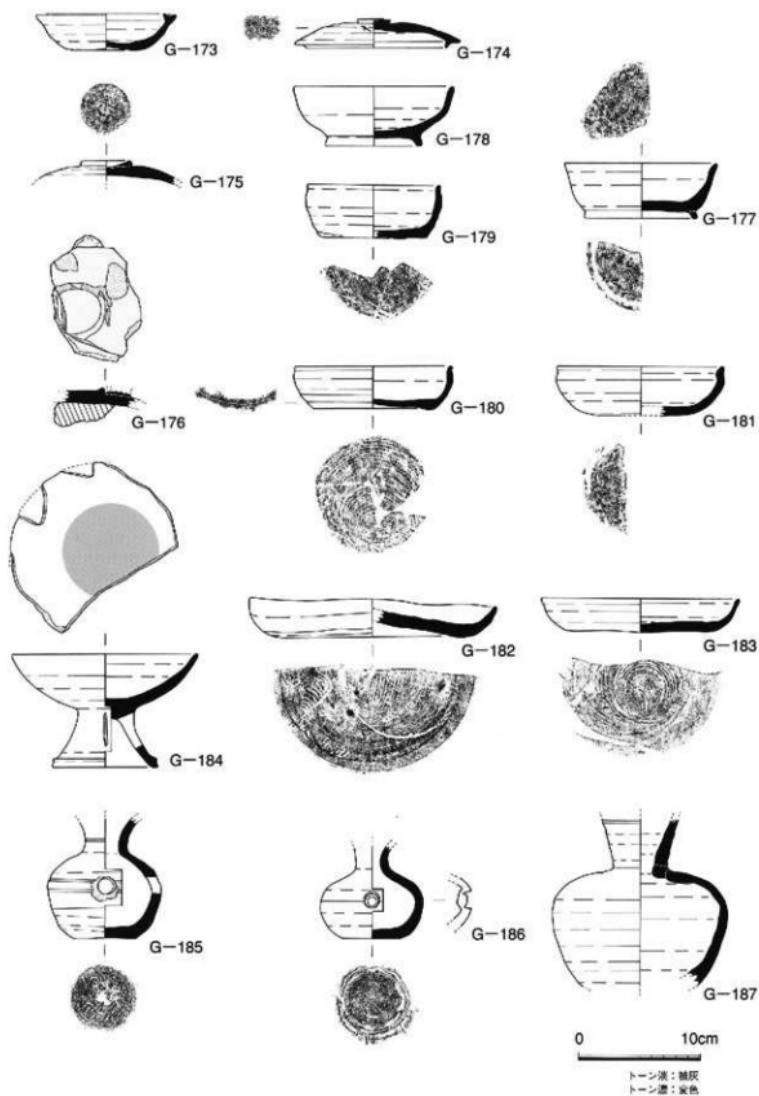


第71図 G区 砂混灰色粘質土～紫灰色砂質土出土遺物⑩（地山直上④）

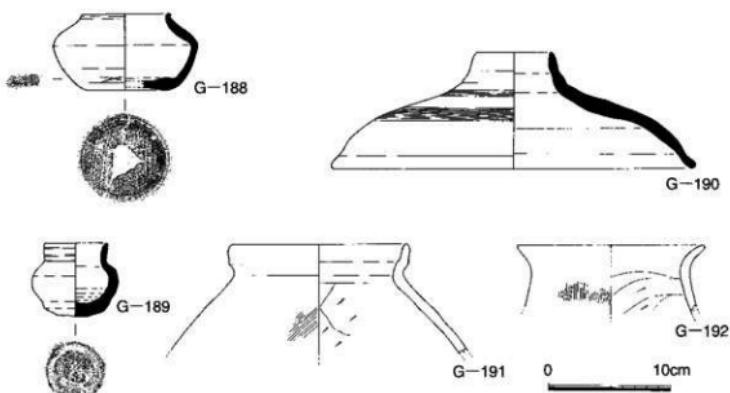
G-153～155は長頸壺（壺K）、G-153は残高10.7cmの頸部でやや厚手、二条の沈線を施す。G-154は体部片で内外面に被灰している、底部調整はヘラケズリである。G-155はほぼ完形の優品で僅かに歪みが認められる、口径8.5cm、器高20.2cm、頸径4.6cm、高台径8.4cmを測り、肩部は基本的に丸いがやや張った感じである、底部調整は回転ヘラケズリで高台は貼り付け、頸部と体部との接合は非風船技法で粘土紐の積み上げの状況が観察できる、また、底部にヘラ記号が見え、頸部内面と肩部とに灰を被っている。

G-156は小片で類例が乏しいが壺Dとしたもの、頸部がほとんどない無頸の壺で肩一胴にかけて沈線が施されている。

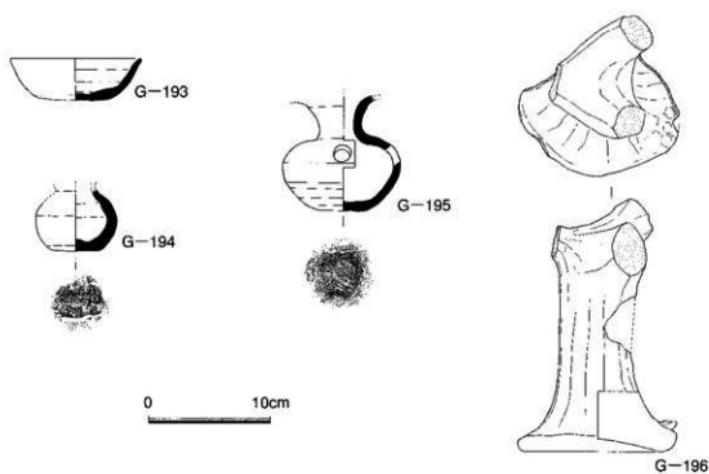
G-157～159は小型の壺（壺E）である、G-157は80%残、口径7.8cm、器高6.6cmを測り、焼成と成形（回転ナデ）が比較的良好であるが、底部はヘラ切り→ナデで工具による条痕が残る。G-158は完形、口径7.0cm、器高8.2cmを測り、焼成も良好で灰色を呈する優品であるが、底部はヘラ切り→ナデで凹凸が激しい、内外面の一部に緑色の釉を被っている。G-159は口縁部を欠損した体部のみで、



第72図 G区 トレンチ出土遺物①



G区 トレンチ出土遺物②



第73図 G区 その他出土遺物

底部調整はナデで、その周囲には静止によるヘラケズリが施されている。

G-160~162は壺、全形を伺うものはないが、G-160は丸い体部の底部片で底部はヘラ切り（→ナデ？）で体部調整は回転ナデ。G-161・162はやや胴の張った器形で短頸壺（壺B）であろう。

G-163は鉢、もしくは脚であろうが、傾きの内傾が強いので鉢として圓化した、内外面はタタキ調整で（復）口径は33.4cmを測る、残存部では二条の沈線が確認できる。

G-164~166は須恵器の壺である。G-164は壺Aの、G-166は壺Cの小片である。G-165は短い口を付す壺であるが、焼成が悪く白灰色を呈している、須恵質の壺としては珍しく外面をハケメ、内面をケズリで調整しており、上師器の成形方法で作成した壺を須恵器窯で焼成したものと考えられる。

G-167は円面鏡、G-168は紡錘車、G-169・170は土馬の脚片、G-171は十鍊である。G-167の円面鏡は陸部と海部の平面のみが残り脚部は欠損している、残存長は13.6cm、残存幅は9.3cmで、陸部は概ね平坦、内堤が2mmほど盛り上がり、海部の深さは5mmを測る、また、裏面には別の須恵器片（壺か）が溶着しており、内外面に灰を被る、二次焼成を受けているものと思われる。G-168は須恵質で紡錘車の完形、最大径4.8cm、高さ2.8cm、孔径0.7cmを測る、焼成はやや甘く灰白色を呈している。G-169・170は土馬の脚と思われる須恵質の破片でG-171は須恵質の十鍊である、完形で長さ4.1cm、径2.8cm、孔径0.6cmを測る。

G-172は上師質の壺片で把手部分の小片、風化が著しく調整は不明瞭である。

G-173~192はG区のトレンチ出土遺物である。このトレンチは遺構の項目で記してある通り、調査開始直後に土層堆積確認のために掘削したトレンチから出土したもので、出土層位は地山直上の第56図の第⑤層に対応する砂混灰色粘質上～紫灰色砂質土層である。

G-173は須恵器の壺H身、約40%残で底部はヘラ切り→ナデ調整である、外面全体に白灰を被る。G-174は壺Fの蓋である、やや扁平なつまみに、端部はかえりを有している、また、X印のヘラ記号を記している。G-175は輪状つまみの小片、つまみ内にヘラ記号が見える。G-176も輪状つまみの小片であるが、灰・釉を厚く被り、二次焼成と傷みが著しい、また別の須恵器片や窓体片と溶着している。G-177は壺Bの小片である、底部の切り離しは回転糸切りである。G-178は壺Fである、60%残であるが、釉が付着しており底部の調整は不明。

G-179~181は壺Aである、G-179は底部切り離しが回転糸切り、ただし、風化を認める。G-180は口縁端部の屈曲が強い、底部の切り離しは回転糸切りで、周辺の盛り上がりには条痕が残る。G-181はL縁端部を強くナデた壺でやや焼成が甘く淡灰色を呈している、底部の切り離しは回転糸切りである。

G-182・183は壺A、または壺Cである、G-182は50%残、歪みが大きく底部にはキズ？や置台転用痕？と思われる箇所がある。G-183は50%残、（復）径は16.2cm、器高2.7cmを測り、やや軟質で焼成が甘い、底部の切り離しは回転糸切りである、また変色が認められる、火だすきか。

G-184は高壺、G-185・186は壺である。G-184は70%残の高壺で口径15.2cm、器高9.25cmを測る、脚部は一段一方向の透かしで壺内面（見込み部分）は重ね焼き痕と思われる円形の変色部分が認

められる。G-185は口縁部の一部を欠損した趣で底部切離しは静止糸切りか、同じく底部にはヘラ記号が施されている。

G-186は残高が7.6cmでやや低く、腹部が強く張り出している、回転ヘラケズリは体部の半ばまで及んでおり、底部には井印のヘラ記号を記す、また、穿孔部分の孔は貫通しておらず、竹管状工具で穿孔途中のまま焼成している。

G-187～189は壺で、特にG-187は頸部と体部との接合状況が分かる好資料である。G-188は短頸壺（壺B）、90%残で口径7.3cm、器高6.3cmを測る、底部の切り離しは静止糸切りで、肩部に灰が被るが、肩と口縁との間の変色は極めて明確で、蓋を伏せて焼成したものと思われる、X印のヘラ記号を記す。G-189は壺Eである、80%残で口径5.2cm、器高6.0cmを測る、頸部に三条の浅い沈線を施し、底部はヘラ切り→ナデで凹凸が激しい、また底部にヘラ記号を施している。

G-190は壺の蓋で（復）径30.0cm、器高9.5cmを測る、全体の約4分の1の残である、全体に回転ナデで調整されており、一部にカキ目を施す。

G-191・192は土師器の甕である。G-191の口縁は僅かに複合口縁状に作り出しておらず、体部の傾きは非常に緩やかである、風化が著しいが内面調整にケズリ、外面調整にハケメが観察できる。G-192は単純口縁の甕で外面ハケメ、内面ケズリを施す細片である。

G-193～196がG区のその他出土遺物である。G-193は壺Gの身、80%残で口径10.7cm、器高3.4cmを測る、底部はヘラ切り→ナデで、色調は赤褐色を呈している。G-194は壺Eか、回転ナデを施していると思われるが、風化が著しく手づくね風で凹凸が顕著、また、焼成はほとんど上師器といって良いほどの非還元で黄褐色を呈している、底部には井印のヘラ記号を施す。G-160はやや歪みのある趣で底部に井印のヘラ記号を施す。G-196は上師質の土製支脚である、底径13.0cm、残高20.8cmを測る。

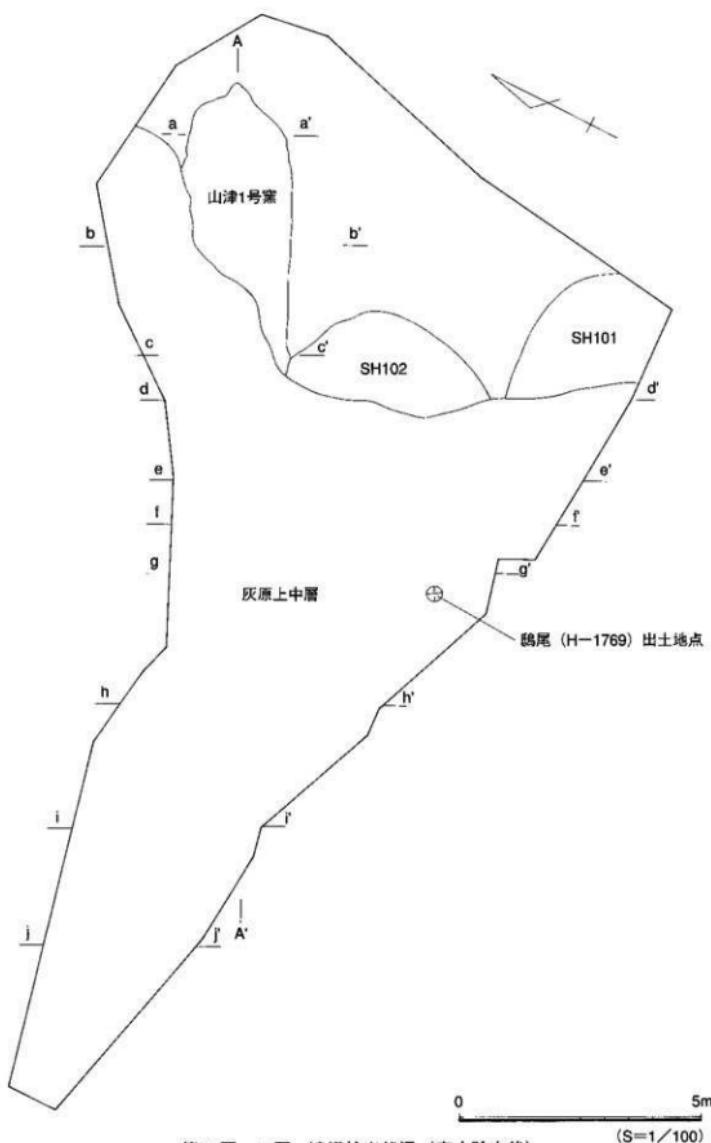
H区 遺構と遺物

(藤原 哲)

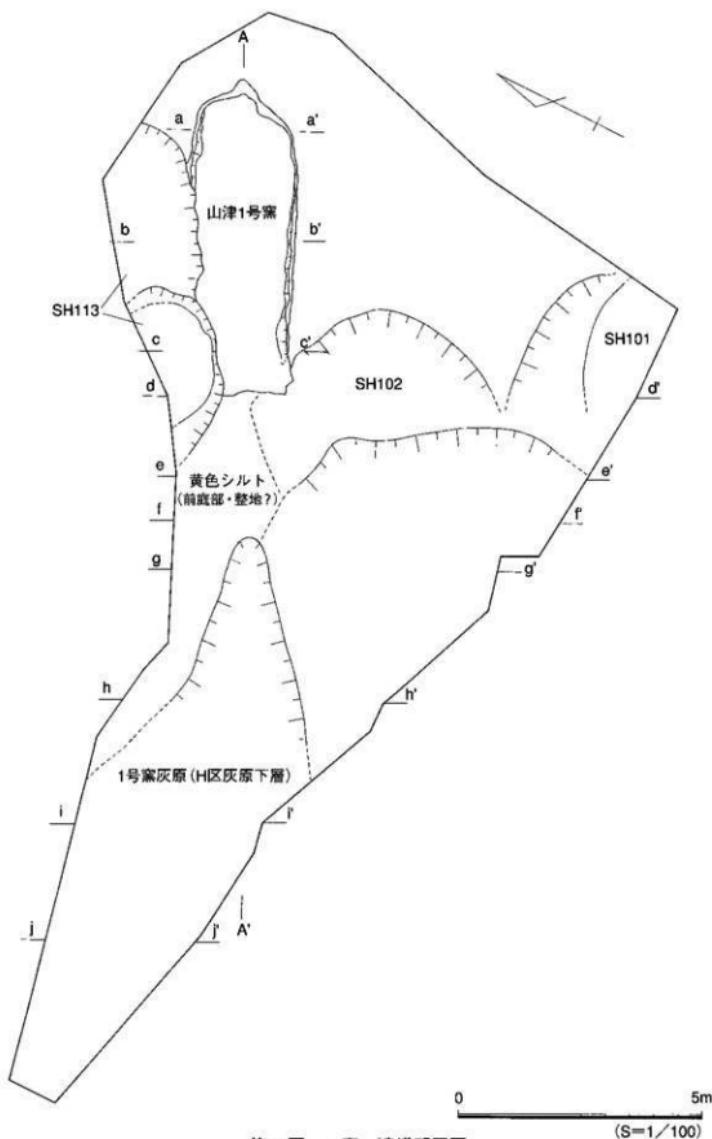
H区は中海に面する標高8～9mの緩やかな丘陵斜面に位置する。調査地は現道と水路に挟まれた長さ22.6m、幅11mの範囲で設定した。現地形の制約を受けてややいびつな三角形の調査区で、調査区内は北東に高く、南西に傾斜している。この調査区内の北東の隅は表土直下ですぐ地山を検出したが、同時にこの表土直下で須恵器窯跡（山津1号窯）を検出した。

そこで、表土除去直後に遺構検出を試みたが、精査の結果、第74図のごとく山津1号窯と、その西に黒色の灰原層が広がっている状況であった。また調査区東側の地山と灰原との境目付近では、1号窯の他にSH101やSH102のように十坑状の遺構が確認できたが、SH101・102の何れも真っ黒な灰原層と重なっているため、黒色土と黒色土との切り合い関係が生じており、遺構の全形の検出は事実上不可能であった。また1号窯の北西には、後にSH131と呼称する十坑状の遺構を検出したが、この時点では、同じように黒色と黒色の包含層の重なった堆積で明確に検出することは出来なかった。

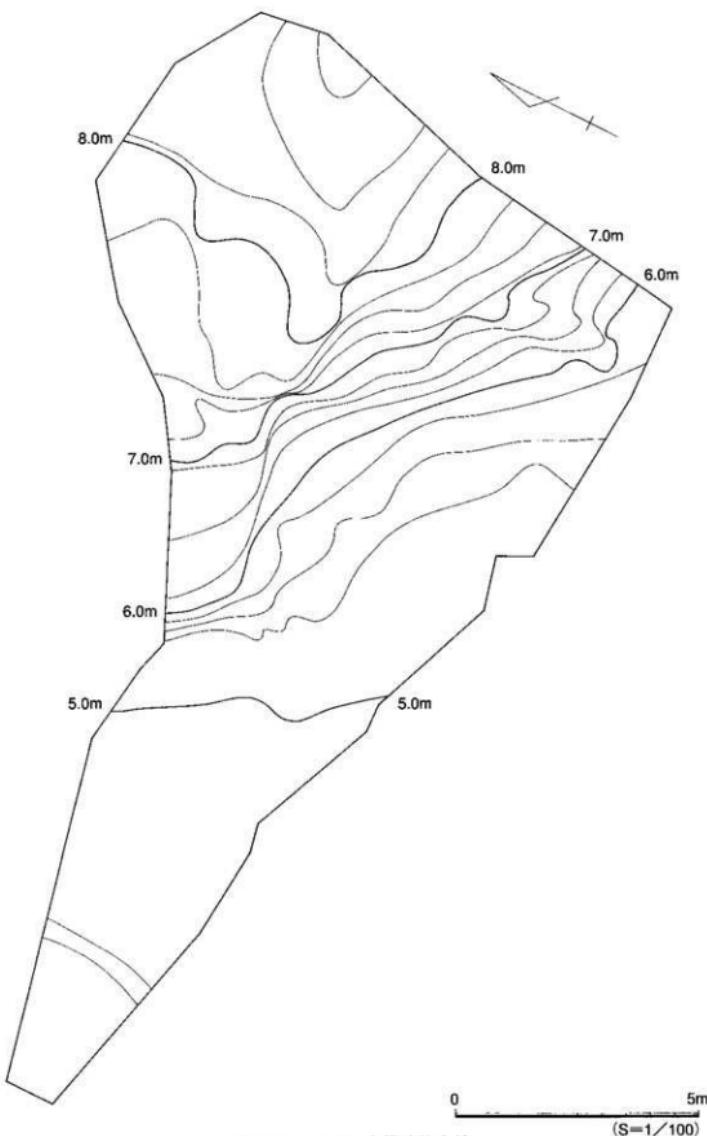
第一回目の精査後、1号窯の主軸に合わせてセクションを設定し直し、幾つかのサブレンチを掘削して上層の堆積状況を観察した。その結果、灰原層には各時期の遺物が出土しており、1号窯の埋



第74図 H区 遺構検出状況（表土除去後）



第75図 H区 遺構配置図



第76図 H区 完掘後等高線

土から頭を除かせている遺物よりも新しい時期の遺物の確認をした。しかし一方で、灰原の下層に関しては1号窯と同時期と思われる時期の遺物をまとめて確認できた。これらの上層堆積を極めて単純化すれば、先ず、6世紀末～7世紀初頭の須恵器を包含する山津1号窯と、それに伴う灰原（灰原下層）の堆積があり、1号窯と同時期か、これに少し後出する若干の土坑状の遺構がある。また、1号窯廃絶後も7～8世紀の遺物を含む灰原がその後もH区に堆積し続ける（ただし、6世紀末～7世紀初頭の遺物も多く混入する）という変遷が考えられた。

この結果を元に、調査の基本方針を次のとく定め、H区の掘削を全て人力で開始した。

1号窯より新しい時期に堆積したと思われる灰原層（灰原上・中層）を撤去する。



その後、1号窯と、これに伴うと思われる灰原（灰原下層）を検出し、同時に掘削を進める。



その他の遺構は埋上の出土遺物（時期）を確認しつつ、可能であれば切り合ひ等を明確にする。

以下では、これらの発掘調査から得られた遺構と遺物の報告を下の順に行うこととする。

- ① H区の土層堆積状況と、確定な各上層から出土した遺物
- ② 山津1号窯と、それに伴う灰原（H区灰原下層）の遺構と遺物
- ③ 山津1号窯以外の遺構と遺構出土遺物
- ④ H区灰原上・中層の出土遺物
- ⑤ H区南壁・その他からの出土遺物

① H区の土層堆積状況と、確定な各土層から出土した遺物

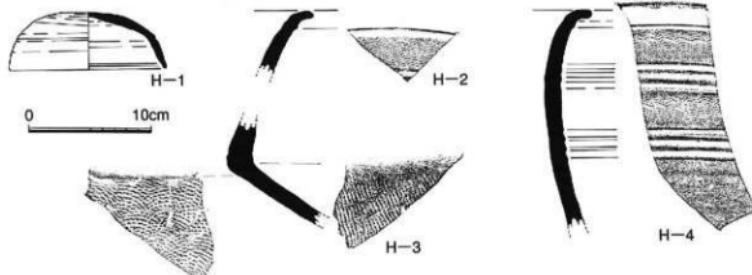
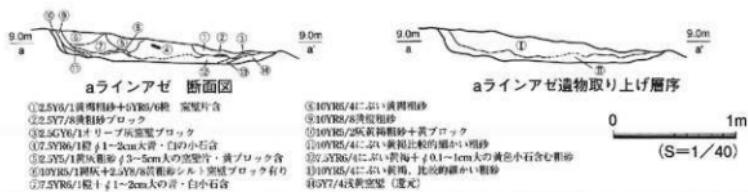
H区の上層觀察用のセクションは、山津1号窯の主軸に合わせて、縦のラインをA-A' とし、A-A' と直交した横方向には任意で、北東から南西にかけてa-a'、b-b'、c-c'、d-d'……とaからJまでの10本のセクションを設定した（第74・75図）。

各セクションは分層・図化・写真撮影を行った後に取り外したが、灰原層であるため、セクション内の僅かの面積でも比較的多くの遺物が出土した。そこで、トレンチ掘削やセクションを外す段階で、確定な各層からの出土遺物を詳細に区分して取り上げた。これは、灰原等の遺構が平面的な切り合い関係を区分することが不可能であるため、少なくとも横断面での確定な各層での出土遺物を抽出したかった為である。ただし、灰原の堆積は細かく見ると非常に複雑であるため、細かな分層単位ではなく、ある程度の大まかな層差で報告する。

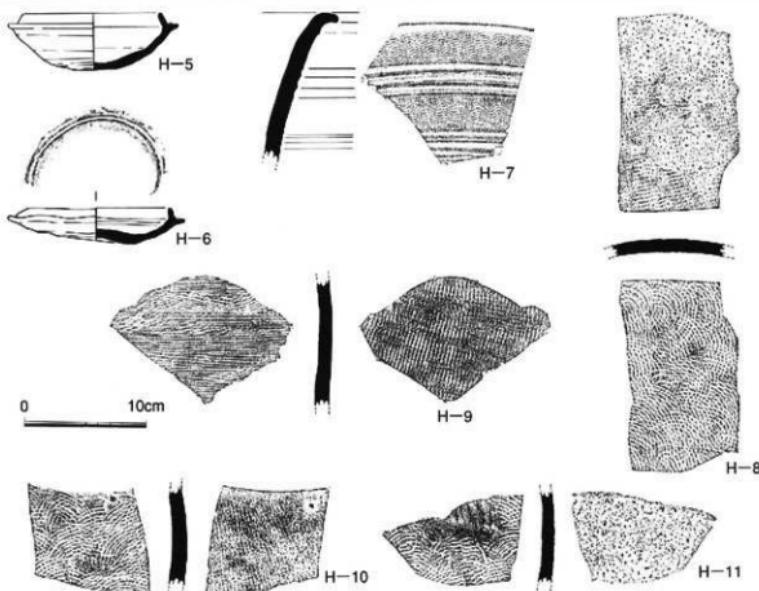
以下で報告する各セクションの挿図は一般的な通常の分層図と、各々の取り上げ層序とを2つずつ記してある。また、横方向のセクション（1号窯主軸から見て）での取上げ層序は概ねローマ数字で記してあり、出土遺物の層位は各図で確認できるようにした。

各堆積状況と出土遺物は次の通りである。

a-a'（以下、a ライン）のセクション（第77図）は調査区の最も北東に位置し、山津1号窯の埋

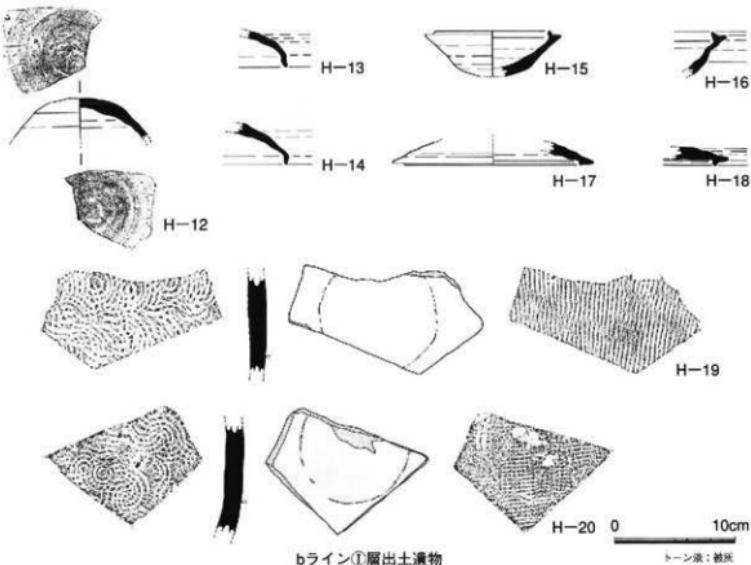


aライン①層出土遺物



aライン②層出土遺物

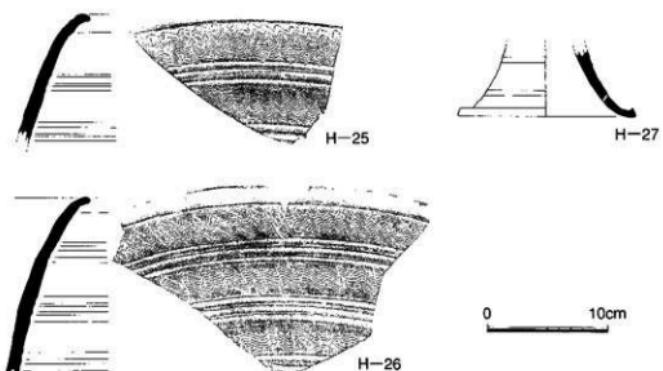
第77図 H区 aラインアゼ出土遺物



第78図 H区 b ラインアゼ出土遺物①



bライン③層出土遺物



bライン④層出土遺物

第79図 H区 b ラインアゼ出土遺物②

上に該当する部分に当たる。ここでの堆積状況を見ると粗砂層を中心に赤く焼けた埋土や窯壁なども検出できた。a ラインの埋土では上層(①層)と下層(②層)とに区分して取り上げたが、何れも時期的な差異はほとんどなく、概ね山津1号窯の窯埋土がそのままの状況で(但し表上より上は削平されているが)あることが分かる。

出土遺物のうちH-1～II-4はa ラインの層位が確実な①層出土遺物、H-5～11はa ライン②層出土遺物である。

II-1は須恵器の环口蓋である。ほぼ完形で口径12.8cm、器高4.7cmを測り、天井調整は回転ヘラケズリで、稜は僅かな段があり、口縁内面にも凹線を施す。II-2～4は甕Aで何れも細片である。

H-5は1号窯埋土の赤茶褐色上から出土したもので、ほぼ完形である、トレンチで出土したものであるが、むしろ、1号窯床面出土すべき遺物である、器形は环口の身で、底部の調整は回転ヘラケズリ、受部の一部は擬口縁状に剥離している。H-6も环口の身、約60%残で底みが著しく、外面に被灰する、また、内面に凹線状の凹みがある。II-7～11は甕の細片で、H-7が甕Aの口縁片で波状文と凹線を施す、H-8～11は体部の細片である。

b-b' (以下、b ライン) のセクション(第78図)は山津1号窯の中程に位置し、上軸と直交して設定した畦で、1号窯とその北西に位置する上坑SH113内を横切って設定している(第75図)。畦内には木の根が深く入り込んでいて層位も細分出来たが、調査の結果では概ねSH113の堆積(第78図)

①層)、1号窯廃絶後に堆積した上層(②層)、山津1号窯埋土(③層)とに大別できる。セクション関連で確実な層位を押さえられる遺物としてはH-12~20はbライン跡内の①層出土遺物、H-21~24は②層出土遺物、H-25~27は③層出土遺物である。

H-12~14は坏Hの蓋、H-12は丸みの強い天井部のみの破片で、天井部には二条の条痕が残り(工具痕?)、内面には一条のヘラ記号を施している。H-13は口縁部の細片である。H-15・16は坏Hの身、H-15は(復)径が9.3cm、受部高が0.3cmの小型品で底部調整は切り離し後ナデ、H-16は微細片であるが、受部高が0.3cmと低い。H-17・18は坏F(またはG)の蓋細片で共にかえりがある。H-19~20は甕の破片で、何れも置台として転用した円形の痕跡(別の須恵器片の剥離痕)が残る。

H-21~24はbライン①層出土遺物で何れも微細片である。H-21は坏Hの蓋、H-22~24は坏Hの身である。

H-25~27はbライン②層出土遺物である。H-25・26は甕Aの口縁で同一個体かもしれない。H-27は高杯の脚片である。

c-e'(以下、cライン)のセクションは、調査区中程よりやや北西に位置する。セクションの遺物の取り上げは①・②・③層に大別した(第80図)。このうち、H-28~40が①層出土遺物、H-42~61が②層出土遺物、H-41が③層出土遺物である。

H-28・29は坏Hの微細片で径の復元が不可能。H-30・31は坏Fの蓋で、H-30は約50%残、(復)口径12.8cm、器高3.0cmでかえりを有し、輪状つまみを付す、外面の全面に厚く釉が付着している。H-31は30%ほど残、H-30と同じくかえりを有し、輪状つまみを付す。H-32~35は蓋の細片で何れもかえりが付いたものである。H-36は高台で底部にヘラ記号を施す。H-37・38は甕片で、H-37の甕Cは歪みが著しい。H-39・40は須恵器の溶着資料で、H-40は石と甕片が溶着したものか。

H-41は置台(甕片転用)であり、径9.2cm程度の円形の剥離痕が残る。

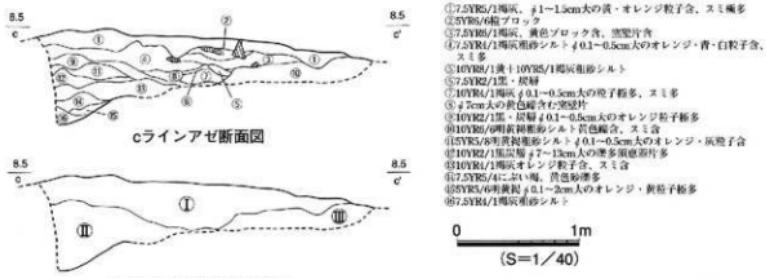
H-42は坏H蓋の細片、H-43~49は坏Hの細片である、何れも受部の立ち上がりが0.5~0.1cm程度と極めて低いものばかりである。

H-50は坏Fの蓋である。外面に灰を被り、その内面に重ね焼きと思われる別の須恵器片の(円形)の剥離が見られる。H-51・52は坏Fの身で、何れも高くしっかりした高台が付く。またH-52の体部下位には二条の沈線状の痕跡がある、ヘラ記号であろうか。H-53は高台の小片、H-55は壺の頭部片である。

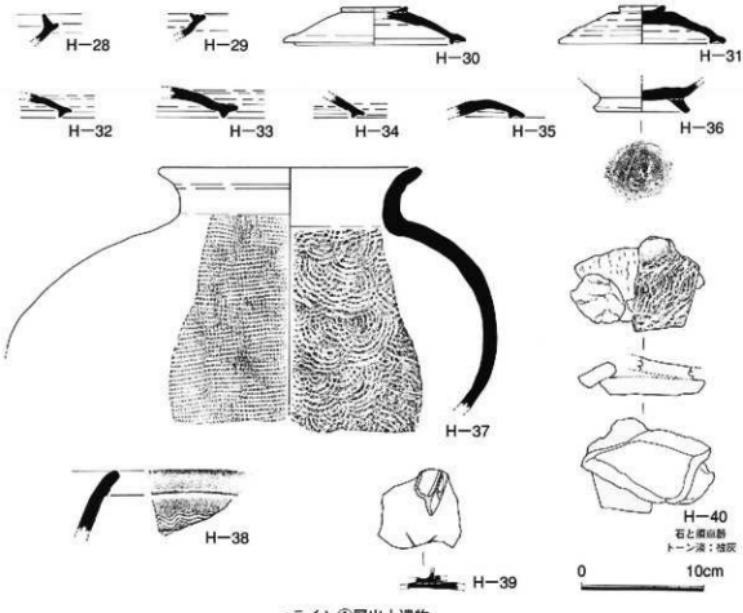
H-54・56・57は甕で、H-58・60は甕片を置台に転用している、H-61も甕片であるが、意図的に円形に欠損したような円盤状の須恵器で用途は不明であるが、二次焼成を受けているようである。

H-59は溶着資料で輪状つまみの蓋の上に、高台部分が溶着している。

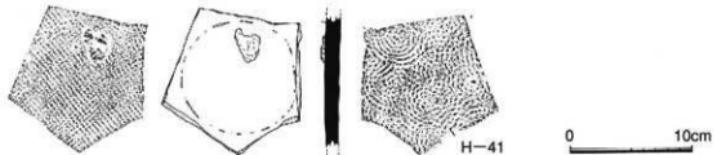
d-d'(以下、dライン)のセクション(第82図)は調査区中央よりやや北西に設定した畦で、平面的には1号窯に黒色灰原が堆積し、両者がかぶさって1号窯の平面検出が困難になっていく部分である。1号窯と灰原・他の遺構との関係を明らかにする為に設定した。トレンド調査の結果では、山



cラインアゼ遺物取上層序

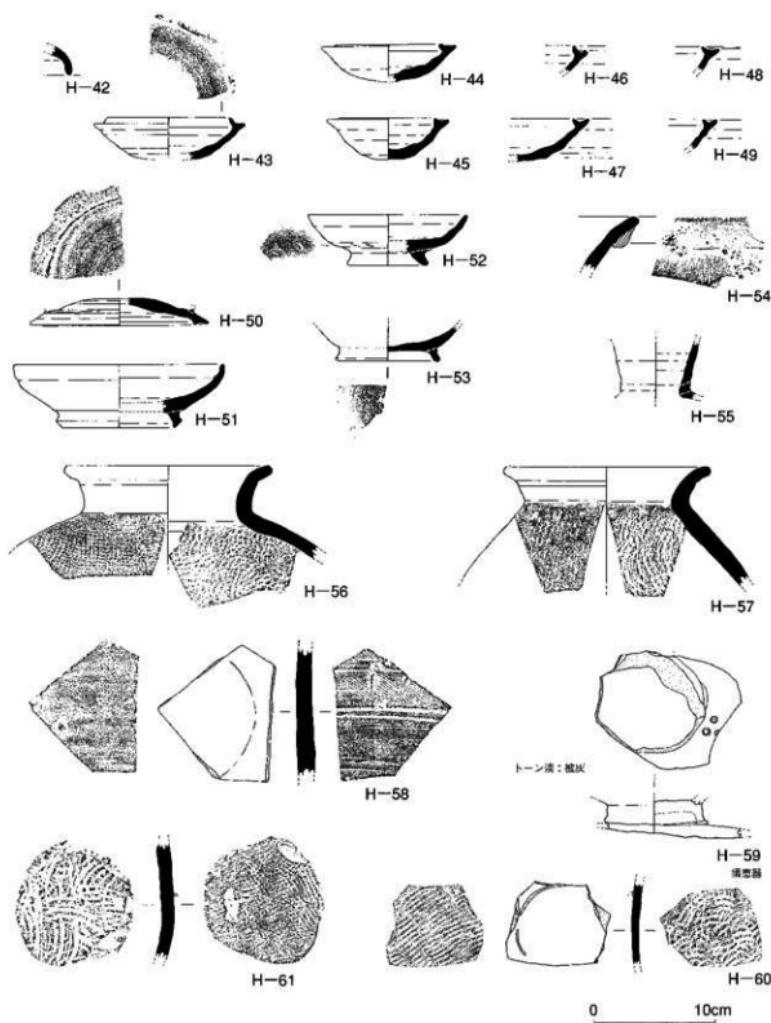


cライン①層出土遺物

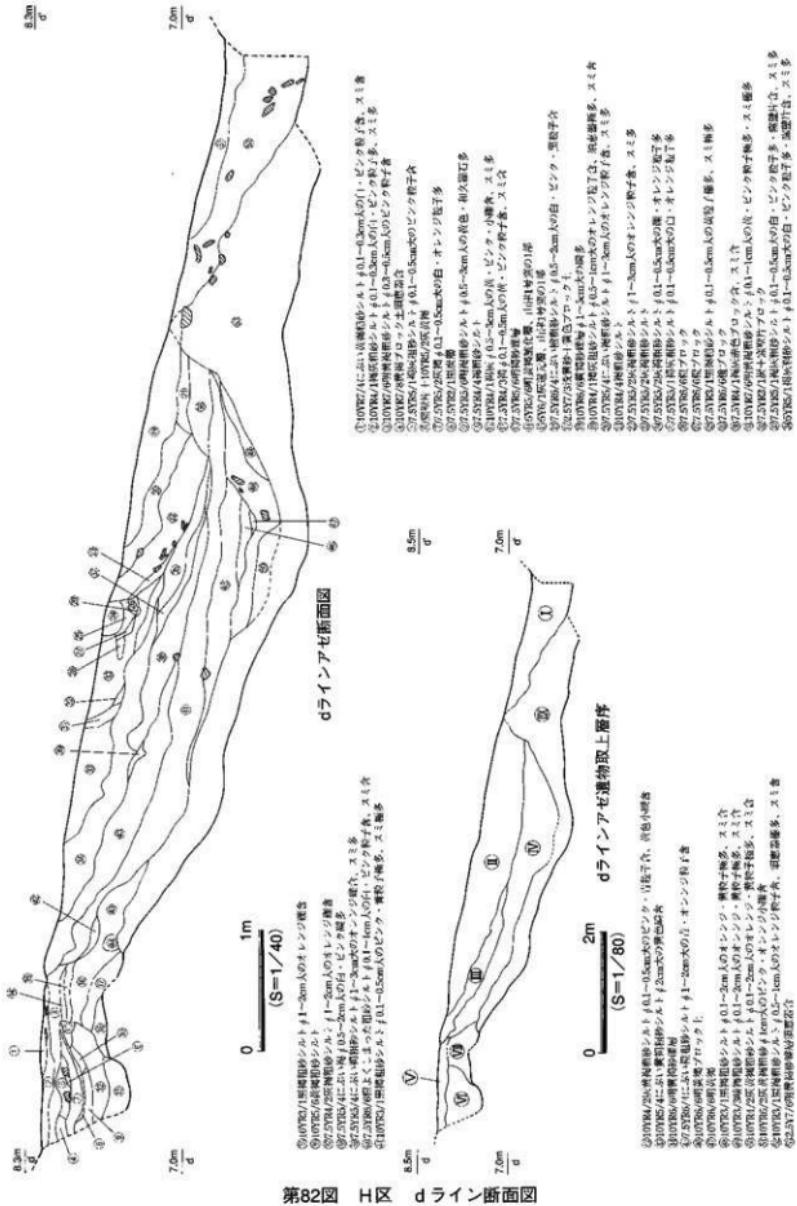


cライン御層出土遺物

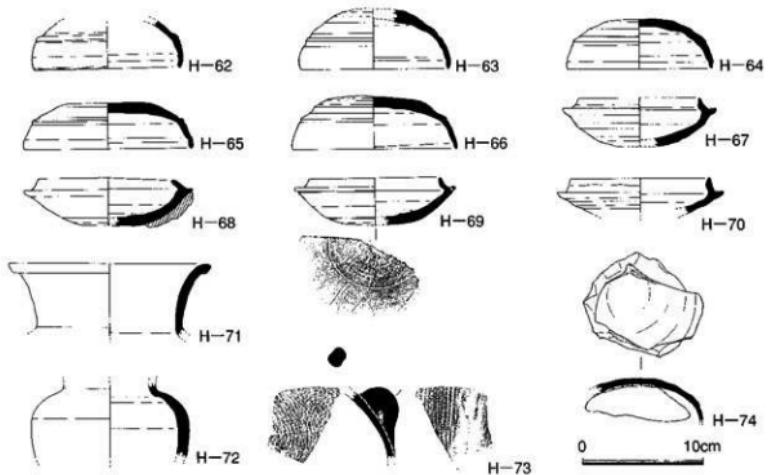
第80図 H区 c ラインアゼ出土遺物①



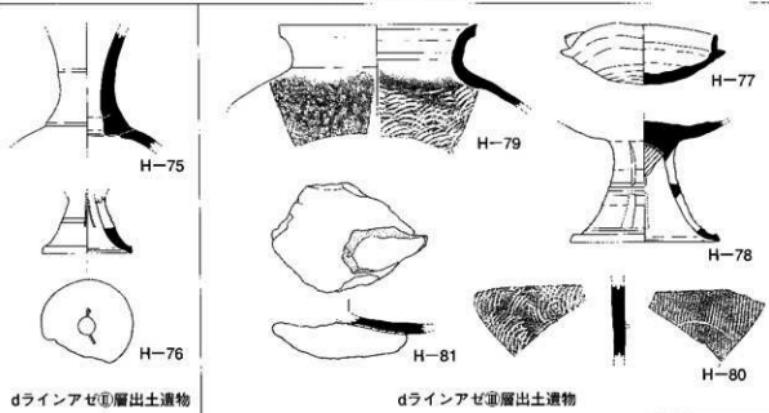
cライン①層出土遺物
 第81図 H区 c ラインアセ出土遺物②



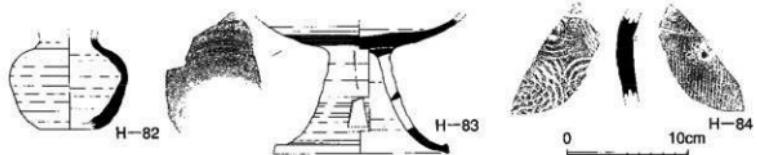
第82図 H区 dライン断面図



dライン①層出土遺物



dラインアゼ②層出土遺物



dライン③層出土遺物

第83図 H区 d ラインアゼ出土遺物①

津1号窯の焼上（第82図の第⑭・⑮層）が検出でき、S II 113の堆積がそれを切り込む状況が良く観察できた（図版21）。また、この他にもS H 101と102の堆積状況も観察することができた（図版20）。

現地において、セクションからの層位の確実な遺物の取り上げは①～⑩層に大別したが（第82図）、山津1号窯の埋土は極めて僅かで良好な1号窯関連の資料は得ることが出来なかった。また、1号窯灰絶後に堆積した二次堆積の灰原も1号窯の床面ぎりぎりまで覆っており、1号窯の南西にある平坦面（黄色シルト層・整地？）にも二次堆積と思われる堆積が認められた。

大別した各層位は主に①層（S H 101埋土）、②～⑩層（S H 102埋土）、⑪層（山津1号窯灰絶後に堆積した灰原層）、⑫層（S H 113埋土）、⑬層（1号窯～黄色シルト層に堆積した包含層）、⑭層（S H 101・102より前に堆積している砂礫の強い包含層・地山直上）である（第82図）。このうち、H-62～74が①層出土、H-75・76が⑩層出土、H-77～81が⑨層出土、H-82～84が⑩層出土、H-85～89が⑪層出土、H-90～98が⑫層出土、H-99～103が⑬層出土、H-104～112が⑭層出土遺物である。

H-62～66は須恵器の環Hの蓋で、稜には凹線や沈線などによる段が見られる。H-67～70は環Hの身である。このうち、H-70には体部に回転ナデによる強い凹みがつき、受部周辺の部分に被灰している。また、H-74は環Hの蓋と石との溶着資料である。H-71・72は蓋で、H-73は把手部分である。

H-75・76はdライン⑩層出土遺物でH-75が長甌壺（壺K）、H-76が小型の脚片で二方向から貫通する切込みを施している。

H-77～81はdライン⑩層出土遺物でH-77は須恵器の環H、ほぼ完形であるが歪みが激しい。H-78は高环で二段三方向からの透かし・切込みが入る。H-79は甌Bで口縁端部に面をつくり、肩部に釉が被る。H-80は甌片転用の置台片で、H-81は石？と須恵器片との溶着資料である。

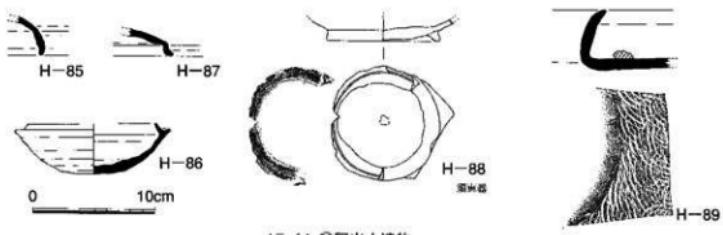
H-82～84はdライン⑩層出土遺物でH-82は小型の壺、H-83は高环で环外面にカキ目を施す、また、H-84は甌片で置台に転用していると思われる。

H-85～89はdライン⑪層出土遺物で、H-85は环H蓋、H-86は环Hの身、H-87は口縁端部が細曲する蓋片、H-88は高台片で、高台の剥離している箇所がある、この剥離部分には断面V字状の極細な沈線が巡っており、先端の尖った工具によって接合沈線を施した痕跡と思われる。H-89は甌片か。

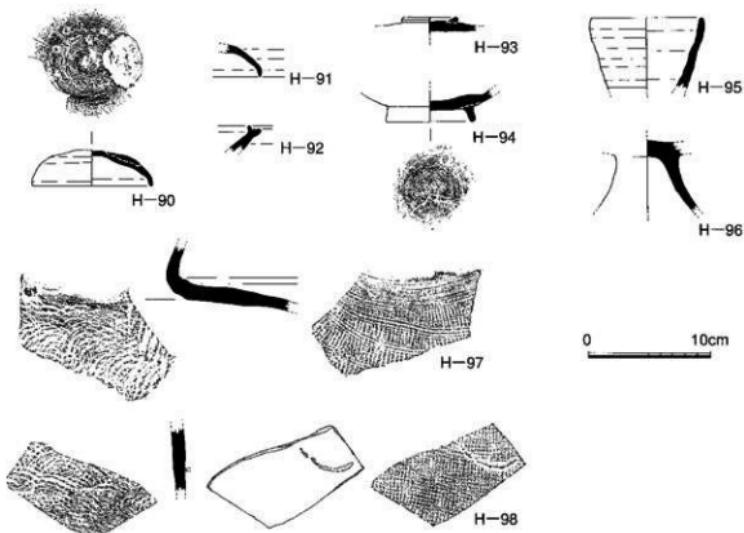
H-90～98はdライン⑫層出土遺物である。H-90は80%残で口径9.9cm、器高2.9cmを測る小型の環H蓋で天井部分には剥離痕が残る。H-91は环Hの蓋細片、II-92は环H身の細片である。H-93は輪状つまみの小片で、H-94は高台片、底部は切り離し後ナデで、ヘラ記号を施している。H-95は壺の口縁片でH-96は高环、H-97は甌、H-98は（甌片転用の）置台である。

H-99～103はdライン⑬層出土遺物である。H-99は环Hの蓋と身との溶着資料で、身外面に被灰する。H-100～103は环Hの細片である。

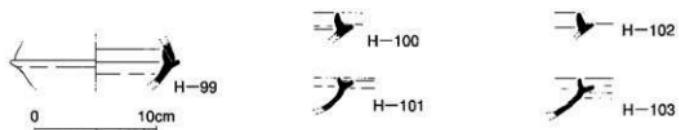
H-104～112はdライン⑭層出土遺物で、H-104～110は环Hの蓋、H-111・112は环Hの身である。H-104は天井部に回転ヘラケズリと不定方向のケズリ痕があり、天井内面にはヘラ記号か。H-105は天井部にヘラ記号を施し、II-109は口縁外面から稜までの間に灰を被っている。



dライン⑦層出土遺物

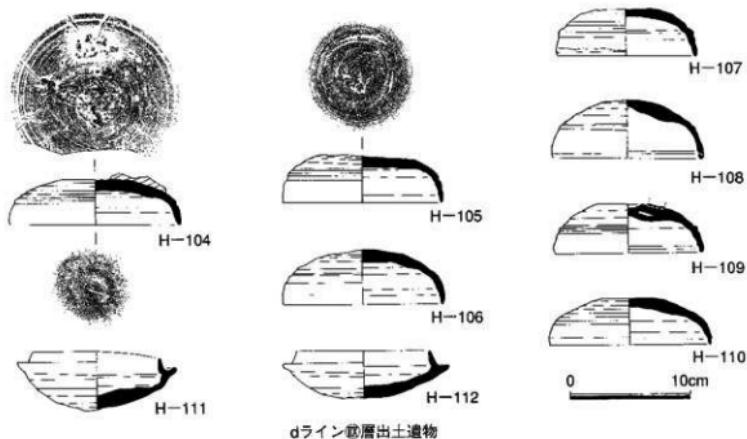


dラインd層出土遺物



dラインd層出土遺物

第84図 H区 d ラインアゼ出土遺物(2)



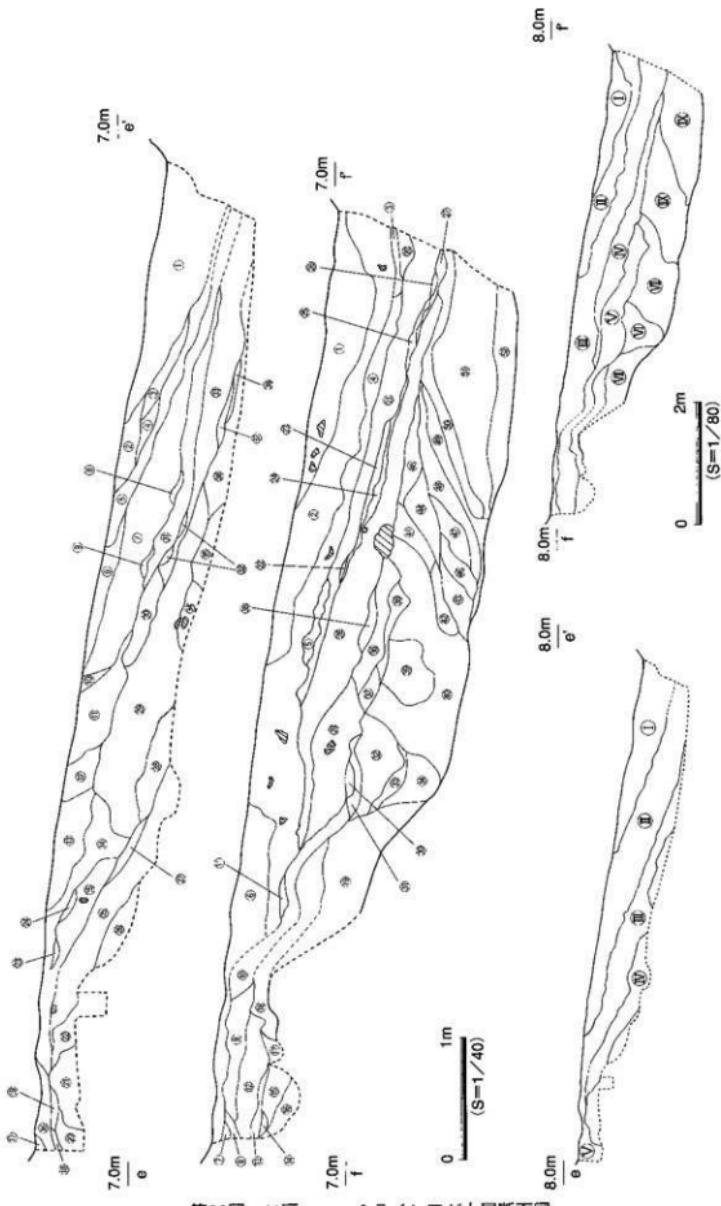
第85図 H区 dライン出土遺物③

e-e'（以下、eライン・第86図）より西のセクションは既に灰原を南北に切ったように設定されたラインで複数の灰原の堆積が確認できる。黒褐色を中心とする灰原層を可能な限り分層したが、セクションからの確実な層位の遺物としては①～⑦の五単位で取り上げた（第86図）。

このうち、①層はSH101の可能性が、⑦層はSH113が続いている可能性がある。他の層は灰原層で、上層には真っ黒な灰原層と、炭の少ない盛土のような赤褐色土とが地形に沿って北から南に向かって堆積している。確実な分層資料を見ると、eラインの地点では最下層近く（⑩層）まで、7世紀前半（山津1号墓～Ⅱ期）の遺物が出土しており、山津1号空廐跡に堆積した灰原層であることが分かる。eラインの出土遺物としてはH-113～120が①層出土遺物、H-121～124が②層出土遺物、H-125～128が③層出土遺物、H-129～136が④層出土遺物、H-137・138が⑤層出土であり、層位不明瞭なeライントレンチ出土の遺物としてH-139・140を図化した。

H-113・114は壺Hの蓋である。H-113は70%残、口径9.0cm、器高3.6cmを測る小型品で天井はヘラ切り一荒いナデで切離し痕が明瞭に残る。H-114も（復）口径10.2cm、器高3.6cmの小型で外間に厚く被灰する。H-115・116は壺Hの身で、何れも細片ながら受部の立ち上がりが0.2～0.4cmと低い、H-116の底部はナデで工具痕と思われる条痕が見られるが、底部周辺に若干のケズリ痕が残る。H-117は糸切り痕を残す高台片で、H-118～120は高环片である。H-118は無蓋高环（高环C）の壺部で壺内面に被灰する。H-119の高环は一段一方向の方形透かしで、壺底部（脚頂部）に製作痕と思われる円形の渦巻きが見られる。

H-121～124はeライン①層出土遺物で、H-121・122は壺Hの蓋である。H-121は稜の見られない小型品、天井内面にヘラ記号を施す。H-122は天井部に多数の細かい条痕が見られる、ヘラ記号というより工具痕であろうか。H-123・124は高环でH-123は一段二方向の方形透かし、H-124は



第86図 H区 e・f ラインアゼ土層断面図

ライアン・アーヴィング

ライシアナ+色

焼成不良で明褐色を呈するもので、透かしは一段二方向に一方が方形、もう一方が切り込みを入れる。

H-125~128はeライン^⑩層出土遺物である。H-125~127は壺Hの身で、H-125の底部に見える条痕はヘラ記号か、H-127は体部外面と受け部分の両方に被灰する。H-128は壺Aの口縁片で、波状文と浮文の剥離痕が見える、また置台に転用していると思われ、円形の別須恵器片の剥離もある。

H-129~136はeライン^⑪層出土遺物である。H-129~131は壺IIの蓋、H-132は壺IIの身である。このうち、H-131はX印のヘラ記号が見られるが、歪みが極めて激しい。H-133~135は高壺でH-133・134が脚部片、H-135は80%残の高壺Bで口径16.8cm、器高10.1cmを測る、脚部は一段二方向の方形透かしで脚外面と壺内面に被灰する、特に壺の内面（見込み）には窓壁の小片が多数付着している。H-136は壺Bの口縁片で口縁内面の全面と外側の一部に被灰している。

H-137・138はeライン^⑫層出土遺物の壺II片で、平面図では山津1号窯南西に位置する黄色シルト層に堆積していた遺物である。

H-139・140はeラインのトレンチ出土遺物である。II-139は壺片の切り屑を転用した窓道具で、H-140はヘラ記号の残る壺Hの蓋である。

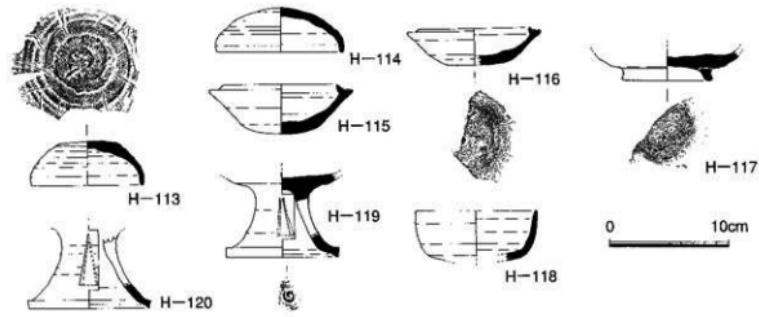
f-f'（以下、fライン）は調査区の中程を北西から南東に向かって設定したセクションである（第86図）。位置的にはeラインのセクションと同じくH区の灰原層の中にトレンチを設けた形になった。層位もeラインや他の灰原に設定した土層と同じく黒色の灰原層と、赤茶色のシルト層などが複雑に堆積していた。この複雑な層位から確実な分層資料を得るために、セクション関連の遺物の取り上げは①～⑩層に大別して調査を行った（第86図）。その結果、山津1号窯と同じⅠ期（6世紀末～7世紀初頭）から、Ⅳ期（8世紀末～9世紀）に及ぶ各時代の遺物が検出でき、H区に堆積している灰原層が長期間に渡って複雑に堆積した結果であることが理解できた。fラインから出土した遺物のうち、H-142・143が①層出土遺物、H-141・144が⑩層出土遺物、H-145～158が⑪層出土遺物、H-159～164が⑫層出土遺物、H-165～175が⑬層出土遺物、H-176・177が⑭層出土遺物、H-178～182が⑮層出土遺物、H-183～186が⑯層出土遺物、H-187・188が⑰層出土遺物で、II-189～197がその他のfライントレンチ出土遺物である。

H-142・143は壺Aである。H-142はナデによって口縁端部をくびれさせた壺で、底部の切り離しは回転糸切りである。H-143はくびれがほとんど無い壺で底部の切り離しは回転糸切り、底部周辺はこの切り離し時にできたと思われる粘土の盛り上がりが認められる。

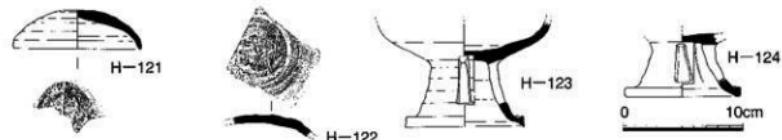
H-141・144はfラインの畦・⑩層出土遺物である。H-141が天井部に工具による条痕の残る壺H蓋で、焼成が甘く軟質である。H-144は壺片を転用した置台で円形の剥離痕が見られる。

II-145～158はfラインの⑩層出土遺物である。H-145・146は壺H蓋の小片でH-146にはヘラ記号が施されている。II-147・148は口縁端部が屈曲する壺Fの蓋で、H-147は窓壁片が付着し、外側に沈線を施している。H-148は蓋の重ね焼きを示す資料である。H-149はかえりを有する蓋片で、H-150は壺Fの身である。H-151・152は壺Aで底部が糸切りにより切り離されている。

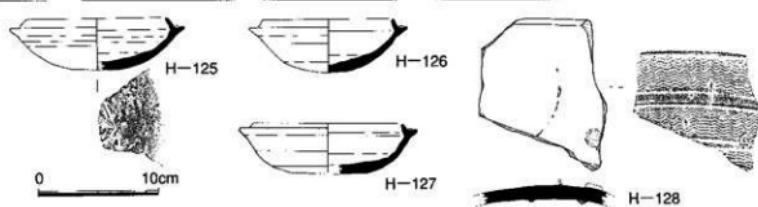
H-153～155は皿でH-153は無高台の皿C、H-154・155は高台を付した皿D、全て回転糸切りで底部を切り離している。H-156は壺Cの口縁片。H-157は須恵質の上馬で下肢半分が残存してお



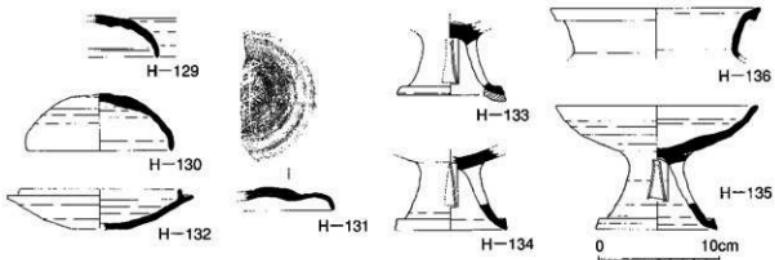
eライン①層出土遺物



eライン②層出土遺物

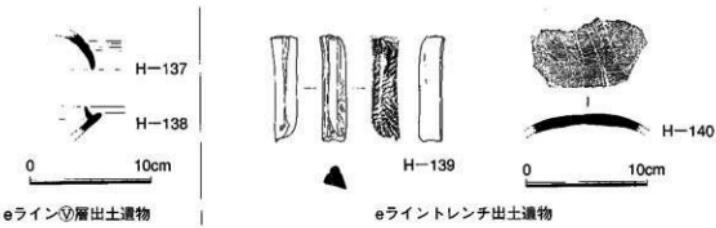


eライン③層出土遺物



eライン④層出土遺物

第87図 H区 e ラインアゼ出土遺物①



第88図 H区 eラインアセ出土遺物②

り、粘土塊貼り付けによって男性器を表現している。H-158は壺片を転用した置台で、内面に被灰しているが、円形に被灰していない箇所が見られる。

H-159～164はfラインⒶ層出土遺物である。H-159～161は壺Hの蓋、僅かに稜の段が見られるが、壺H身（H-162～164）の受部の立ち上がりは0.5cm前後とやや低めである、このうち、H-164は二次焼成を受けているもので歪みと被灰が著しい。

H-165～175はfラインⒷ層出土遺物である。H-165・166は壺Hの蓋で、H-165は天井部の調整は回転ヘラケズリ、また、天井部にヘラ起こしの痕跡と思われる太い凹みが残る。H-166は稜の段が無く、天井の調整はナデ、焼成が甘く黄褐色を呈している。H-167・168は壺Hの身でH-167は外面上に重ね焼きと思われる変色が明瞭に残る、底部の調整は切り離し→ナデ。H-168は70%残で口径11.2cm、器高3.5cmを測る、底部に多数の沈線がある、工具によって記されたキズか。H-169～171は蓋の細片で、H-172は壺A、底部の切り離しは回転糸切りで外側の被灰が顯著である。H-173は小型の壺身か、50%残で（復）口径10.0cm、器高3.7cmを測る、口縁端部が逆ハ字状に伸びているので身として実測した。H-174は壺の頸部で被灰がみられる、二次焼成か。H-175は高壺の脚である。

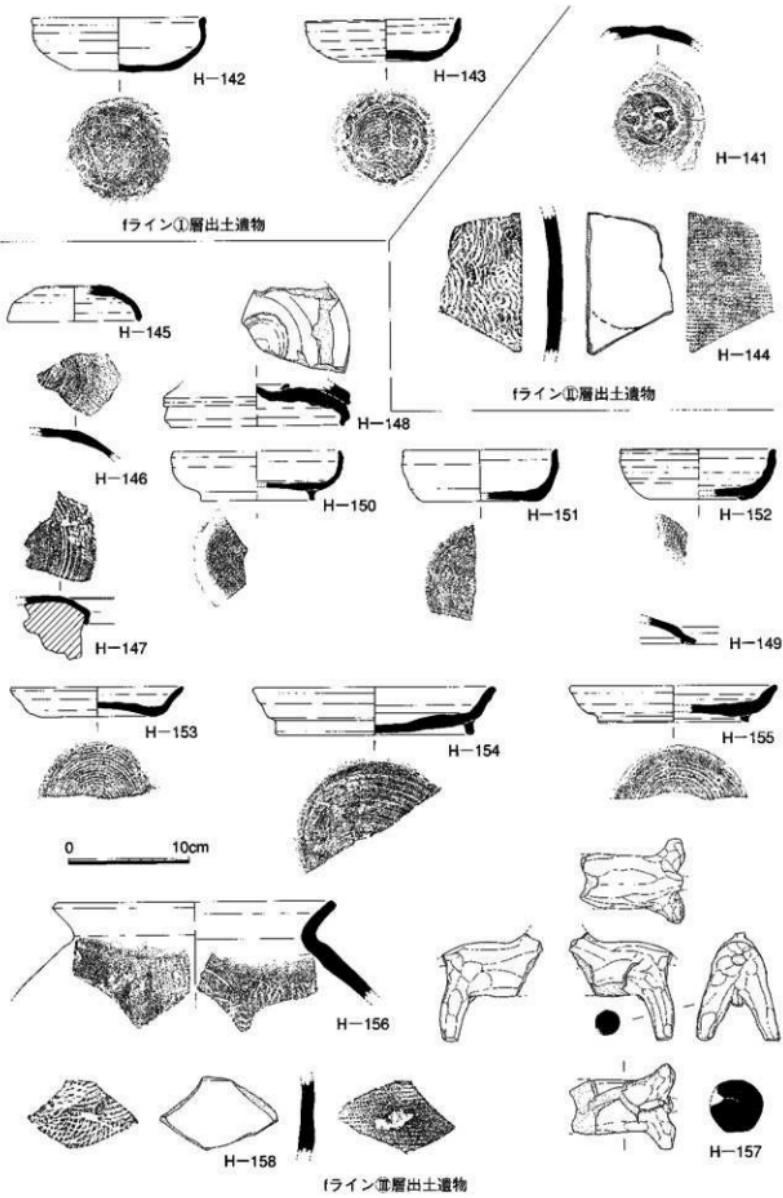
H-176・177はfラインⒸ層出土遺物である。H-176は壺IIの蓋、H-177は身で何れも破片である。

H-178～182はfラインⒹ層出土遺物である。H-178は壺Hの蓋、H-179・180は身の細片である。H-181は高台片で底部調整はケズリ、H-182は高台の高さが1.4cmと高い、底部の調整はナデか。

H-183～186はfラインⒺ層出土遺物で何れも壺Hの細片である。

H-187・188はfラインⒻ層出土遺物で、壺Hの蓋、H-188は70%残で口径12.2cm、器高4.4cmを測り、外側に部分的に灰を被る、やや歪みもあり。

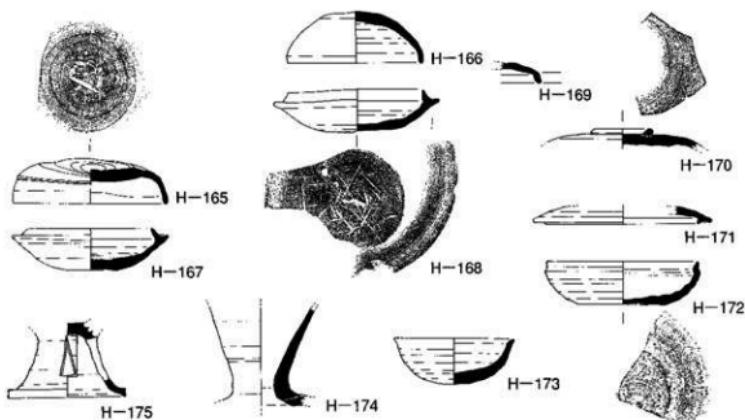
H-189～197はfラインのトレンチから出土した遺物で、H-189は壺Hの蓋、50%残で天井の調整はヘラ切り→ナデ、天井部の粘土組（板）の痕跡が明瞭に残る。H-190・191は壺Hの身で、底部は何れも切り離し後ナデを施している、また工具による条痕が残り、H-191には工具による条痕を施した後で三条のヘラ記号を記す。H-192は口縁端部にかえりや屈曲の無い蓋片で、重ね焼きと思われる別須恵器の円形の剥離が残る、つまみ部分は欠損のため不明。H-193は高台付きの皿で底部の切り離しは回転糸切り、H-194は壺A片で、頸部が強く歪み、内面全体に灰を被る、また半円形の変色部分があり、置台に転用していると思われる。H-195は半瓶で90%残、（復）口径4.5cm、器高9.1cmを



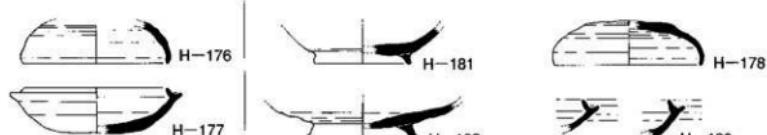
第89図 H区 f ラインアゼ出土遺物①



fライン②層出土遺物

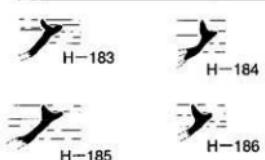


fライン②層出土遺物



fライン②層出土遺物

fライン③層出土遺物



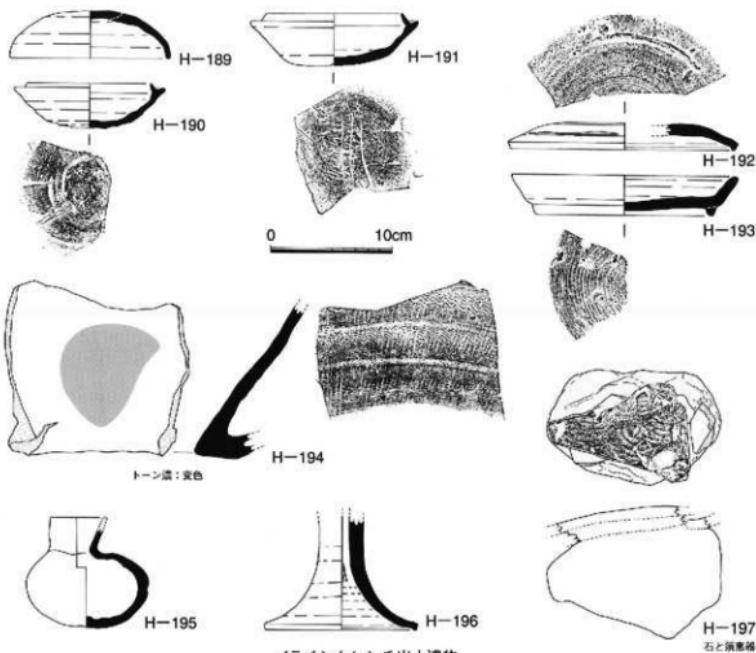
fライン③層出土遺物



0 10cm

fライン④層出土遺物

第90図 H区 f ラインアゼ出土遺物(②)



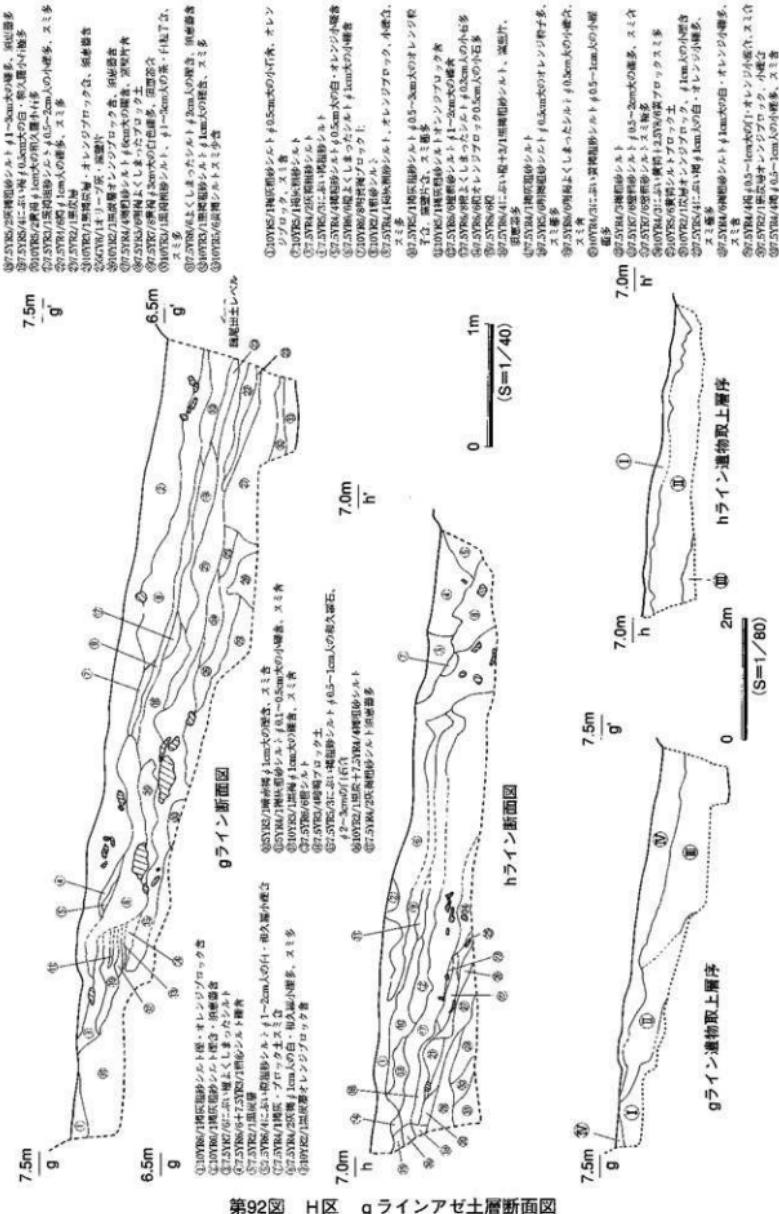
第91図 H区 f ラインアゼ出土遺物③

測り、焼成は不良で黄褐色を呈する軟質である。H-196は脚片で細長い形状を示す、残存部分に透かしは無し。H-197は石と須恵器片（甕）との落着資料で石に白灰が被っている。

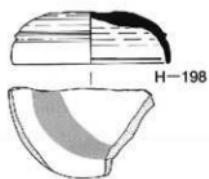
g-g'（以下、g ライン）のセクション（第92図）はH区調査区のほぼ中央に位置する。e ラインやf ラインと同じく、黒色や赤茶色の土層が堆積し幾時期かの灰原が、地形に沿って北から西に向かって堆積している状況が確認できた。他の畦と同じく、セクションからの確実な層位資料として①～⑩層に大別して遺物を取り上げた（第92図）。g ラインから出土した遺物のうちH-198～202が①層出土遺物、H-203～209が⑩層出土遺物、H-210～221が卯層出土遺物、H-222～242が卯層出土遺物で、H-243～253がg ラインのトレンチから出土した遺物である。

H-198～201は須恵器の坏Hで、H-198は傷みがひどく、二次焼成を受けていると思われる。H-200は軟質で明橙色を呈しているが、受部外面の部分のみ若干黒色に変色しており、焼成時の重ね焼きの結果と考えられる。

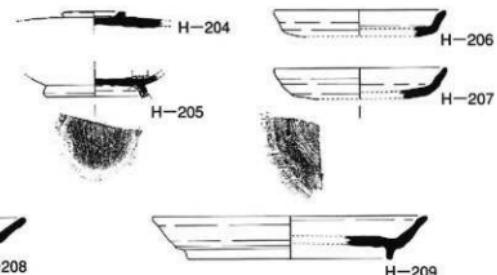
H-203～209はg ライン⑩層出土遺物である。H-203・204は蓋片で、H-203の外面には重ね焼きの痕跡と思われる円形の変色が見られる。H-205は高台片で底部の切り離しは静止糸切りである、内外面に別の須恵器片が付着し、被灰を受ける、二次焼成で置台に転用していると思われる。H-



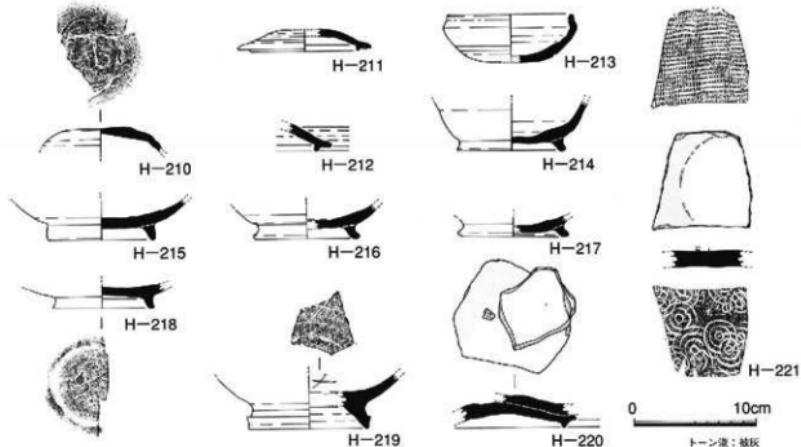
第92図 H区 g ラインアゼ土層断面図



gライン①層出土遺物



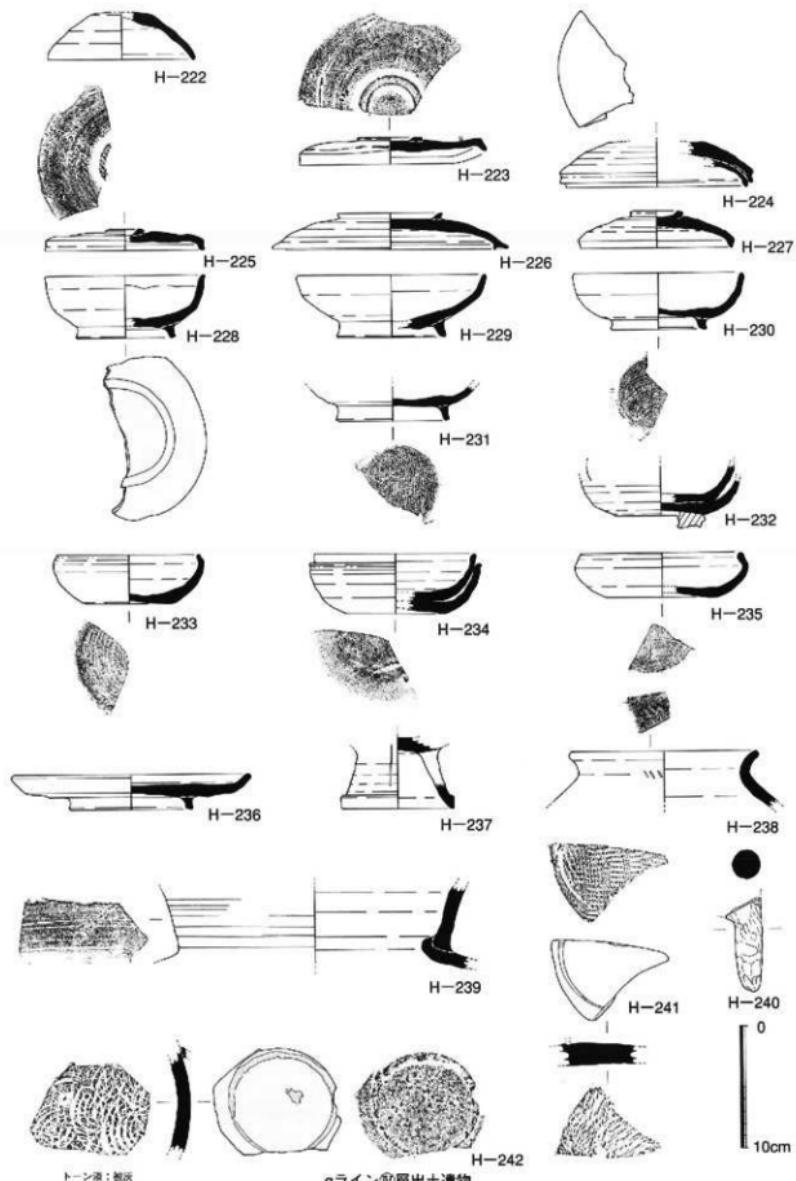
gライン②層出土遺物



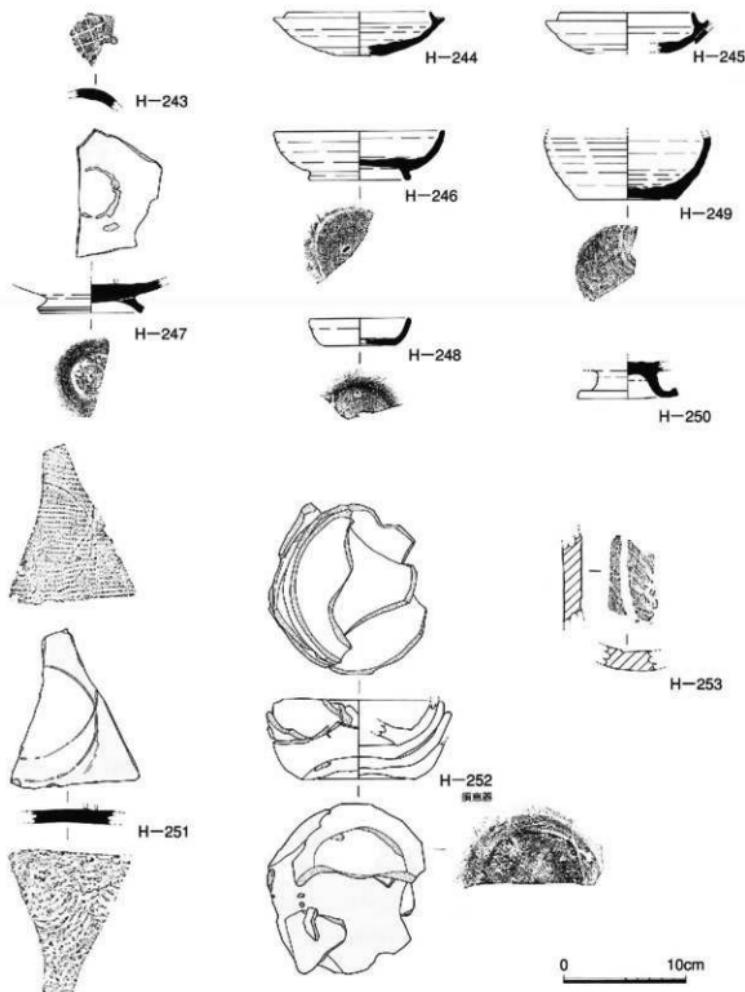
トーン浅：板灰
トーン深：実色

gラインⅢ層出土遺物

第93図 H区 g ラインアゼ出土遺物①



第94図 H区 g ラインアゼ出土遺物②



トーン液：桂灰

g ライントレンチ出土遺物

第95図 H区 g ラインアゼ出土遺物③

H-206・207は無高台の皿（A・C）で、H-208・209は高台付きの皿Dである。

H-210～221はgライン⑩層出土遺物である。H-210は環IIの蓋片で天井部の調整はヘラ切り→ナデ、またヘラ記号が施される。H-211・212はかえりのある蓋片で、復径の大きさからH-211は環Gの蓋か。H-213は三分の一ほど残の塊Aで（復）口径10.4とやや小ぶり、底部調整はケズリ？→ナデで重ね焼きと思われる変色が見られる。H-214～219は塊、若しくは壺の高台片で、底部調整はH-218が静止糸切り→ナデの他は全てナデ調整である、また、H-219は内面にヘラ記号を記している。H-220はかえりのある蓋と、他の須恵器片との溶着資料、内外面共に傷みが激しく二次焼成を受けていると思われる。II-221は置台（甕片転用）で内外面はタタキ調整、外間に円形の剥離痕と被灰がある。

H-222～242がgライン⑪層出土遺物である。H-222は稜が無段の（復）口径12.2cm、器高3.9cmを測る環II蓋で、H-223～227は環Fの蓋、つまみの確認できるものは全て輪状つまみで、H-223・224は外面の重ね焼き痕（円形の剥離痕や被灰）が見られる。H-225には外面に工具痕と思われる条痕が残る、H-226が約40%残で（復）径のつまみ部分は8.6cmと極めて大きい。

H-228～231は環Fの身で、H-228は外面下半と底部に被灰している。底部調整はH-229がナデ、H-230・231が静止糸切りである。

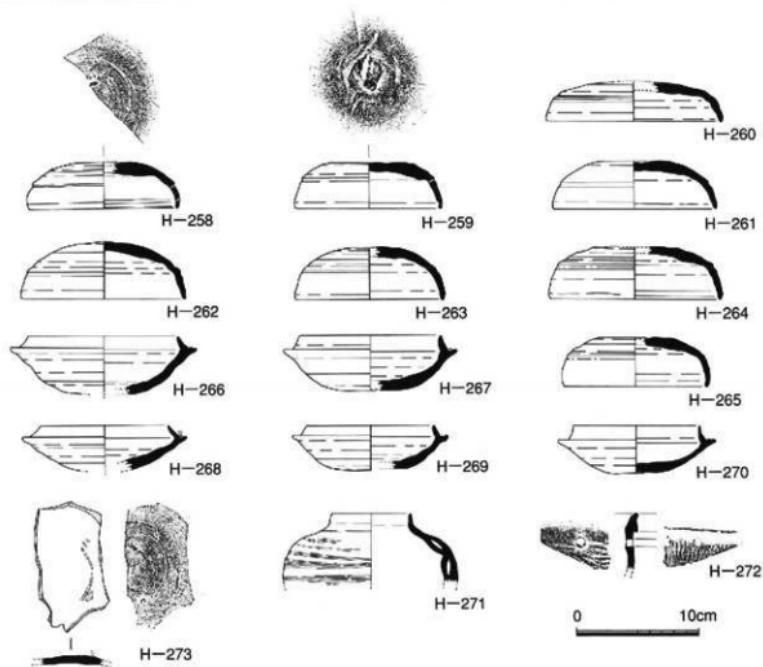
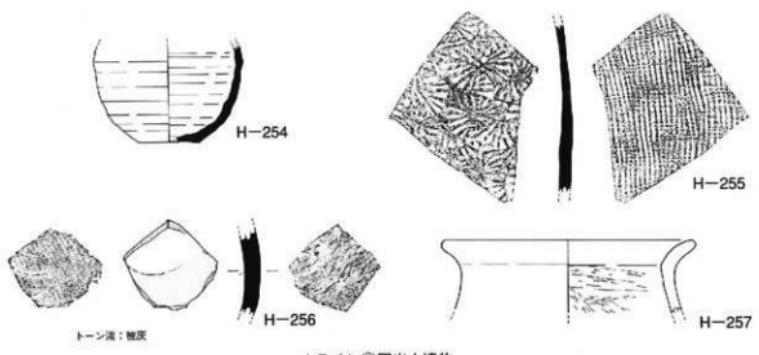
H-232は壺の重ね焼き資料で、H-233～235は塊Aである。何れも糸切り痕を残し、H-234は塊Aが二個体分溶着している。

H-236は環部が極めて浅く大きく開いた皿。H-237は高環の脚片で二方向より切り込みが入る、焼成は甘く灰白色を呈している。II-238は甕Cで肩部にヘラ記号を記す。H-239は甕Aで頸部の接合がかなり明瞭に観察できる。H-240は須恵質の棒状遺物で土馬の脚か。H-241・242は甕片転用の置台で円形の剥離痕が良く残る。

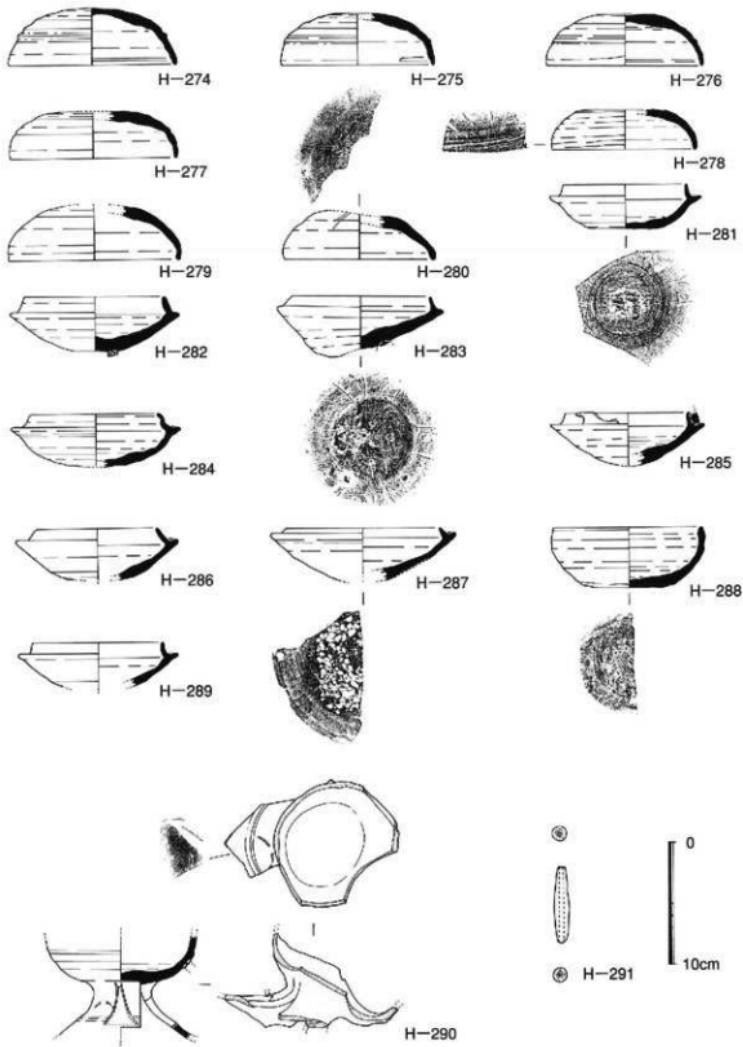
H-243～253はgラインから出土した、その他のトレンチ出土遺物である。H-243はヘラ記号の残る小片、H-244・245は環IIの身である。H-244の底部はナデ調整であり、その周辺にはケズったような痕跡が見られる。

H-246は環Fの身で底部調整は静止糸切り→ナデ。H-247は壺の底部か、内面に径4cmの小さな円形剥離痕が残って被灰を受けているので二次焼成と思われる、また底部にはヘラ記号を記している。H-248は小型の皿で底部の切り離しは静止糸切りである。II-249は壺で底部の切り離しは糸切りによる。H-250は小型の脚片で、H-251は甕片転用の置台、円形の剥離痕が三重ほど見られるので、少なくとも三回以上は置台に転用していると思われる。H-252は塊の重ね焼き資料である、現存では四重の重ね焼きが認められるが、別須恵器片の接触痕があり、被灰も激しい、重ね焼きで失敗したものを置台に転用していたものと思われる。H-253は瓦の小片で凹面は全面に布目、凸面はナデ調整を施し、また凹面には強い凹みが見られる。

h-h'（以下、hライン）のセクション（第92図）はH区の調査区中程よりやや西に位置している。平面的には1号窯の灰原（灰原下層）位置にあるが、ここで山津1号窯に直交したトレンチの出土遺物では、最も上の灰原上層（第92図・①層）で車輪文を持つ8～9世紀代の甕片（II-255）が



第96図 H区 hラインアゼ出土遺物①



トーン線：被灰
hライン①層出土遺物
第97図 H区 h ラインアゼ出土遺物②

出土し、その下の層厚40cmほどのオレンジ色のブロック土を多量に含む層（⑩層）では、時期的に山津1号窯廃絶後の7世紀前半を中心とする須恵器片が出土し（H-274～291）、更にその下の黒色上（⑪層）からは1号窯とほぼ同時期の須恵器片のみを検出した（H-258～273）。

これらの確実な層位資料から、hラインの地点では先ず、山津1号窯に伴う灰原の堆積があり、その後、7～9世紀にかけて別の灰原等の堆積が繰り返されたことが分かる。出土遺物のうち、H-254～257はhライン①層出土遺物、H-274～291は⑩層出土遺物、H-258～273は⑪層出土遺物である。

H-254は壺の体部片である。H-255は甕片と思われる破片である。外面はタキ目調整で、当て具は車輪文（放射線状当て具痕）である。H-256は置台（甕片転用）と思われるもので被灰と円弧状の剥離痕が残る。H-257は土師器の甕片で短く外反する口縁に、体部の調整は外面が風化、内面はケズリとナデ。

H-258～273はhライン⑩層出土遺物でH-258～265は壺Hの蓋、H-266～270は壺Hの身である。H-258は粘土紐の痕跡が何れ、口縁内面にはナデによる凹みが残り、天井にはヘラ記号と思われる微かな条痕が見える。H-259は70%残で口径12.2cm、器高3.7cmを測る、天井はヘラ切り（ヘラ起こしか）→ナデで稜の部分には捩口縁になっている。H-261は二次焼成を受けた結果か、傷みがあり、内外面に灰を被る。H-264は重ね焼きの痕跡と思われる変色が口縁外面にある。

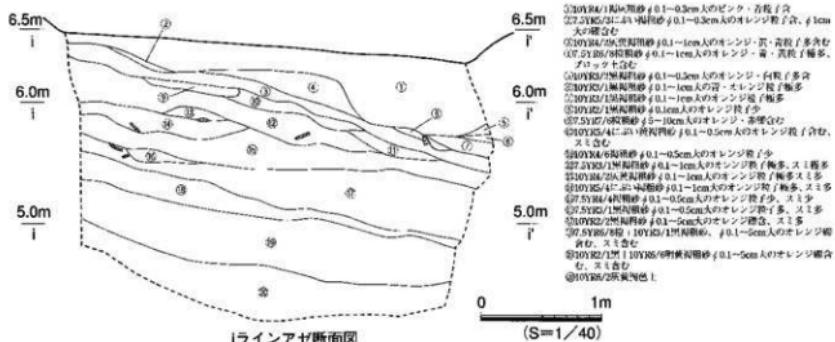
H-266～270は壺Hの身で、H-266は焼成が甘く黄灰色を呈する。H-267・268・270は外面に被灰している。H-271は短く直立する頸部を付す小型の短頸壺（壺A）で、外面はカキ目調整、頸部と体部との境で変色が見られるので、焼成時には蓋を被せていたものと考えられる。H-272は鉢、もしくは壺の小片で糸孔と思われる焼成前の穿孔がある。H-273は外面に傷みのある須恵器片（壺H蓋）で、別の須恵器片の付着があるので、転用したものの。

H-274～291はhラインII層出土遺物である。H-274～280は壺Hの蓋で、H-274・276・279は焼成不良の軟質、非還元の褐灰色や白灰色を呈する。H-275は被灰を受け傷みが著しい、二次焼成か。H-278は外面の口縁付近に右上がりの沈線状の痕跡が残る。H-280は稜がなく、天井の調整がナデで、ヘラ記号を施している。

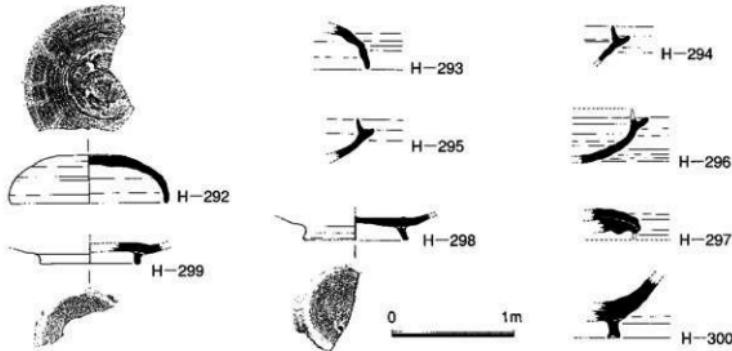
H-281～287・289は壺Hの身である。H-281の底部は底部中心がナデ（ヘラ切り→ナデ）で工具による条痕が残る、また、周辺は回転ヘラケズリを施している。H-282は外面に黄灰を被り調整不明瞭、H-283は80%残で重ね焼き時に生じたものか、歪んでいる、底部調整はナデでヘラ記号を記す。H-287は外面に傷みが顕著である。H-288は壺Aで底部の切り離しは糸切りであるが、切り離し後にナデとオサエで底面に凹凸が生じている。

H-290は高壺片で歪みが激しく、置台に転用している様子で脚の下に剥離痕が残る。H-291は土師質の土錐である。

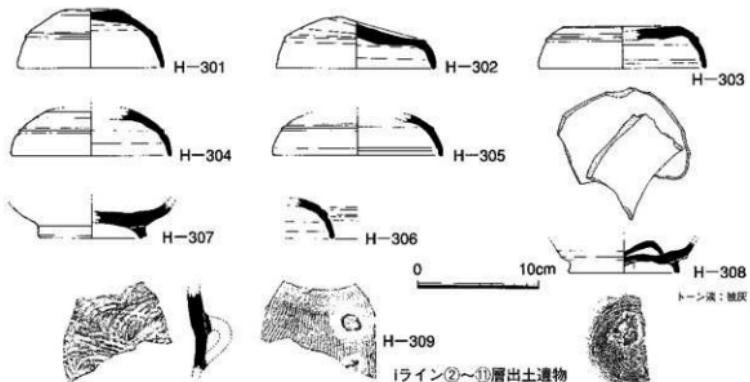
i-i'（以下、iライン）のセクション（第98図）は調査区の南西に位置し、2m以上の堆積が見られた。比較的水平堆積で、大量の土器が出土したため、セクション前後の確実な層位資料として非常に細かく遺物を取り上げた。出土遺物は上層（第98図・①～⑪層）までは7～8世紀の新しい遺物を含むが、⑫層以下は山津1号窯とほぼ同時期の遺物ばかりで、それより新しい遺物は皆無であった。



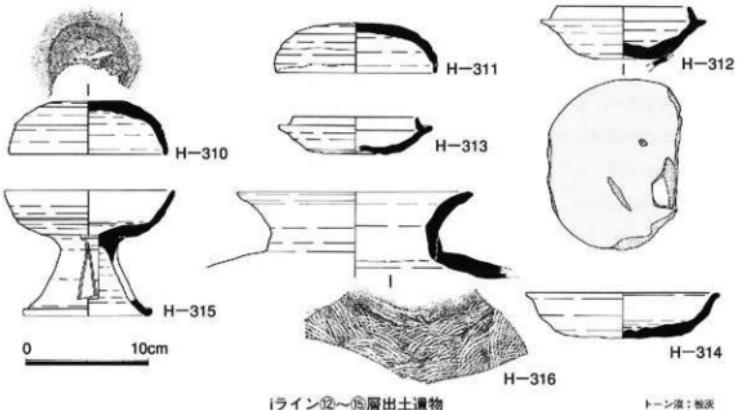
iラインアゼ断面図



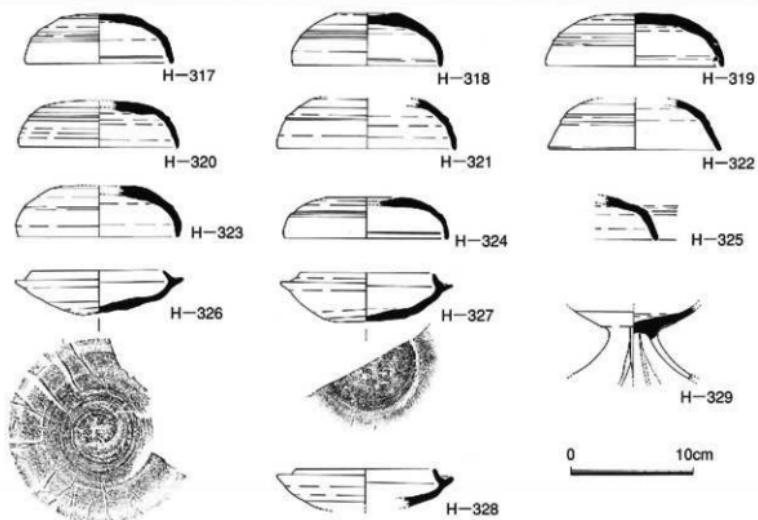
iライン①層出土遺物



第98図 H区 i ラインアゼ出土遺物①



iライン②～⑤層出土遺物



iライン⑤層出土遺物

第99図 H区 i ラインアゼ出土遺物②

これらのことから、この深い灰原の堆積は位置的にみても山津1号窯の灰原であって、その上の層は1号窯廐絶跡に堆積した層と考えられる。

i ラインセクションの出土遺物のうち、H-292~300が第98図・①層出土遺物、H-301~309が②～⑪層出土遺物、II-310~316が⑫～⑯層出土遺物、H-317~329が⑯層出土遺物、H-330~350が⑰層出土遺物、H-351~355が⑯～⑲層出土遺物、H-356~366が⑲層出土遺物、H-367~444が⑲層出土遺物である。また、H-445~462はiラインの層位不明なトレンチの出土遺物である。

H-292・293は壺IIの蓋、このうち、H-292の天井頂部はナデでその周辺はケズリを施している。II-294~296は壺身の小片、H-297はL字縁端部が屈曲する蓋の重ね焼き資料である。II-298~300は壺・壺類の高台片で、H-298・299の底部調整は糸切り→ナデである。

H-301~309はiライン②～⑪層出土遺物である。H-301~306は壺IIの蓋。H-307は高台片、II-308は高台片と甕？との落着資料で、二次焼成を受けていると思われる。H-309は提腕か、把手部分の破片で内外面はタタキ調整である。

H-310~316はiライン⑯～⑯層出土遺物である。H-310・311は壺II、H-310はやや軟質で白灰色を呈する、天井部の調整は回転ヘラケズリ、また工具による条痕が残る。H-311は40%残、(復)口径13.2cm、器高4.1cmを測り、天井の調整は回転ヘラケズリ、稜はナデで僅かに段を作る。H-312・313は壺IIの身でH-312は外面全面に厚く被灰する。H-314は25%残、一見、高壺の壺部と思えたが、接合痕跡はなく底部の調整はナデである。H-315は高壺で焼成が甘く非還元の白茶色を呈している。透かしは一段二方向三角透かしである。H-316は甕で頸部と体部との境で変色が生じている。

H-317~329はiライン⑯層出土遺物である。H-317~325は壺IIの蓋で、H-318は軟質の非還元炎焼成で灰白色を呈している。H-319は二次焼成を受けていると思われ、特に内面の傷みが激しい。H-326~328は壺IIの身である。H-326の底部調整はケズリで、中央部に工具による条痕を残す。H-327は底部にヘラ記号を記している。H-329は高壺の破片で白灰色の軟質である。

H-330~H-350はiライン⑯層出土遺物である。H-330~340は壺IIの蓋で、H-330の天井の調整は周辺ヘラケズリである。H-331・337の天井調整はヘラケズリであるが、頂部に工具によると思われる条痕が残る。H-332は大きく歪み、天井には円形の剥離痕がみられるので置台として転用していると考えられる。H-333は軟質な非還元炎焼成で白褐色を呈し、H-336の天井調整はケズリ→ナデ。H-341は70%残の歪みが激しい蓋で(復)口径8.4cmを測る小型品である、壺類の蓋であろうか、天井には何らかの圧痕のようなものも見られる。H-342~350は壺IIの身で、H-345は完形ながら歪みが著しい。H-346は火膨れがあり、外面に灰と窓壁片が付着する。H-347は歪みが強く、別の須恵器片が溶着し、外面に被灰している、二次焼成か。II-350の底部にはヘラ記号が施されている。

H-351~355はiライン⑯～⑲層出土遺物である。H-351~354は壺IIの蓋で、H-355は壺IIの身、何れも破片でH-355の外面には灰を被っている。

H-356~366はiライン⑲層出土遺物である。H-356~364は壺IIの蓋で、H-358・361・362は軟質な焼き上がりとなっている。II-365は60%残で口径9.0cm、器高4.7cmを測る小型品である、壺類の蓋か、火膨れが見られ、外面に別の須恵器片が付着している。H-366は壺IIの身で細片である。